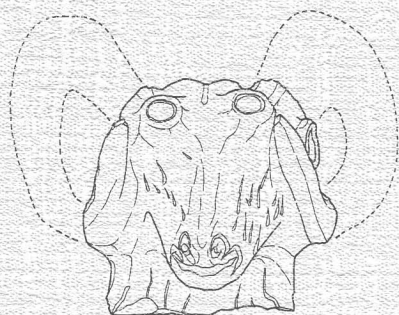


# 史跡 齋宮跡

平成 3 年度発掘調査概報



1992

齋宮歴史博物館





第93次調査区遠景（北から）





左：羊形硯（第91次調査） 右：鳥形硯（第90次調査）



高木町  
松阪市



第1図 平成3年度発掘調査地区 (1 : 10,000)







## はじめに

斎宮跡が、昭和54年3月27日に国史跡となって13年が経過いたしました。この間、史跡の実態解明のための発掘調査体制の充実はもとより、史跡の有効な活用や普及を目途に、徐々にではありますが史跡公園としての史跡環境整備、調査成果の公開と文化財保護の啓発の場としての斎宮歴史博物館の設置等に努め、その成果として多くの人々の来訪を得て好評をいただいているところであります。

しかしながら、史跡を訪れる人々の増加に伴ってその交通機関の整備、地域住民の生活環境整備としての水路整備や上水道の設置、道路改良、個人住宅の増築や改築等、史跡の保存と対峙せざるを得ない諸問題も山積し、これらとの調和のとれた史跡保存のあり方を求め、地元明和町とも協力しつつその実現に努めているところであります。

とりわけ発掘調査は、史跡公有化事業の進捗をみてきた今日でもなお土地所有者各位のご協力を得て進めている部分も多く、また史跡現状変更に伴う発掘調査においても各地権者との調整による様々な要因により必ずしも計画的にまた円滑に進んでいない面もありますが、発掘調査の現地説明会や体験発掘教室などを通じて、少しでも埋蔵文化財保護への理解を深める一助となっているものと自負しております。

ここに公表させていただく平成3年度の発掘調査結果も、調査用地所有者をはじめとする地権者のご理解と文化庁並びに斎宮跡調査指導委員会の諸先生方のご指導、地元明和町や関係各位のご協力の賜ものと感謝いたします。

平成4年3月

斎宮歴史博物館

館長 中 林 昭 一



## 例 言

1. 本書は、斎宮歴史博物館が国庫補助金の交付を受けて平成3年度に実施した史跡斎宮跡の発掘調査の概要をまとめたものである。
2. 明和町教育委員会が、国庫補助金の交付を受け調査主体となって実施した史跡現状変更等に伴う緊急発掘調査の報告書は別途、明和町教育委員会が刊行している。
3. 遺構の実測にあたっては国土調査法による第Ⅵ座標系を基準とし、方位は座標北を用いた。
4. 遺構の時期区分は、「斎宮の土師器（三重県斎宮跡調査事務所年報1984）」による。
5. 遺構表示記号は次の通りである。  
SB；建物 SK；土城 SD；溝 SE；井戸 SA；柵 SF；道路 SX；その他
6. 遺物実測図は、特に標示がない限り実物の4分の1である。
7. 斎宮跡の調査全般については、次の先生方の指導を得た。

京都府立大学学長

門脇禎二

千葉大学教授

北原理雄

椋山女学園大学名誉教授

久徳高文

(財)大阪文化財センター理事長

坪井清足

名古屋学院大学教授

檜崎彰一

三重大大学教授

八賀 晋

名古屋大学教授

早川庄八

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター理事長

福山敏男

皇学館大学教授

渡辺 寛

8. 本概報の編集・執筆は斎宮歴史博物館調査課の吉水康夫、御村充生、大川勝宏、森田幸伸があたり、森脇景子、赤岩 操がこれを補佐した。

また、遺物整理には島村紀久子、角谷和代、鈴木美智子の協力を得た。

## 目 次

I. 調査の経過と概要 .....	1
II. 第90次調査 .....	3
III. 第91次調査 .....	22
IV. 第92次調査 .....	31
V. 第93次調査 .....	37
VI. 第94次調査 .....	52

## 表・挿図目次

〔表〕 1. 平成3年度発掘調査地区一覧 .....	2
2. 第90次調査 時期別遺構分類表 .....	4
3. 第91次調査 時期別遺構分類表 .....	24
4. 第92次調査 時期別遺構分類表 .....	32
5. 第93次調査 時期別遺構分類表 .....	38
6. 掘立柱建物一覧表 .....	55
7. 竪穴住居一覧表 .....	56
8. 斎宮跡発掘調査次数一覧表 .....	57
〔図〕 1. 平成3年度発掘調査地区(1:10,000) .....	巻頭 3
2. 第90次調査 遺構実測図(1:200) .....	5・6
3.     〃     出土遺物実測図(S K 6419・S E 6440) .....	11
4.     〃     出土遺物実測図(S K 6424・6425) .....	13
5.     〃     出土遺物実測図(S K 6418・6428) .....	14
6.     〃     出土遺物実測図(S E 6410) .....	15
7.     〃     出土遺物実測図(S E 6410) .....	16
8.     〃     出土遺物実測図(S E 6410) .....	17
9.     〃     出土遺物実測図(その他) .....	18
10.    〃     出土遺物実測図(その他) .....	19
11.    〃     5間×2間建物群配置図(1:1,000) .....	21
12. 第91次調査 調査区位置図(1:2,000) .....	23
13.    〃     遺構実測図(1:200) .....	25・26
14.    〃     出土遺物実測図(S E 6480) .....	28
15.    〃     出土遺物実測図(S E 6480・包含層) .....	29
16. 第92次調査 遺構実測図(1:200) .....	31
17.    〃     鍛冶山地区周辺遺構模式図(1:1,000) .....	33
18.    〃     出土遺物実測図(S D 2400・S K 6510・6524) .....	35



19.	第93次調査	調査区位置図(1:2,000) .....	37
20.	〃	遺構実測図(1:200) .....	39・40
21.	〃	時期別遺構配置図(1:500) .....	41
22.	〃	中世墓実測図(1:40) .....	44
23.	〃	出土遺物実測図(S K 6549・6551・6552) .....	46
24.	〃	出土遺物実測図(S K 6548・6550) .....	47
25.	〃	出土遺物実測図(S X 6533・6534・6537) .....	48
26.	〃	出土遺物実測図(S E 6530・6535・6536・S K 6545・S D 6555) .....	49
27.	第94次調査	調査区位置図(1:2,000)・遺構実測図(1:200)・遺物実測図 .....	53・54
28.	斎宮跡地区表示 .....		61

## 写真図版

### 巻頭 1. 第93次調査区遠景(北から)

### 巻頭 2. 左：羊形硯(第91次調査出土) 右：鳥形硯(第90次調査出土)

1.	第90次調査	調査区全景(真上から)	
2.	〃	上：西半区全景(東から)	下：東半区調査後(東から)
3.	〃	上：S B 6420(東から)	下：S B 6460(東から)
4.	〃	上：S B 6422(東から)	下：S B 6439・6441・6443(北から)
5.	〃	上：S E 6440(東から)	下：S E 6466(北から)
6.	〃	上：S K 6458・6459(東から)	下：南トレンチ(西から)
7.	第91次調査	上：調査区遠景(北から)	下：調査区全景(北から)
8.	〃	上：中央部建物群(東から)	下：S B 6481(北から)
9.	〃	上：S E 6480(北東から)	下：S E 6490・S B 6495(西から)
10.	第92次調査	上：調査区全景(南から)	下：S A 2800(西から)
11.	〃	上：S D 2400(西から)	下：S D 2404・S K 6524(西から)
12.	第93次調査	上：調査区全景(東から)	下：調査区全景(真上から)
13.	〃	上：S B 6592・6593(東から)	下：S B 6532(西から)
14.	〃	上：S B 6539・6540(北から)	下：S B 6540・6541(北から)
15.	〃	上：S B 6553(西から)	下：S K 6546～6552(西から)
16.	〃	上：S D 6546(北東から)	下：S E 6535(北東から)
17.	〃	上：S X 6533(東から)	下：同 上
18.	〃	上：S X 6534(東から)	下：S X 6537(東から)
19.	第94次調査	調査区全景(北から)	
20.	第90次調査	出土遺物	
21.	〃	〃	
22.	第91次調査	〃	
23.	第93次調査	〃	
24.	〃	〃 上：S X 6533 中：S X 6534 下：S X 6537	

## I. 調査の経過と概要

斎宮跡の顕彰と地域振興のため、地元明和町が中心となり昭和59年から史跡内を会場に毎年開かれている「斎王まつり」も本年で第8回を迎え、はなしょうぶの盛りである6月の第2日曜にあたる平成3年6月9日に行われた。毎年これに併せ発掘調査現地説明会を行っており、本年度最初の計画発掘調査である第90次調査もこれを目標に4月8日より開始した。

この第90次調査区はこれまでの周辺の調査から5間×2間の東西棟で大型の掘立柱建物が規格的に並ぶことが想定されている。今回はその南端の2棟の所在を確認し、あわせて当該区画の中央を南北に貫く溝の追確認を主な目的に、排土置場等の都合から2回に分けて実施した。

調査の結果、想定どおり2棟の掘立柱建物が確認され、平安時代初期の南北120m、東西60mの範囲には5間×2間の東西棟の掘立柱建物8棟が整然と並んでいたことが確認された。さらに調査の終盤には今回検出した井戸4基のうち、上部に現在の排水溝が通る1基を除き3基について専門業者に委託して完掘した。特にそのうちの1基からは櫛3点や斎串、曲物等の木製品が出土し、斎宮跡の発掘調査にとって井戸完掘の必要性を再確認することとなった。

第91次調査は斎宮歴史博物館の南側、斎宮跡発見の端緒ともなった通称古里地区と呼ばれる竹川字中垣内地内に幅12m、長さ52mのトレンチを設定して、7月17日から調査を開始した。ここは博物館建設の際資材搬入路となっていたところで、土が固くしまり、作業は非常に困難であった。また、史跡内でも博物館に近いこともあり、恒例の体験発掘教室もここで実施することとし、参加者の募集を中勢教育事務所から南勢志摩教育事務所管内までひろげ、遠方から通う熱心な子供たちの参加を得て7月29日から8月1日までの4日間実施した。

調査は当初から目的のひとつとしていた奈良時代の井戸を完掘したほか、その所在を想定していた奈良時代古道の延長部が北に迂回していることが明らかとなり、中世の掘立柱建物群などが検出された。また、遺物にも羊形硯の出土など多大な成果を得るとともに、中世の遺構群は今後斎宮以降の当地域を検討するうえで重要な資料を提供するところとなった。

第92次調査は当初冬に予定していたが、土地所有者の意向で急遽8月5日から開始した。

方格地割りの広がる通称中町地区に位置する当調査区は、東に隣接する第46次及び第88次調査から東西方向の区画溝と柵列、これに直交する南北方向の区画溝、奈良時代古道の側溝等の検出が予想された。そこで、これら周辺の調査成果に基づき、畑の北半部の約220㎡について調査を実施した。遺構は予想された区画溝、柵列、奈良時代古道の側溝のほか調査区南東隅では何基かの土坑を重複して検出した。とりわけ東西方向の区画溝に並行する柵列は、さらに西へ続き、昭和54年度のトレンチ調査で検出された柱穴を経てなお西に延びることが想定され、南北溝よりも古いことが確認された。このことから、当該地周辺では整然とした方格地割りに

方位は合うものの、東西方向で大きくズレた区画が一時期に存することが明確となった。

第93次調査は、斎王の森南側に広がる地域の将来の史跡環境整備に向けた基礎資料を得、あわせて近鉄利用者や斎宮歴史博物館の来館者への広報の意味もあって近鉄斎宮駅のすぐ北側、斎宮字内山で約1,500㎡にわたり9月30日より調査を実施した。調査期間中には調査の進展に伴い週1回を原則として調査速報を作成し、入館者に発掘調査を実施中であることの周知に努めたが、実際に現地を訪れた人々は少なかった。しかし、11月24日に開催した発掘調査現地説明会では約150名の参加者を得て好評を得た。

また、第93次調査に引き続き御館地区で第94次調査を11月18日から実施した。斎王の森の南に広がる水田地帯は以前から粘土採取が行われ、少なからず遺構が削平されていると言われ、その遺存状態や東西方向の区画溝の存否を確認することを目的に幅4m、延長約60mのトレンチを設定して行った。結果は、予想どおり攪乱がひどく、僅かに溝1条を確認したのみである。しかし、遺物には平安時代後期の土器がややまとまって出土し、かつて周辺に当該時期の遺構が存したことをうかがえる。

一方、今年度から新たに面的な広がりをもつ調査区について航空写真撮影を実施することとなり、本年度は第90次調査区と第93次調査区について斜め写真と立体視及び図化の可能な垂直写真を専門業者に委託してラジコンヘリコプターにより撮影した。

さらに、上記の発掘調査以外に斎宮歴史博物館が担当する史跡現状変更に伴う発掘調査のうちホーム延伸に伴う調査では、調査区が線路敷に近接して危険であるため終電車通過後から始発電車までの間に作業を実施しなければならず、1月下旬の深夜、寒風の中の発掘作業となり、遺構検出・掘り下げ、実測や写真撮影等に困難を極める調査となった。（吉水康夫）

調査次数	地区名	調査面積㎡	調査期間	地籍・地番	所有者	備考	区分
89-1	6ADM-O	200	H.4.1.6～ H.4.1.16	明和町斎宮字内山 3043-5	近畿日本鉄道株式会社	駅舎改築	4
89-2	6AGI-M	1,190	H.4.1.20～ H.4.3.25	明和町斎宮字東加座2432-2 他	北村和吉他	盛土工事	2
89-3	6ADM-N・O	160	H.4.1.20～ H.4.1.24	明和町斎宮字内山 3060-4 他	近畿日本鉄道株式会社	ホームの延伸	4
90	6AFH-A・B	1,420	H.3.4.8～ H.3.7.16	明和町斎宮字西加座2680 他	谷口清雄他	計画発掘調査	2
91	6ABH-F	624	H.3.7.17～ H.3.12.5	明和町竹川字中垣内393 他	明和町	計画発掘調査	1
92	6AGN-A	220	H.3.8.5～ H.3.9.9	明和町斎宮字鍛冶山2734-3	竹内玄之	計画発掘調査	2
93	6ADN	1,500	H.3.9.30～ H.4.1.17	明和町斎宮字内山 3045-12 他	乾秀治他	計画発掘調査	1
94	6AEM	220	H.3.11.18～ H.4.1.21	明和町斎宮字御館 2942	明和町	計画発掘調査	1

第1表 平成3年度発掘調査地区一覧



## Ⅱ. 第90次調査

### 6AFH-A・B（西加座地区）

本年度最初の計画調査は4月8日から、旧斎宮跡調査事務所の東、斎宮字西加座2680番地ほかで実施した。現況は畑地で、調査区は南北28m東西52mの約1,420㎡にわたる。なお、今回の調査は排土置場等の都合から西半区→トレンチ調査→東半区の順に区切って実施した。

これまでの周辺の調査では、今回の調査区の南側で第86次調査(平成2年度)が実施され、東西方向の道路と溝が検出されている。さらにその南側で実施した第83次調査(平成元年度)では、柵と溝に囲まれた区画と建物群や、方格地割りの1ブロックの中央を南北方向に縦断する道路の西側溝が検出されている。また、北側では第51次調査(昭和58年度)、第61次調査(昭和60年度)、第73次調査(昭和62年度)により、平安時代初期から平安時代前期にかけての建て替えによって重複した掘立柱建物が100棟近くも検出されており、なかでも平安時代初期と考えられる5間×2間の大型建物が規則的に配置されていることが想定されていた。

今回の調査は、規則的配置のみられる建物群の南端にあたる2棟を確認することと、区画の中央を南北方向に分断する道路遺構の検出を主たる目的とした。

基本的層序は、Ⅰ；耕作土、Ⅱ；灰褐色土(遺物包含層)、Ⅲ；地山(黄褐色土又は黒色土)で、基本的には、黄褐色土上面で検出したが、北半では地山面が黒色土であったため、その上面で検出した。その深さは、北で約0.5m、南で約0.2mである。

#### (1) 奈良時代後期の遺構

この時期の遺構には、竪穴住居2棟、土坑2基がある。

竪穴住居S B 6421は調査区の西端中央で検出した。規模は3.5m×3.1mで隅丸方形を呈す。東壁にカマドの痕跡と思われる焼土が見られたが、平安時代前期の掘立柱建物S B 6415・6416の柱穴にその大部分が削平されていた。床面は、遺構検出面から0.1mと比較的浅く、貼り床の痕跡が部分的に見られた。長軸方向はE 4°Nで、区画溝の方位と一致する。これらの前後関係は、先行するものからS B 6421→S B 6416→S B 6415の順である。遺物は土師器杯・皿・甕、製塩土器、須恵器小壺・杯・鉢等が出土した。竪穴住居S B 6446は、今回の調査で検出した竪穴住居の中では最も大きく約4.7m×4.3mの規模で、調査区のほぼ中央で検出した。カマドは明確に検出できなかったが、東壁に焼土と支柱と考えられる甕片がみられ、東壁に位置したと思われる。遺物は、土師器杯・皿・甕、須恵器甕片が出土した。

S K 6419は、調査区の西部中央に、S K 6449は、北部中央に位置する土坑である。S K 6419は、平安時代前Ⅱ期の土坑S K 6418を掘り下げていく段階で検出した。その大部分をS K 6418により削平されていたが、底部のみを6.0m×3.0mの規模で検出した。深さは遺構検出面から

約0.5mで、埋土は黒色土である。遺物には、土師器杯・皿・甕・鍋等がある。S K 6449は、長径7.0m、短径2.0m、深さ0.1mの浅い土塚で、埋土の重複状況からS K 6449がS K 6451より古い。遺物は、土師器碗・杯・甕等が出土した。

## (2) 平安時代初期の遺構

この時期の遺構には、掘立柱建物7棟、竪穴住居1棟、土塚5基、井戸2基がある。

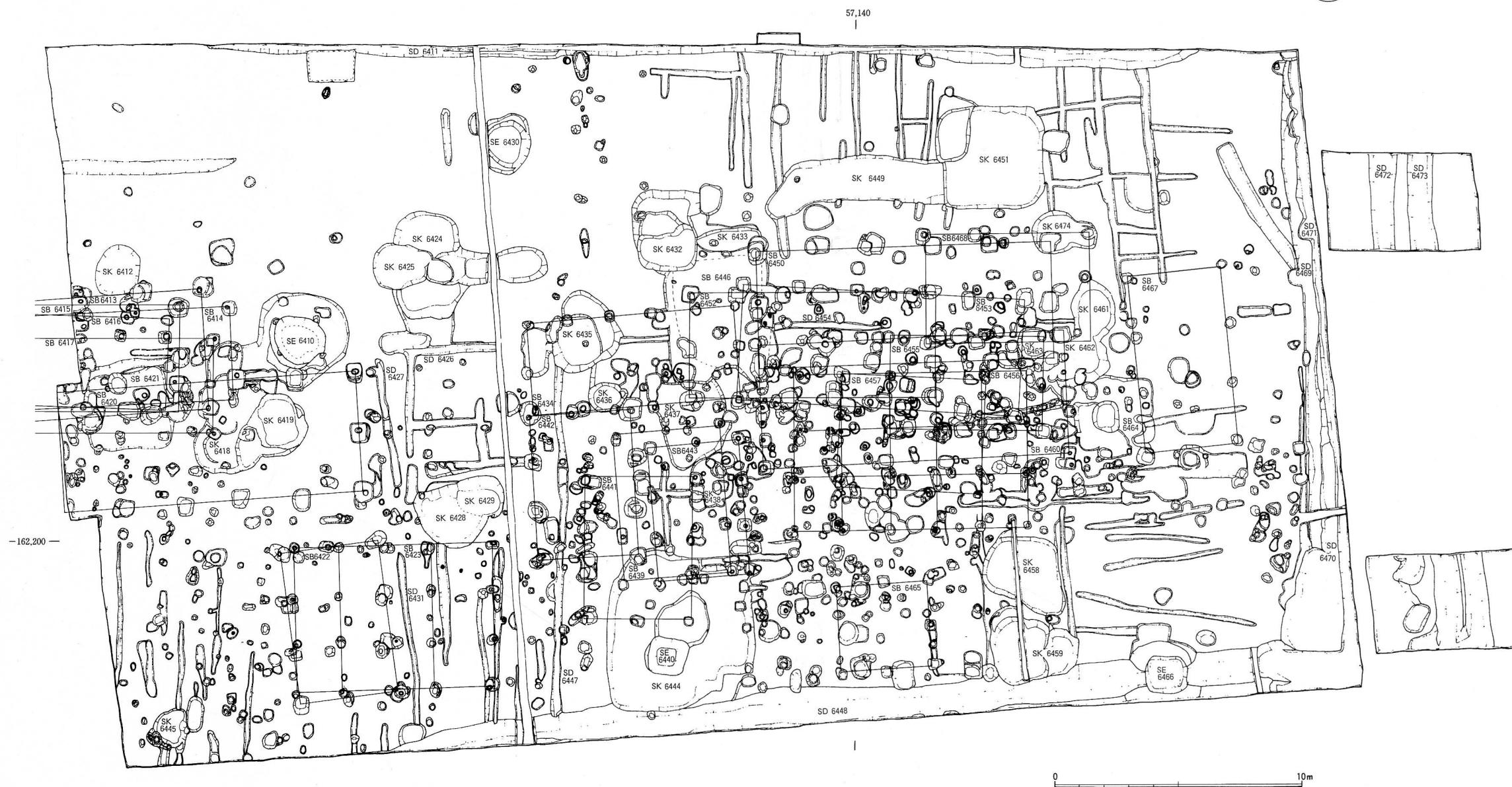
掘立柱建物S B 6414・6420は調査区西端中央で検出した。S B 6414は、柱掘形が一辺0.6m、深さ0.5m前後で、建物規模は梁行が3.8m、桁行は調査区外に続くため不明である。S B 6420は、5間×2間の大型掘立柱建物で、棟方向はE 4° Nを示す。この建物は、これまでの調査

		遺 構 の 種 別			
		S B	S K	S D	S E
奈良時代後期		6421・6446	6419・6449	—————	—————
平安時代	初期	6414・6420・6450・6460 6464・6465・6467・6468	6432・6444・6445 6458・6459	—————	6430 6440
	前Ⅰ期	6416・6417・6422・6455	6425・6451	6447	6466
	前Ⅱ期	6413・6415・6439・6441 6442・6443・6452・6453 6457	6412・6418・6424 6428・6429・6433 6435・6461・6462 6463・6474 (6438)	6454  ( 6427・6431 )	6410
	中期	6434	6436・6437	—————	—————
	後Ⅰ期	6456	—————	6411	—————
	後Ⅱ期	6423	—————	—————	—————
鎌倉時代		—————	—————	6472	—————
不明		—————	—————	6426・6448 6469・6470 6471・6473	—————

( )は平安時代前期のなかで時期細分できなかったもの

第2表 第90次調査 時期別遺構分類表

90次



第2図 第90次調査 遺構実測図(1 : 200)





で検出されているシンメトリーに並ぶ建物群の西側列のうち最南棟にあたる。柱掘形は一辺0.8m、深さ0.5m前後で、隅丸方形を呈し、埋土は黒褐色土で、建物の規模は桁行12.0m、梁行4.8mである。S B 6450・6460は調査区東寄りのほぼ中央付近で検出した5間×2間の大型の掘立柱建物である。その前後関係は、S B 6450がS B 6460より古い。S B 6450は、柱掘形の一辺が0.7m～0.8m、深さ約0.4mで、埋土は黒褐色土である。規模は桁行12.0m×梁行4.8m、遺物には土師器杯・皿・碗・甕、須恵器杯・壺・甕が出土している。なお、この建物については現段階では平安時代初期としたが、同時期の建物S B 6460との重複関係等から奈良時代後期までさかのぼる可能性がある。S B 6460は、S B 6420と同様、シンメトリーに並ぶ建物の一つで、東側列の最南部の4棟目にあたる。この建物もこれまでの調査の成果から、当初より想定していた地点で検出した。棟方向がE 4°Nで、規模は桁行12.3m、梁行4.9mである。埋土は黒褐色土で一部に径30cm程度の柱痕跡がみられた。

竪穴住居S B 6464、掘立柱建物S B 6467・6468は、調査区西部中央で検出した。平安時代初期の竪穴住居の検出例は斎宮跡全体では4例目にあたり、方格地割りの内側では3例目にあたる。S B 6464は、南北3.6m、東西3.2mの長方形を呈し、東壁のほぼ中央にカマドをもつ。同時期の掘立柱建物S B 6460との切り合いからS B 6464がS B 6460に先行するものである。遺物は、カマド内部から土師器甕・鍋が、床面から土師器杯・皿、須恵器甕片等が出土した。S B 6467は、3間×2間の南北棟である。柱掘形は、一辺0.5m、深さ0.3m前後である。遺物は少量の土師器片が出土した。S B 6468は3間×2間の東西棟で、棟方向はE 1°Nで、この時期にはめずらしく方格地割りの方位とは異なる。埋土の切り合い関係から同時期のS B 6420やS B 6460等の5間×2間の建物よりは新しい。S B 6465は調査区南端部中央で検出した2間×2間の小型の建物である。農道を挟んだ北側で実施された第51次調査及び第61次調査においても同時期の建物が検出されているが、これらはいずれも総柱建物である。

土壇5基のうちS K 6432は調査区の北部に、S K 6444・6445・6458・6459は調査区の南部に位置する。S K 6432は、長径3.0m、短径2.5mの隅丸方形を呈し、底部に段差が見られる。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕片が少量出土した。S K 6445は、長径1.5m、短径1.2mの不整円形を呈する土壇である。遺物は、土師器皿・鍋・甕、須恵器壺・甕などが出土している。S K 6458・6459は、2基の土壇が重複するものと考えたが、出土遺物や埋土の状況等を考慮すると一つの土壇になる可能性もある。S K 6458は、長径3.0m、短径2.8mの不整円形を呈し、出土遺物は土師器杯・皿・甕・鍋・甕片、須恵器甕・蓋片等が比較的多く出土した。S K 6459は、一辺2.6mの不整円形を呈し、遺物は土師器杯・皿・鉢・高杯・ミニチュア土器の甗等が出土した。

井戸S E 6430は、調査区の北東部で検出した。この井戸については、井戸の西端をかすめる

ように排水管が埋設されており、危険防止のため遺構面から約2.0mで掘削を取り止めた。遺物は、土師器杯・皿・甕・高杯、須恵器碗・壺等が出土した。S E 6440は調査区の南端中央で検出した井戸で、一辺1.5mの隅丸方形を呈し、深さは2.4mである。井戸の壁面は内側へ傾斜しており、底部は直径約1.0mの円形を呈する。これまで斎宮跡で完掘した井戸の中ではもっとも浅い。遺物は、土師器杯・皿・甕・高杯・ミニチュア土器の鍋、須恵器杯蓋、製塩土器等のほか、井戸の上部からは鳥形硯の頭部片が出土した。なお、このS E 6440の上部では井戸の廃棄後に掘られた一辺約6.0m、深さ0.2mの隅丸方形の広くて浅い土坑S K 6444が検出されている。遺物は比較的多く出土し、土師器杯・皿・甕・杯蓋・竈・高杯、須恵器杯・甕等がある。

### (3) 平安時代前Ⅰ期の遺構

この時期の遺構には掘立柱建物4棟、土坑2基、溝1条、井戸1基がある。

掘立柱建物S B 6416・6417・6422は調査区の西部で検出した。S B 6416・6417は、ほぼ同じ場所で検出し、ともに桁行が調査区外にのびるため規模は不明である。棟方向は、S B 6416がE 2° Sで、S B 6417がE 0° Wである。S B 6422は、3間×2間の南北棟で、桁行6.0m、梁行4.0mを測る。棟方向はN 8° Wで区画溝の方位とややずれる。柱掘形は一辺0.6m～0.8m、深さは0.5m前後である。

土坑S K 6425は調査区北部やや西寄りに、土坑S K 6451は調査区北部の東寄りに位置する。S K 6425は、長径7.0m、短径1.2mの隅丸長方形を呈し、平安時代前Ⅱ期の土坑S K 6424と重複する。埋土は上層が礫混じりの黒褐色土、下層が黒色土で遺物のほとんどが上層からの出土である。出土した遺物は、整理箱にして2箱ほどで、土師器杯・碗・皿・甕・杯蓋・小型鍋等がある。S K 6451は、一辺約4.0mの隅丸方形を呈し、深さは約0.2mと浅い。遺物は比較的多く、土師器杯・皿・甕・碗・高杯・鍋、須恵器杯蓋等が出土した。

井戸S E 6466は、調査区の北東隅で検出した。上部を鎌倉時代後半～室町時代始めまで機能していたと考えられる溝S D 6448に削平される。規模は直径約2.0m、深さ約4.5mである。平安時代前Ⅰ期の遺物のほとんどが検出面から約1.5m前後の深さで出土しており、埋没年代は平安時代前Ⅰ期と考えられるが、形成時期は平安時代初期まで遡る可能性もある。完掘したにもかかわらず、出土した遺物は比較的小さい。

### (4) 平安時代前Ⅱ期の遺構

この時期の遺構には掘立柱建物9棟、土坑11基、溝1条、井戸1基がある。

掘立柱建物S B 6413・6415は調査区西端部で、S B 6439・6441・6442・6443は調査区中央部で、S B 6452・6453・6457は調査区東部中央付近で検出した。S B 6413・6415が位置する場所は、平安時代初期から平安時代前Ⅱ期にかけての掘立柱建物が数多く集中して検出された場所である。S B 6413は、桁行が調査区外に続く、東西3間以上、南北2間の東西棟である。棟方



向はE 4° Nである。S B 6415についても桁行が調査区外へのびるため規模は不明で、柱掘形は一辺0.8m前後、深さ0.7mから0.8mと比較的大型である。S B 6439・6441・6442・6443はすべて3間×2間の南北棟である。S B 6439は、桁行6.0m、梁行4.3mで、柱掘形は一辺約0.5m、深さ0.5m前後で、棟方向はN 5° Wである。S B 6441は、S B 6439に先行するもので、一部で径約10cmほどの柱痕を検出した。S B 6442は、柱掘形が一辺0.8mから0.9m、深さ0.5m前後と大きく、各柱穴からは比較的多くの遺物が出土した。棟方向はN 4° Wである。S B 6443は、桁行5.4m、梁行3.6mと今回検出した掘立柱建物の中では最も規模が小さい。S B 6452・6453はともに5間×2間の東西棟で、棟方向や規模にやや違いがあるものの、ほぼ同一場所に位置しており、建て替えの可能性が考えられる。建物の新旧関係はS B 6452が古く、S B 6453が新しい。なお、S B 6453の柱穴の一つからは石帯が出土した。S B 6457は3間×2間の小型の建物で柱掘形も小さい。

土坑S K 6412・6418・6424・6428・6429は調査区西部に位置する。S K 6412は直径約2.0m、深さ0.2mで、土師器杯・甕、須恵器甕、灰釉陶器片等が出土した。S K 6418は長径約4.0m、短径約3.0mの楕円形を呈し、奈良時代後期の土坑S K 6419と重複している。出土遺物は、土師器杯・皿・碗、灰釉陶器碗・壺、須恵器杯蓋等がある。S K 6424は、長径4.0m、短径2.5mの楕円形を呈し、比較的多くの遺物を出土した。器種は、土師器杯・皿・甕・高杯、土錘、須恵器杯蓋・甕・壺等がある。そのほとんどが斎宮跡標識遺構のS K 3127(前Ⅱ期古)期に属する。S K 6428は、同時期の土坑S K 6429と切り合い、その新旧関係はS K 6428が古い。ともに埋土は暗黒褐色土で、S K 6428が土師器杯・小碗、須恵器杯の他、墨書の認められる灰釉陶器片等を、S K 6429では土師器杯・皿・甕・鍋、灰釉陶器段皿、須恵器壺等が出土した。

土坑S K 6433・6435は調査区中央部で、S K 6461・6462・6463・6474は調査区の東部で検出した。いずれも小規模な土坑である。S K 6461からは、土師器杯・皿・甕、須恵器甕・壺・灰釉陶器水注・皿等が、S K 6462は、土師器杯・皿・甕・鍋、須恵器甕・杯蓋、灰釉陶器碗片が、S K 6463からは、土師器杯・皿、黒色土器片、灰釉陶器碗が、S K 6474からは土師器片が少量出土した。

S D 6454は、調査区のほぼ中央で東西に約31m、南北に約15mを検出した幅0.2m～0.3m、深さ約5cmのL字状に走る溝で、溝底のレベルが一定でないため排水溝とは考えにくい。

井戸S E 6410は、調査区の西部中央で検出した斎宮跡では比較的大きな井戸である。掘形は検出面で、径約4.0m×3.0mの楕円形を呈するが、約0.5m掘り下げた地点で一辺約2.0mの隅丸方形、深さ約1.5m付近で壁面がオーバーハングして径3.0m以上、深さ4.0m以下で一辺1.5mの隅丸方形となった。約3.5m掘り下げたあたりから湧水が始まり、約4.5mで底に達した。埋土は、暗茶褐色土(第1層)→暗茶褐色粘質土(第2層)→暗黒茶褐色粘質土(第3層)→青灰色砂礫

層(第4層)である。第1層～第3層上部から土師器杯・皿・甕、黒色土器、灰釉陶器小壺・皿、緑釉陶器片等が、第3層下部から第4層にかけて多量の土器片のほか櫛、曲物、斎串、桃の種、木片等が出土した。検出面から約1.5mの深さである第1層～第2層にかけて平安時代中期の遺物が、第2層から第4層にかけて平安時代前Ⅱ期の遺物が出土した。したがって、この井戸は平安時代前Ⅱ期にはじまり、平安時代中期には埋没したものと考えられる。

他に平安時代前半としか判別出来なかった遺構にS D6427・6431がある。

#### (5) 平安時代中期の遺構

この時期の遺構に掘立柱建物1棟、土坑2基がある。

掘立柱建物S B6434は調査区のほぼ中央で検出した。柱掘形は一辺0.4m、深さ0.3m前後で、規模は5間×2間の東西棟である。この時期の建物は、比較的区画溝の方位に規制されないものが多いが、この建物ではE 5°Nと溝の方位とはほぼ一致する。

土坑S K6436・6437は調査区のほぼ中央部に位置し、いずれも少量の土器が出土したのみである。S K6436はS B6434と重複し、その新旧関係はS B6434が古い。

#### (6) 平安時代後Ⅰ期の遺構

この時期の遺構に掘立柱建物1棟、溝1条がある。

掘立柱建物S B6456は、5間×3間の総柱建物である。柱掘形は0.3m前後、深さ0.5mで、棟方向はE 1°Nである。この時期の建物で、これまで斎宮跡では4間×2間、3間×2間の総柱建物は検出されているが今回の規模で総柱建物が検出されたのは初例である。

溝S D6411は調査区北端で東西約40mにわたって検出された溝である。埋土は茶褐色土である。出土遺物には土師器杯・皿・甕、土錘、須恵器片等がある。

#### (7) 平安時代後Ⅱ期

この時期の遺構は掘立柱建物1棟のみである。

掘立柱建物S B6423は調査区南西部で検出された。規模は3間×2間の身舎に、東面及び西面に庇をもつ。柱掘形は小さく、一辺0.3m前後、深さ約0.4mで、埋土は茶褐色土である。棟方向はN 2°Eを示す。

#### (8) 鎌倉時代の遺構

この時期の遺構には北トレンチで検出した溝S D6472がある。南トレンチでもその延長部分を検出しており、南北に走る溝である。

#### (9) その他

溝S D6426・6448・6469・6470・6471・6473はいずれも時期不明である。しかし、調査区東端で検出したS D6469・6470からの出土遺物には、中世の遺物に混じって平安時代前期の土師器杯・甕・高杯片等が見られた。

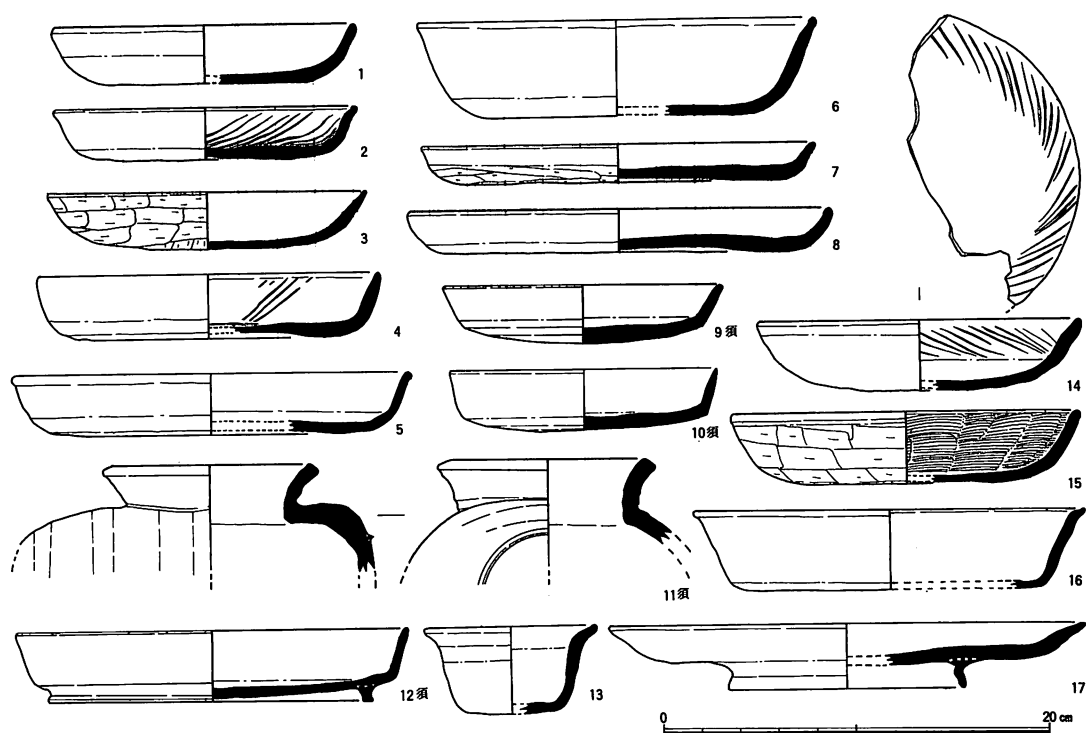
## (10) 遺物

遺物は整理箱にして約220箱である。今回出土した遺物は、遺構の時期に対応して平安時代前Ⅰ期及び前Ⅱ期のものが多い。

平安時代初期の土坑S K 6419からは土師器杯・皿・甕、須恵器杯蓋等が出土した。(1～8)は、(3)を除いていずれもb手法によるものである。Cタイプ(奈良型)の杯である(4)や須恵器杯(9・10)などは奈良時代まで遡る可能性があり、混入もしくはS K 6419によって削平された土坑の遺物であることも考えられる。

同じく平安時代初期の井戸S E 6440からは、土師器杯・碗・台付皿、ミニチュア鍋、須恵器杯・横瓶等が出土した。横瓶(11)は体部上半を残すのみで、口径11.3cmである。ミニチュア土器の鍋(13)は、口縁端部をヨコナデ、内面を指オサエ及びナデ調整する。口径9.2cm、器高4.6cmである。杯(14)は口径16.8cm、器高3.7cmで内面に粗い放射状暗文がみられる。(15)は外面を全体にヘラ削りをするc手法によるもので、内面全体を密に横ハケメ調整をほどこす。

平安時代前Ⅰ期の土坑S K 6424・6425からは比較的残りのよい好資料を得られた。S K 6424からは土師器杯・皿・甕・高杯、須恵器杯蓋・甕・壺等が出土した。土師器杯には、口縁端部



第3図 第90次調査 出土遺物実測図 SK 6419 : 1～10、SE 6440 : 11～17 (1 : 4)

が外反気味にたちあがる A タイプ(19～23)と口縁部が外方にはほぼまっすぐたちあがる B タイプ(24～28、32・33)がある。(31～33)は、内面に放射状暗文及び螺旋状暗文がみられる。(31・32)は、口径12cm前後の小型、(33)は口径17.1cmの大型の杯である。皿(29・30)はどちらも A タイプで、(29)は口縁部をヨコナデする e 手法、(30)は外面底部のみをヘラケズリをする b 手法によるものである。(34)は、口径10.8cm、器高8.9cmの把手付鍋である。体部外面にはヘラケズリとタテハケメを施し、内面 下半では横方向にヘラケズリを施す。(35)は、口径20.7cm、器高8.8cmの鍋で体部外面 にタテハケメを施す。

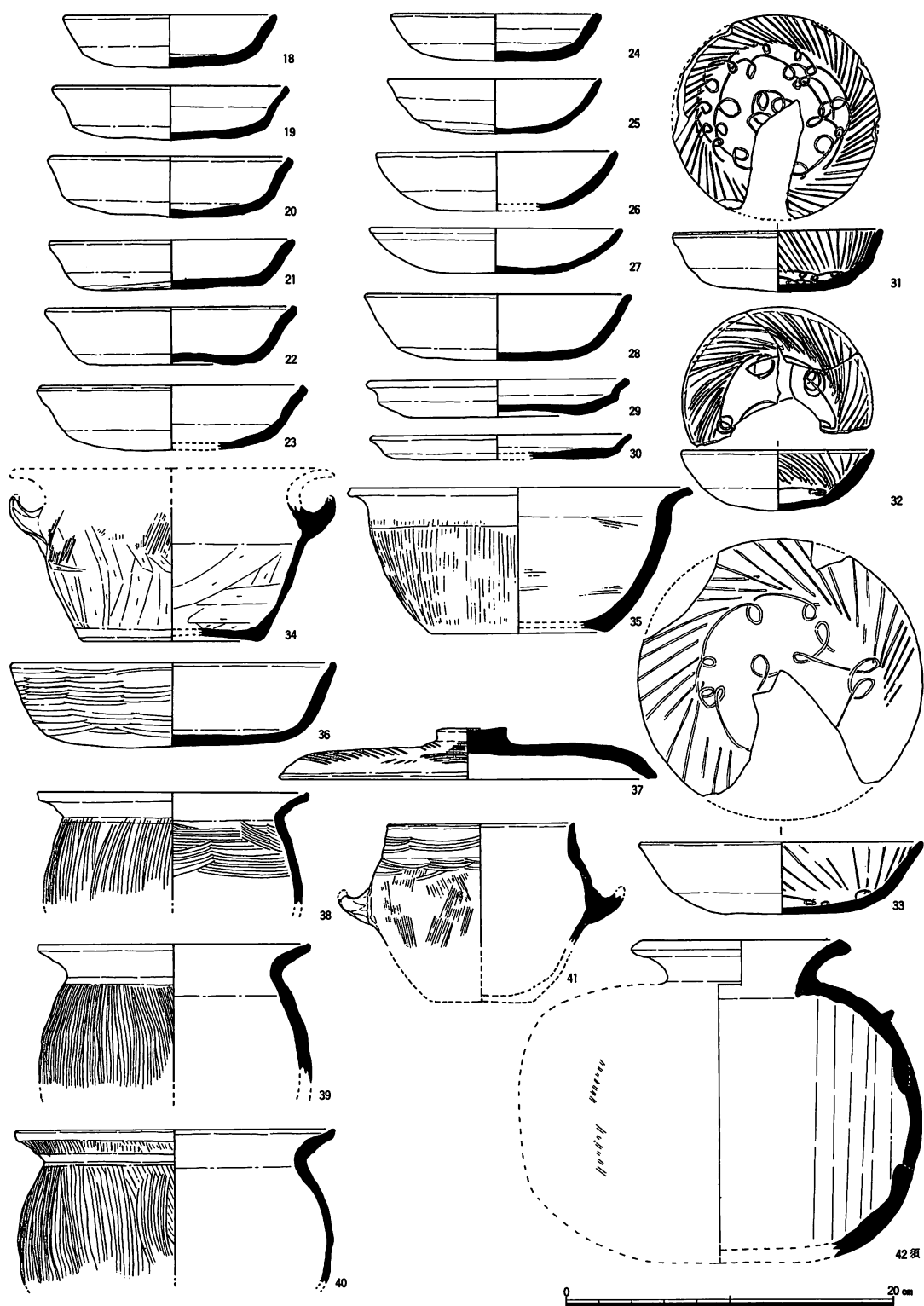
S K 6425からは土師器杯・碗・皿・甕・把手付鍋、須恵器の横瓶等が出土した。土師器の甕(38～40)は、いずれも体部外面を密にタテハケメを施し、口縁部を強く外反させ、端部が上方向に立ち上がるものである。(41)は、口径11.4cmの比較的小型の把手付鍋で、口頸部に横方向のミガキを、体部外面には縦方向のハケメを施した後にミガキを施す丁寧な作りである。横瓶(42)は口径11.8cmを測り、体部外面にはタタキがみられるほか粘土紐の痕跡がみられる。

S K 6418は、平安時代前Ⅱ期の土塚で土師器杯・碗・皿・甕、灰釉陶器碗・壺、須恵器杯蓋等が出土した。(43)は、口縁部が外方に真っ直ぐのびる。(44～47)は、口縁端部がやや外反する杯で、調整はすべて e 手法によるものである。皿も口縁部が外方にまっすぐにのびるもの(48・49)と、外反するもの(50～52)とがある。灰釉陶器碗(53)は、口径17.1cm、器高5.2cmで、釉薬はツケガケによるものである。土師器甕(55)は、口径17.8cm、残存高15.1cmで、体部上半に粗い縦ハケメを施す。

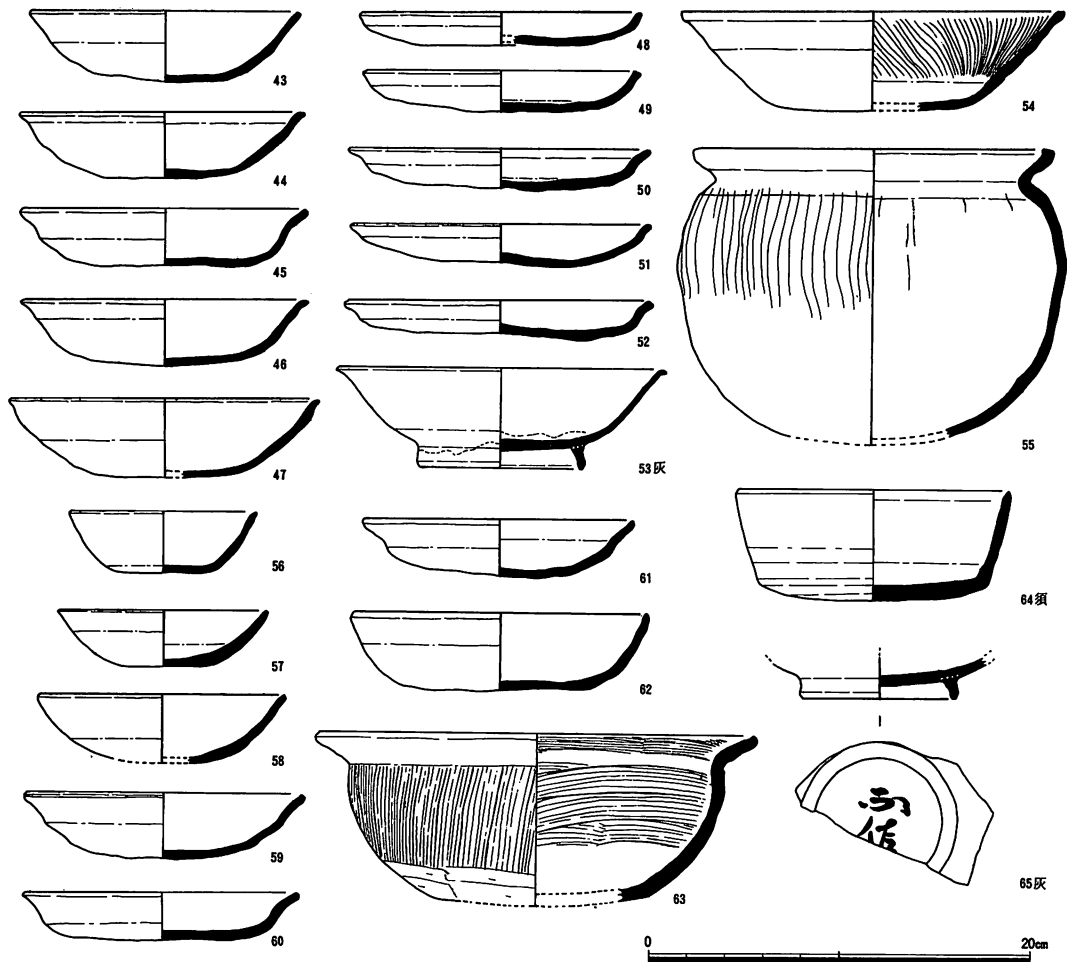
同時期の土塚 S K 6428からは、土師器杯・碗・皿・甕、須恵器杯、灰釉陶器皿等が出土した。(56・57)は、口径10cm前後の小型の B タイプの土師器碗、(58～61)は A タイプの土師器杯である。土師器鍋(63)は、口径22.8cm、器高約9cm、体部外面を密にタテハケメ調整、底部をヘラケズリ、口縁部内面から体部内面にかけては横ハケメを施す。灰釉陶器皿(65)には底部に墨書が認められるが判読不能である。

井戸 S E 6410からは、土師器の杯・皿・甕・高杯・竈、黒色土器、須恵器の杯蓋・壺・甕、灰釉陶器の碗・皿・小瓶の他、横櫛、斎串、曲物底板、用途不明木製品等様々な遺物が出土している。土師器杯は、A タイプ(66～75・83)と B タイプ(76～82・89)にわかれ、調整はすべて e 手法によるものである。なお、(75)には外面底に「大」とも読める墨書がみられる。(89)には放射状暗文、螺旋状暗文がみられた。皿についても同様に A タイプ(86～88)、B タイプ(84・85)にわかれる。黒色土器(94・95)は、内面だけが黒い黒色土器 A 類で、体部外面にヘラケズリ、内面全体にミガキを施す。(95)には底部見込み部分に螺旋状暗文がある。甕は体部が球形に近いもの(90～92)と細長いもの(93)がある。いずれも体部外面を縦ハケメ、底部はヘラケズリを施し、口縁端部はいずれも上方に立ち上がる。竈(97)は口径24cm、器高28cmで、体部外面



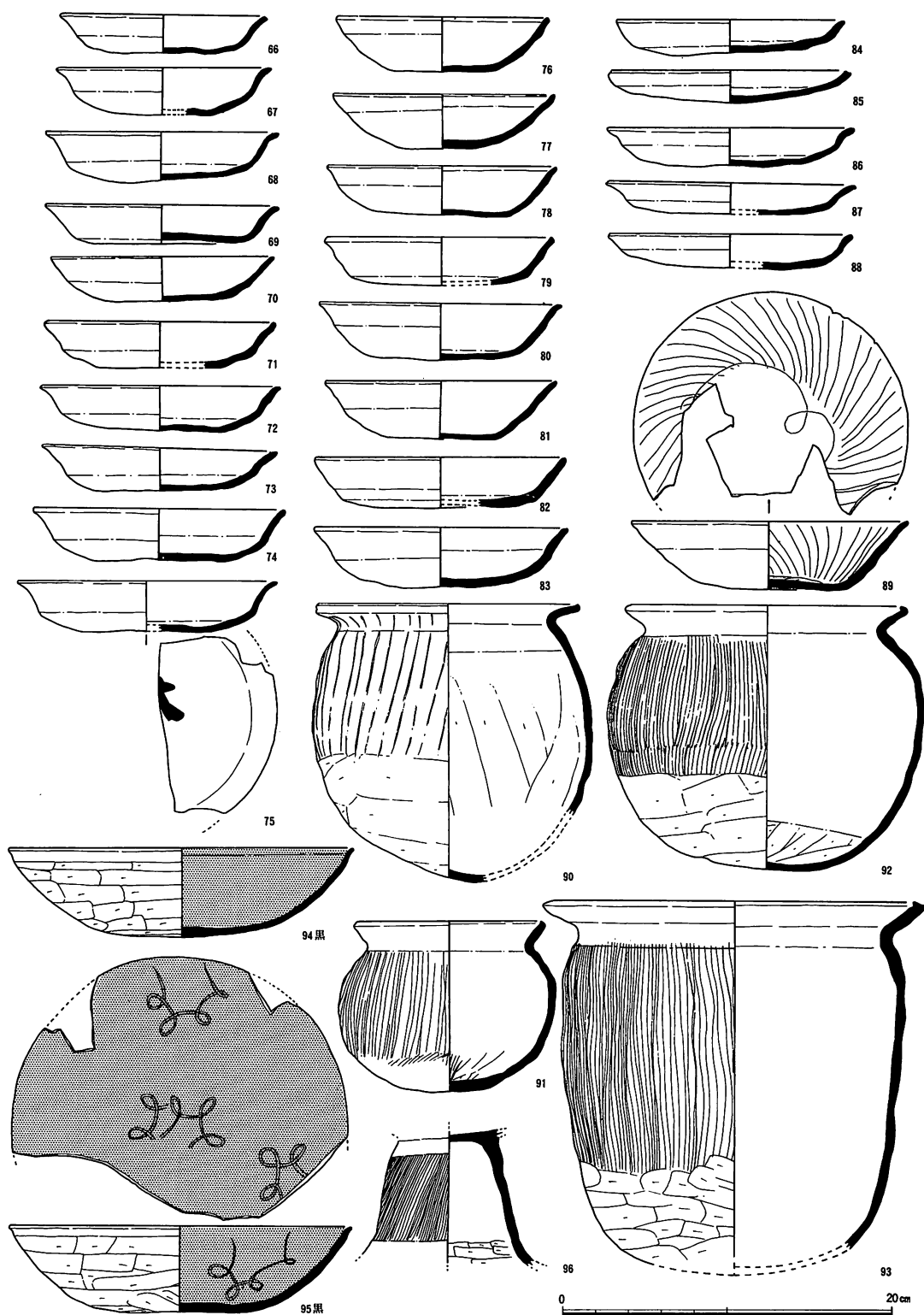


第4図 第90次調査 出土遺物実測図 SK6424:18~35、SK6425:36~42(1:4)

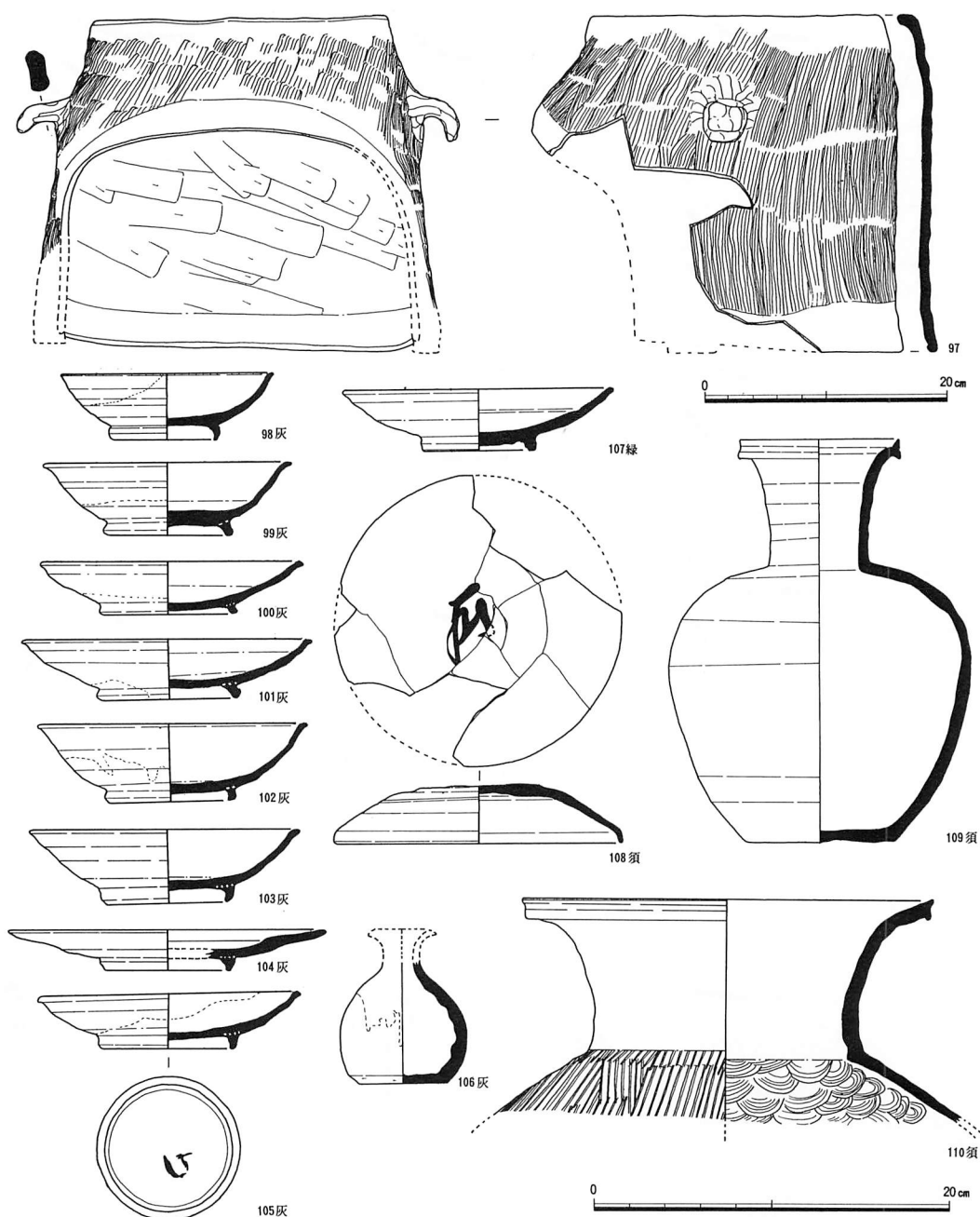


第5図 第90次調査 出土遺物実測図 SK6418：43～55、SK6428：56～65（1：4）

を密に縦ハケメ調整を、内面全体にはヘラケズリを施す。灰釉陶器碗・段皿(98～105)は、黒笹90号窯期に相当するものばかりである。(105)は、外面底部に判読不能の墨書が描かれているものもある。灰釉陶器小瓶(106)は残存高6.8cmで口縁部は欠落している。須恵器杯蓋(108)は天井部中央に「厨」と読める墨書がある。長頸壺(109)は井戸の底に近い深さ4.0mの湧水地点で検出されたため体部外面に黒く鉄分が付着している。口径9.8cm、残存高22.8cmである。甕(110)は、口縁部と体部上半の一部を残すのみで、外面と内面にタタキがみられる。横櫛(111～113)は、深さ4.0m前後で出土した。今回出土した3点のうち、(111)は最も残りがよく幅9.3cm、高さ3.9cm、厚さ7.5mmである。曲物底板は、(114)が推定口径17.4cm、(120)が推定口径23.4cmである。斎串は大きなもの(116)と小さなもの(121)の2点出土した。(116)は長さ15.7cm、幅1.2cmで確実な切り込みは上部に4カ所のほか、下部にも数カ所の切り込みらしきものがある。用途不明木製品には(115・117・119)がある。中でも(119)は、両側面に約3cmの等間隔で切り込みがあり、



第 6 図 第 90 次調査 出土遺物実測図 SE6410 : 66~96 ( 1 : 4 )

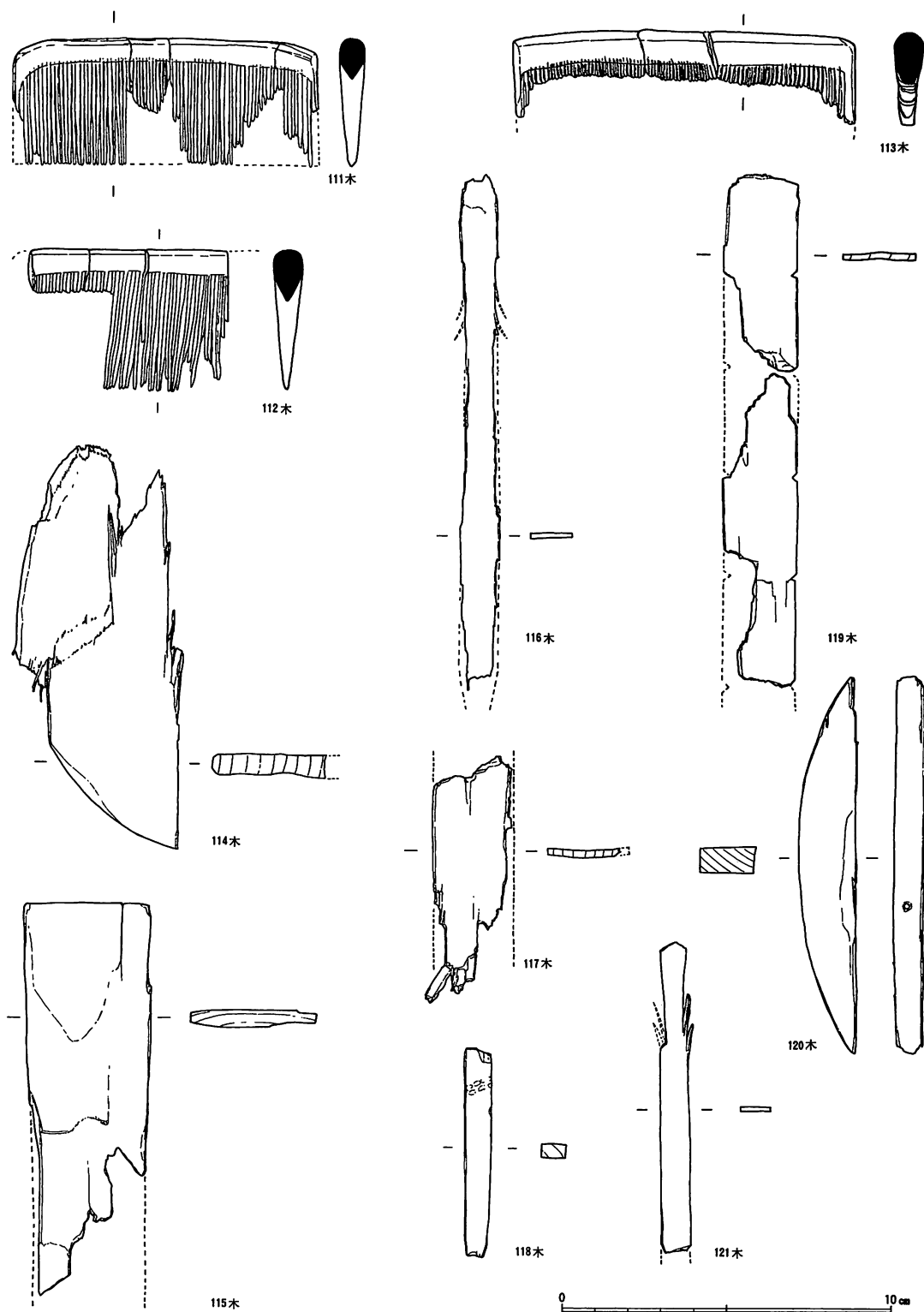


第7図 第90次調査 出土遺物実測図 SE6410: 97 (1: 6)、98~110 (1: 4)

物差しとも考えられるものである。

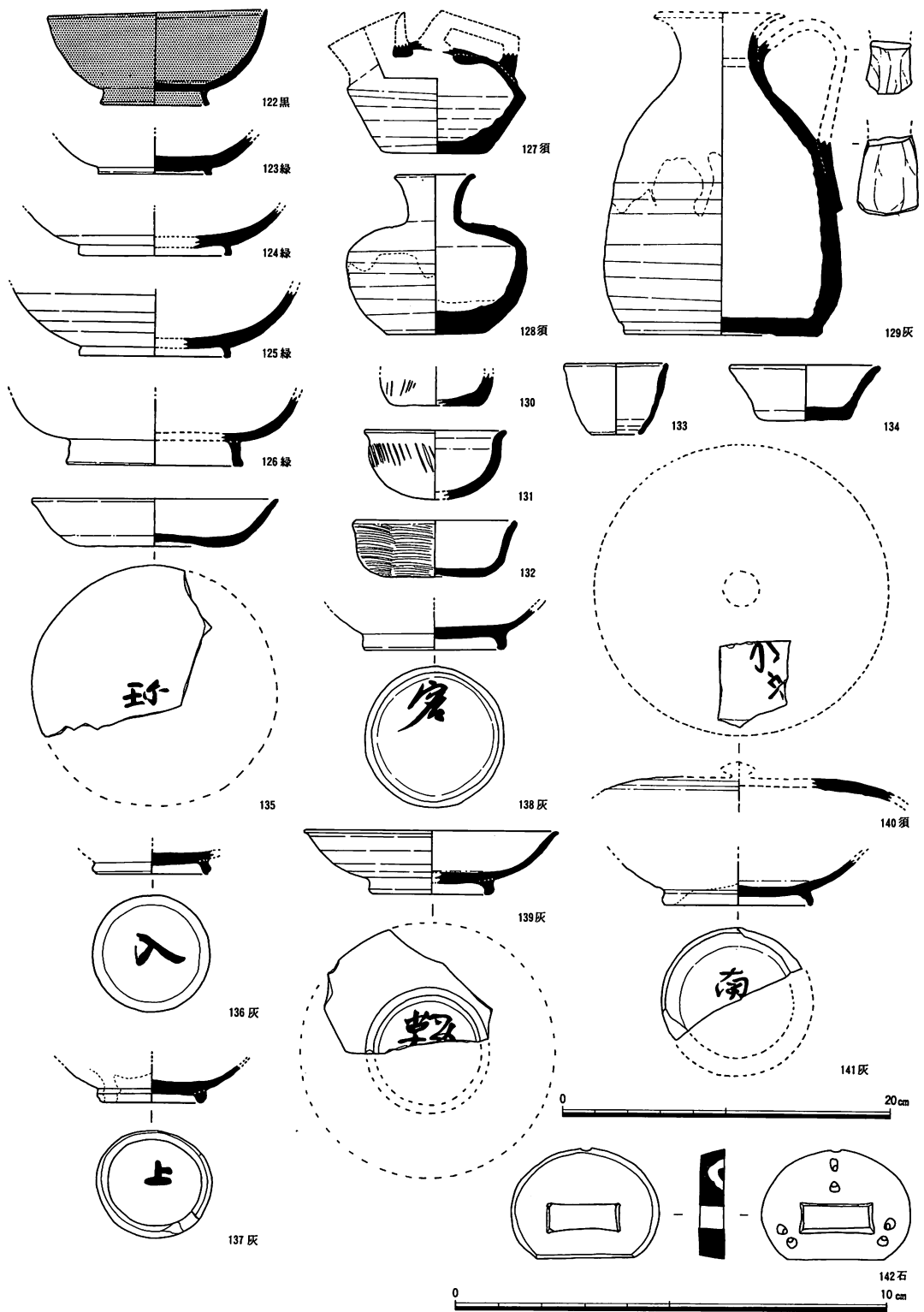
その他、特殊遺物に緑釉陶器(123~126)、ミニチュア土器(130~134)、墨書土器(130~141)、石帯(142)、鳥形硯の頭部片(143)、羽毛状線刻入り陶器片(144・145)、鳥形鈕付平瓶の把手片(146)がある。

ミニチュア土器には土師器甕(131)・杯(132)・甌(133)・鉢(134)がある。(131)は、口径8.9cmで、



第 8 図 第90次調査 出土遺物実測図 SE 6410 : 111~121 ( 1 : 2 )





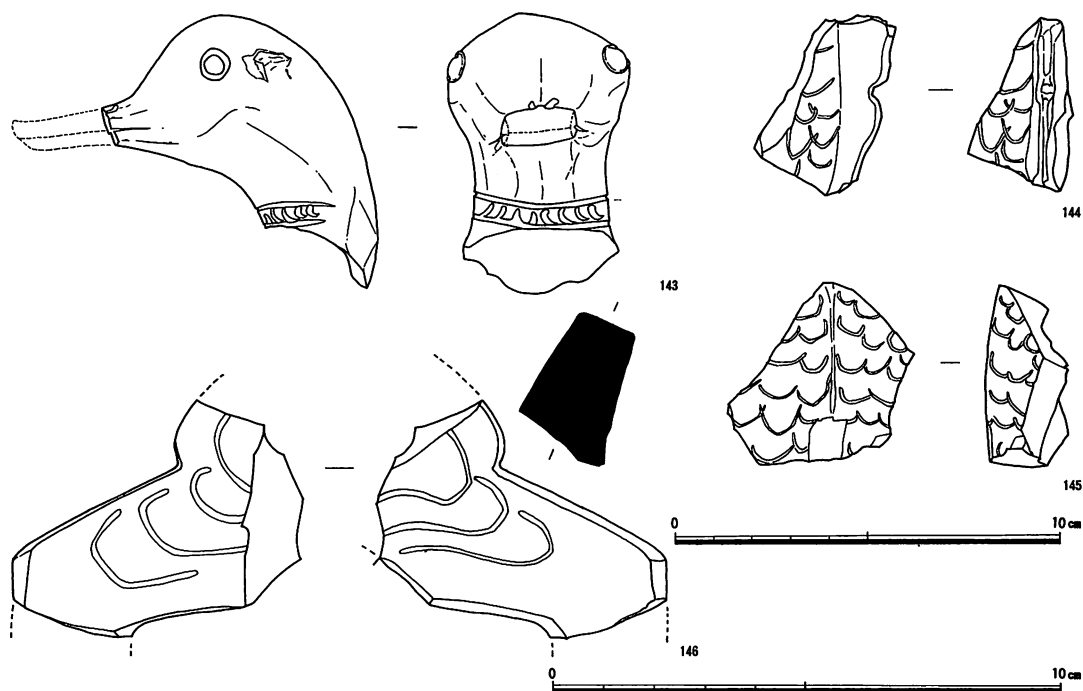
第 9 図 第90次調査 出土遺物実測図 その他の出土遺物 122~141 (1 : 4)、42 (2 : 3)

体部外面に粗い縦ハケメ、内面底部に強い指オサエを施す。杯(132)は、体部外面全体に丁寧なミガキ調整を施し、色調は赤褐色である。甌(133)は、器面全体にナデ調整を施し、口径6.4cm、器高4.3cmである。鉢(134)は、器面全体にナデを施し、口径9.2cm、器高3.4cmである。

墨書土器のうち(135)は、土師器皿の高台底に「玠」と読める。(136・137)は、灰釉陶器の高台で「入」・「上」と読め、(138)は「客」か。(139・141)は、それぞれ「鞍」・「南」と読める。(140)は、須恵器杯蓋の上面に「水部」と読める。水部司に関わる墨書は、第37～4次調査(昭和56年度)、第75次調査(昭和62年度)で出土しており、今回の資料で3例目である。石帯(142)は、3.3cm×2.5cmの大きさの丸軋で、かがり穴をはっきりと確認できる。丸軋は今回の出土で斎宮では8例目にあたる。鳥形硯(143)の出土は、斎宮跡では2例目の出土である。頭部のみの出土で、残念ながらくちばしの部分と胴部を欠いている。羽毛状線刻入り陶器片(144・145)も平城京出土の鳥形硯蓋と類似しているの、これらも鳥形硯の一部と考えられる。

#### (11) まとめ

今回の第一の調査目的は、第51次調査や第61次調査で検出された計画的配置のみられる大型の掘立柱建物群に続く建物の確認にあった。調査の結果、当初からの想定どおりS B 6420、及びS B 6460を検出することができた。両棟とも、これまでに検出されている建物と同じ規模、棟方向を示す。今回検出された建物の東西間の間隔は16m、S B 6420とS B 4077との南北方向



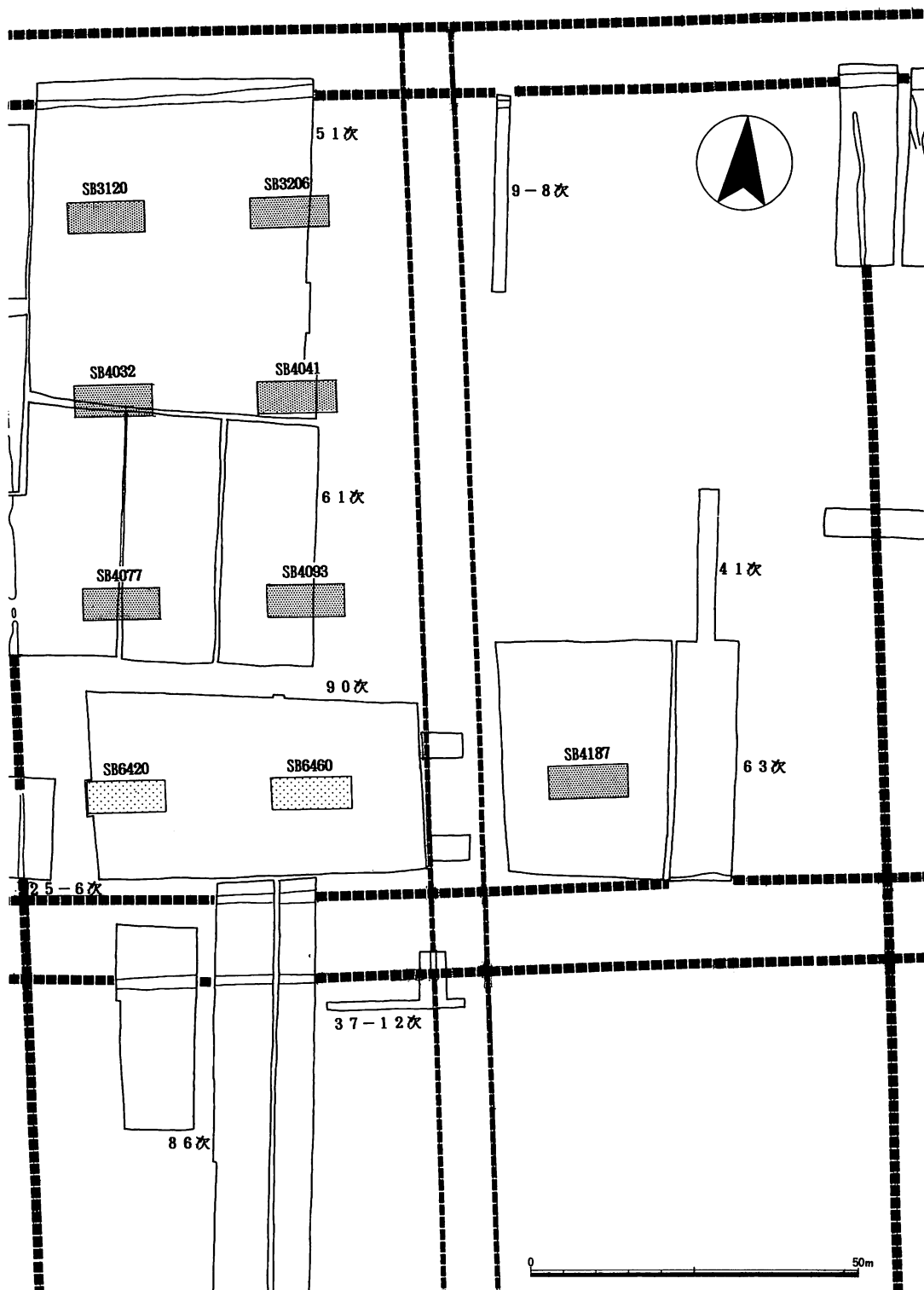
第10図 第90次調査 出土遺物実測図 その他の出土遺物 143～145 (1 : 2)、146 (2 : 3)

の間隔は30m、S B 6460とS B 4093との南北方向の間隔29.8mと建物間の距離も一定であることを考えると、これまでに検出した建物の続きとみて間違いはない。また、今回の調査区のすぐ東側では昭和60年度に第63次調査を実施しており、再検討した結果、現在想定している南北道路を挟んで対称的な位置に同規模の建物S B 4187を検出しており、更に東側に5間×2間の大型建物群が並び立つ可能性もでてきた。今回の調査においても以前の調査と同様に5間×2間の建物の周囲には建て替えと思われる建物を数多く検出した。S B 6460の周囲では、平安時代後期の建物を検出しており、少なくとも平安時代初期～平安時代後期まで建物の建て替えが続くのに比べ、S B 6420の周辺では、平安時代前Ⅱ期までの建物しか検出できず、それ以後は空地になったと思われる。

次に第二の調査目的として、第84次調査(平成元年度)において検出された平安時代初期の溝S D 5870の検出にあった。この溝は方格地割りの1ブロックの中央を南北に縦断する道路の側溝と考えられている。当初は、調査区の東側でその溝を検出できると想定していたので、東半区の調査を実施する前に調査区の東側に約6.0m×4.0mの規模で北トレンチと南トレンチを設定して調査を実施した。その結果、ここではS D 5870に該当するような溝は検出できなかった。しかし、東半区の調査でS D 5870に相当する可能性のある溝S D 6471を検出することができた。この溝は、中世から近世にかけて攪乱をうけているので確証はないが、溝底近くの埋土が南北道路の側溝と同じく黒褐色土であったことや中世～近世の遺物に混じって、比較的多くの平安時代前半代の遺物が見つかっていることから考えると、今回検出したS D 6471は、S D 5870の延長に相当する溝である可能性は高いと考えられよう。

今回の調査は、遺物においても貴重な発見があった。鳥形硯とS E 6410から出土した木製品である。鳥形硯は、平城京や大阪府野々上遺跡、愛知県黒笹4号窯等で出土しているが全国的にみてもたいへん貴重で、斎宮跡では2例目の出土である。出土した鳥形硯は頭部の破片のみの出土であった。

最後に木製品については、今回の出土品の中に用途不明の木製品が何点かあるが、残念ながら文字の書かれているものは、一点もなかった。しかし、今後井戸の完掘は斎宮跡の調査にとって極めて重要な意味をもつものであることが再認識されることとなった。(御村充生)



第11図 第90次調査 5間×2間建物群配置図(1:1,000)

### Ⅲ. 第 91 次 調 査

#### 6 A B H－F（中垣内地区）

第91次調査は、斎宮歴史博物館の南方約200mの、かつて古里遺跡と呼称された地域にあたる。調査期間は平成3年7月17日から同12月5日までである。調査区は国土座標にあわせて南北方向に52m、東西方向に12m、面積624㎡を設定した。

古里・中垣内地区周辺は、昭和45年以来数次にわたって調査が続けられており、奈良時代・鎌倉時代を中心とした遺構が検出されてきている。こうした史跡西部の傾向に対して東部に平安期の遺構分布密度が濃いこととは対照性を示している。

今回の調査区周辺では、南側で昭和46年度に第2次調査(古里遺跡A地区)が、北側で昭和49年度に第7次調査(古里遺跡E地区)が実施されている。第2次調査では3棟の掘立柱建物が、第7次調査では2間×2間の総柱建物1棟を含む6棟の掘立柱建物や、第3次調査区(古里B区)につづく北西－南東方向にカーブする鎌倉時代の溝、これに切られる奈良時代の溝の他、奈良時代の緑釉陶器と思われる変色した鉄鉢形の施釉陶器が出土した井戸が検出されている。また、県道改良に伴う第76－15次調査(昭和62年度)では、史跡の東部へつづく古道の側溝と思われる溝S D 170がみついている他、室町時代の土師器鍋や皿の破片を多量に含んだS K 6370・6374・6376・6377などの土坑や、一石五輪塔がみついている。

今回の調査は、直線的に延びてくるS D 170が本調査区まで続くのかどうかを確認するとともに、第7次調査で東半分が検出されている井戸を完掘して奈良時代の良好な資料を得、あわせて、任意に設定されていた第2・第7次調査区を重複させることで、これらにも国土座標を取り付けることなどを目的とした。

明黄褐色の砂礫の混じった地山面で遺構は検出し、基本的には地表面から造成盛土、旧耕作土である黒色土、地山面となり、一部にかつての床土にあたる明褐色土がその上に堆積している。地表面との差は北で0.3m、南で1.3mで、地山面や旧耕作土上面のレベルでみると、本調査区内は0.4mほど南にゆるやかに傾斜しており、現況が旧竹神社跡地から東南東に傾斜しているのとは異なっている。

調査の結果、今回検出した遺構は、奈良時代～室町時代の掘立柱建物12棟、土坑2基、井戸3基で、当初想定された古道の側溝S D 170は当調査区へはおよばなかった。遺構は調査区北部に密度が高く、南半ではまばらになる。また、遺物としては井戸から多量の土器が出土した他、羊形硯・石製品・土製品が出土している。

#### (1) 奈良時代の遺構

掘立柱建物2棟、井戸1基がある。S B 6481は調査区の北西の隅にある3間×2間の建物で





ある。西側では径60cmほどの円形の柱掘形が並ぶが、東側では他の柱穴との重複で不明瞭になっている。土師器の甕片が出土しているが、詳細な時期はわからない。S B 6495は、調査区中央の3間×3間の建物で、柱間が1.3mと他の建物に比べ極端に狭い。柱掘形は長径50～60cmの楕円形で、土師器の杯・甕片が出土している。奈良時代中期のものとみられる。

井戸S E 6480は、第7次調査で東半分が調査されている。遺構面下約4.5mで底に達する。上面の直径約6.3mで、礫層を掘りぬいた底では径約1.2mになり、若干の地下水が湧きだしたが、有機質の遺物は出土しなかった。遺物は、第7次調査で出土した緑釉陶器の鉄鉢と同一個体の破片が出土したのをはじめ、遺構面下1.0～2.0mで多量の土器が出土した。奈良時代中期のものである。

## (2) 平安時代の遺構

掘立柱建物2棟、井戸1基がある。S B 6483は調査区の北東隅に検出した3間×2間の建物で、第7次調査で確認されているものである。径40～60cmの円形の柱掘形で、土師器片が出土しており、平安時代でも後半のものであろう。S B 6485も、調査区の北東隅の3間×2間のもので、第7次調査で確認されている。今回の調査区内で検出した柱穴は径40～50cmの円又は楕円形で、第7次調査区側に当たる東側の桁行筋の柱穴が長方形あるいは長楕円形になるのとは若干異なる。土師器片が出土しているが、詳細な時期は不明である。

S E 6490は調査区のほぼ中央部にある。直径は約3.5mほどで、遺構面から深さ約4.6mで底になる。上層で平安時代末期を中心とした土師器皿・甕や土錘が出土している。

## (3) 鎌倉時代の遺構

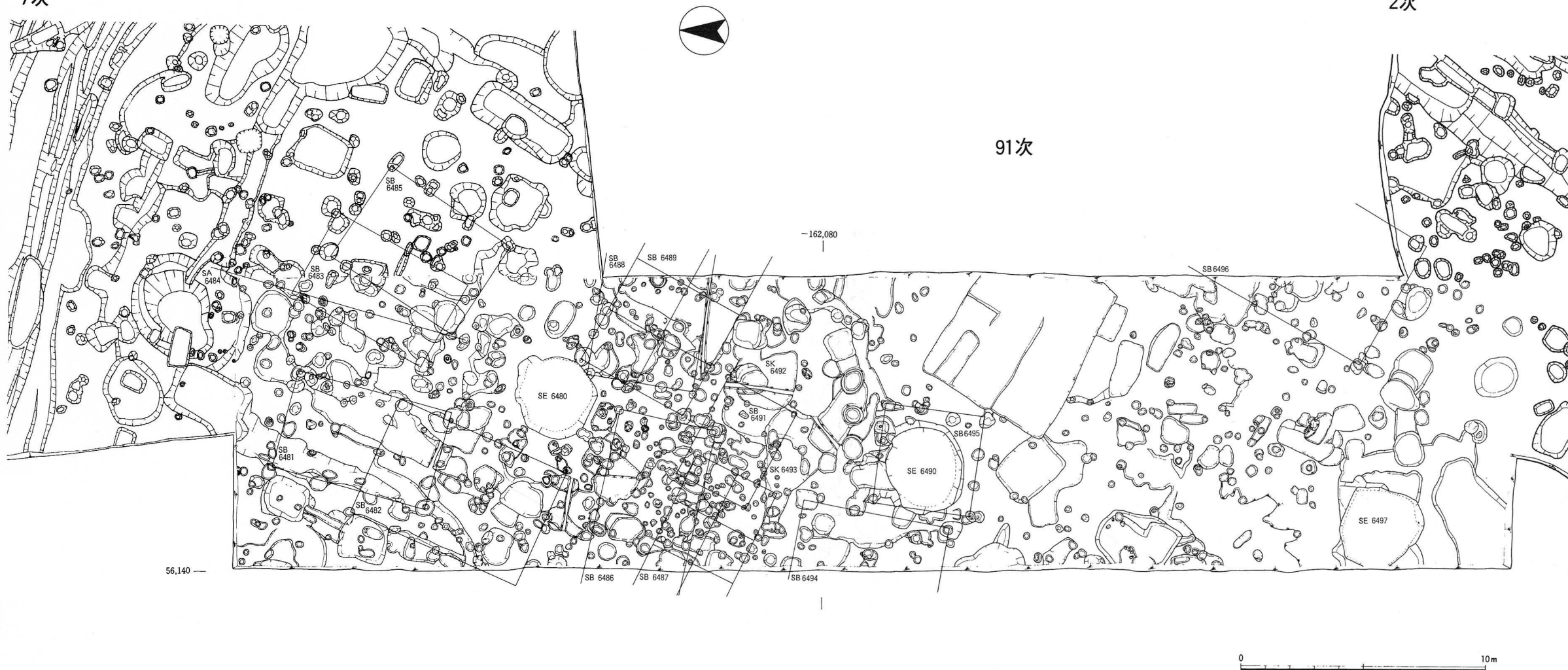
調査区中央のS K 6492がある。東西4.1m、南北3.0m、深さ約20cmの不定形で土師器皿・鍋、山茶碗が出土し、藤澤編年のⅢ－7段階以降、鎌倉時代後半にあたる。

	遺 構 の 種 別		
	S B	S K	S E
奈良時代	6481・6495	——	6480
平安時代	6483・6485	——	6490
鎌倉時代	——	6492	——
室町時代	6482・6486(?) 6487・6489 6491・6496	6493	6497
不 明	6488・6494	——	——

第3表 第91次調査 時期別遺構分類表

7次

2次



第13図 第91次調査 遺構実測図(1 : 200)



#### (4) 室町時代の遺構

今回の調査区で最も多くの遺構が検出され、掘立柱建物 6 棟、土壇 1 基、井戸 1 基がある。S B 6482 は S B 6481 と重複する 4 間×2 間の掘立柱建物で、径 35cm ほどの円形の柱穴が並ぶ。遺物には土師器皿・鍋片、白天目茶碗、山皿片がある。S B 6486 は調査区の西にのびていく東西棟で、梁行 2 間、桁行では 3 間分がみつまっている。柱穴は径 30cm 強である。土師器片の他、土錘・砥石が出土している。S B 6487 は総柱建物で、梁行 2 間、桁行 2 間分があり、これも調査区の西側にのびていくと思われる。土師器皿・鍋片や陶器片が出土している。S B 6489 は調査区の東側へのびていく総柱建物である。梁行 2 間、桁行 2 間分があり、S B 6487 とは棟方向を同じくしている。土師器皿・鍋片や陶器片が出土している。S B 6491 は柱間が約 1.5m、柱穴の直径が 20~30cm と非常に小規模な東西棟で、南側桁行筋の柱穴には根石を置いている。S B 6496 は調査区の東南隅に位置し、一部が第 2 次調査区にのびており、梁行 3 間に桁行 3 間分がある。柱穴は直径 40cm 前後で、土師器皿・鍋片や、瀬戸の灰釉四耳壺の破片などの陶器類も出土している。S K 6493 は調査区中央にあり、S B 6487・6491 と S K 6492 を切っており、土師器皿・鍋片や陶器片が出土している。S E 6497 は調査区南の直径 3.5m ほどの井戸で、今回完掘はしなかった。井戸の上層から瀬戸産の施釉陶器や山茶碗、常滑産陶器、土師器皿・鍋片が多量に出土している。室町時代でも後半に属する。

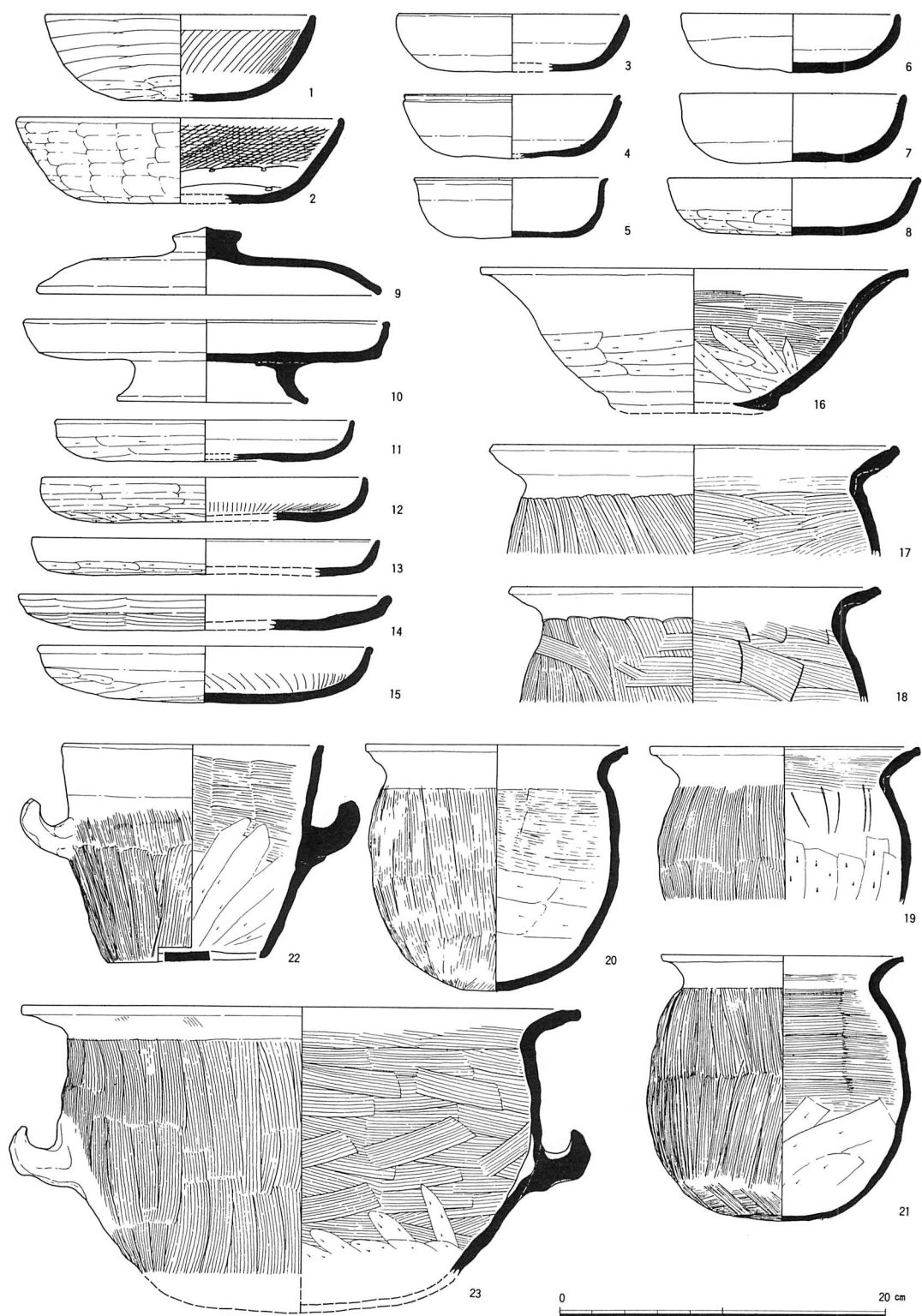
以上の他に出土遺物が微細なため時期決定ができない遺構がある。S B 6494 は調査区のほぼ中央の 3 間×? 間の掘立柱建物で、柱掘形は一辺 70~80cm の方形で、埋土も漆黒色で他のものとは異なる。奈良~平安時代に属するものであろう。S B 6488 は S B 6489 と重複するが前後関係は不明である。棟方向が S B 6486 に近いため、室町時代に属する可能性がある。

#### (5) 遺物

第 91 次調査での出土遺物は整理箱にして約 85 箱ほどである。

遺物のまとめとしては、第 7 次調査分をふくめて最も出土量の多い S E 6480 の概況についてのべる。出土遺物の種類には、土師器には杯・蓋・皿・鉢・甕・甑・鍋・竈片が、須恵器には杯・鉢・長頸壺・鉄鉢があり、緑釉陶器とみられる施釉陶器の鉄鉢もある。遺物は、東半分がすでに掘削されているため遺構面から深さを決めて取り上げ、斎宮跡標識遺構の S K 1970 期のものが大勢をしめるようだが、時期的に若干さかのほりそうな資料も多く、明確に時期を分離できなかった。

第 7 次調査の際の主要な遺物もあわせて掲載したが、特に鉄鉢形の土器が多いことが注目できる。(29) は緑釉とみられる施釉陶器である。器表面の釉薬は二次的に火をうけたのか黒褐色に変色しており、剥落も著しい。器壁外面下部の調整はていねいにヘラケズリ調整されている。(30・31) は須恵器である。(30) は底部外面は同心円状にていねいにケズリ調整される。(31) は他よ

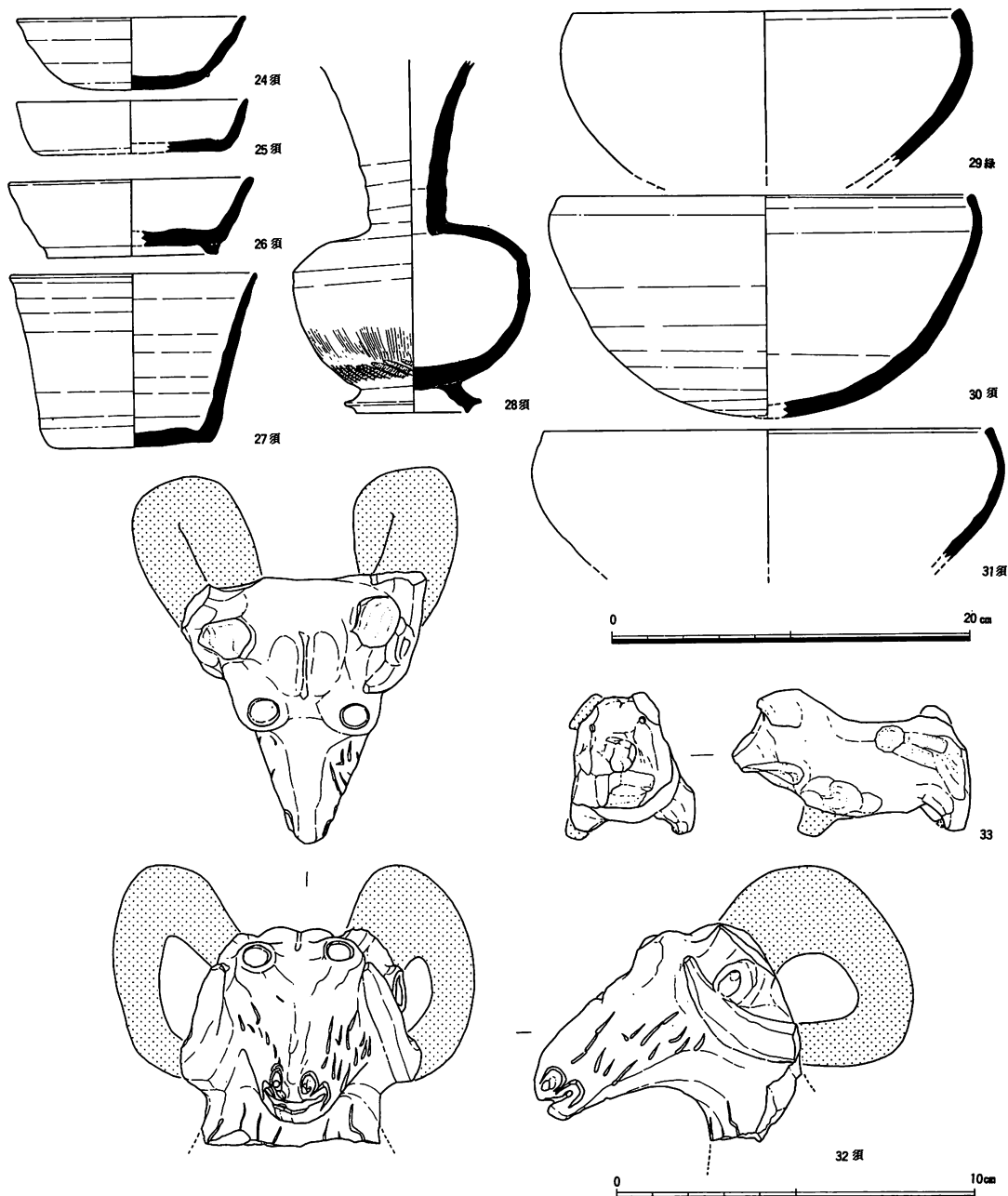


第14図 第91次調査 出土遺物実測図 SE6480：1～23（1：4）



り口縁端部の内湾がつよく器壁が薄い。

(32)は須恵器製の羊形硯である。頭部のみの出土で、両角も欠損している。本例の他には平城京左京四条四坊九坪と同右京八条一坊からの2例がある。眼を半球状の盛りあがりで表現したり、頭部のこぶや大きく後ろから巻き込む角の表現など、これらは共通した意匠をもつものの、口元の形状や鼻の湾曲の具合、ひげの表現など細部での差異もみとめられる。本例は口や鼻をヘラや棒状工具の沈線で描き、また胸元には細い蛇行沈線で羊毛の表現をもつ。色調は左



第15図 第91次調査 出土遺物実測図 S E 6480 : 24~31(1 : 4)、包含層 : 32・33(1 : 2)

京四条四坊九坪出土品が灰白色気味なのに対し暗灰色で、顔右半分に火がかりの模様がつくなど、出土例の乏しい資料ながら同時に製作されたものではないらしい。

(33)は、室町時代の犬形土製品である。室町時代の土坑S K 6493の上面で出土しており、県下8例目である。前脚・尾と顔の一部が欠失している。

## (6) まとめ

今回の調査で検出が期待された古道の側溝S D 170は本調査区へ続かなかったことで、やはり古道は奈良時代には第3次調査区からさらに第68次調査区へ続く溝S D 4500に続き、鎌倉時代では第7次調査区のカーブする溝を側溝とし、どちらも本調査区から竹神社跡地を迂回するかたちで祓川沖積地への切り通しに続くことがほぼ確定したといえるだろう。現在竹神社跡地は周囲からやや高まった山林になっており、具体的な発掘調査はおよんでいない。しかし、古里地区の北部を北東にむかってのびる奈良時代のS D 4500は、その両側で建物の規模・向きや配置の様相が異なり、土地利用の面での規制となっていたとの指摘もあり、また幅約3.5mに対し深さ0.1～0.2mと極めて浅く、底も平坦で、道路跡の可能性もある。古里地区において、こうした規制となりうる道路を迂回させているという点からみると、今後竹神社跡地周辺は奈良時代前後の斎宮の研究にとって重要な鍵となる可能性が考えられる。

今回出土した羊形硯は、形象硯の中でも極めて特殊なものである。今後の資料の増加もあるだろうが、現在全国で3例の発見にとどまり、やはりこの地区で従来出土している蹄脚硯や今回出土の鉄鉢形の緑釉陶器などともあわせて、出土遺物のうえでは特別な官衙的色彩を感じさせる。しかし、今回の調査区では、範囲が狭小で即断はできないが、第2次調査区もふくめて官衙的な遺構は皆無で、同じ古里地区にあって第4次調査区(昭和47年度)などとは対照的といえる。この点でもS D 170の北と南での差異が考えられる。

また、調査区北半に集中した室町時代の建物群は、いずれも規模が小さく、この時期一般的な総柱建物になるのは2棟のみであった。当該期の建物の周囲には重複関係が煩雑で今回遺構としては確認できなかったが、本調査区北側から第7次調査区のS D 170を切る鎌倉時代の溝の南を巡る長方形の溝状の落ち込みが見られる。これを区画溝とするならば、第2次調査区の直角に折れる溝群とともに、一帯に屋敷地的な区画が複数存在したことが想定できる。実際、東西棟とはいえ、総柱建物のS B 6487やS B 6489、S B 6491はおおむねこの溝状のおちこみと方向を揃えており、他の建物も概してこの位置を踏襲している。中世の屋敷地区画は斎宮跡においては第87次調査で発見された他、県下各地でも見つかっている。しかし、今回の例は調査区北半の区画で東西約18mであり、第2次調査区でみられるものもほぼ同規模で、他の例と比べて非常に小規模である。建物の貧弱さとあわせて所謂「屋敷」地とは別のイメージでこうした区画がとらえられる必要があるかもしれない。

(大川勝宏)

#### IV. 第 92 次 調 査

## 6 A G N - A ( 鍛冶山地区 )

本年度3回目の計画調査を8月5日から明和町斎宮宇鍛冶山2734-2番地で実施した。現況は、畑地で調査区は南北18m、東西12m、の約220㎡である。当調査区の東側では、昭和53年度に第21-1次調査、昭和57年度に第46次調査、平成2年度に第88次調査が実施されており、東西方向の区画溝、建物を取り囲む柵列(掘立柱堀)、大型の柱掘形をもつ倉庫群等を検出している。今回の調査では、第46次調査で検出した柵列の西への延長部分を確認することと、第88次調査で奈良時代の古道の側溝が鍛冶山地区まで延びることが判明したことから、その溝の再確認を主たる目的とした。遺構検出面(地山)の絶対高は北端で9.1m、南端で9.25mと南から北に向かってゆるやかに傾斜している。

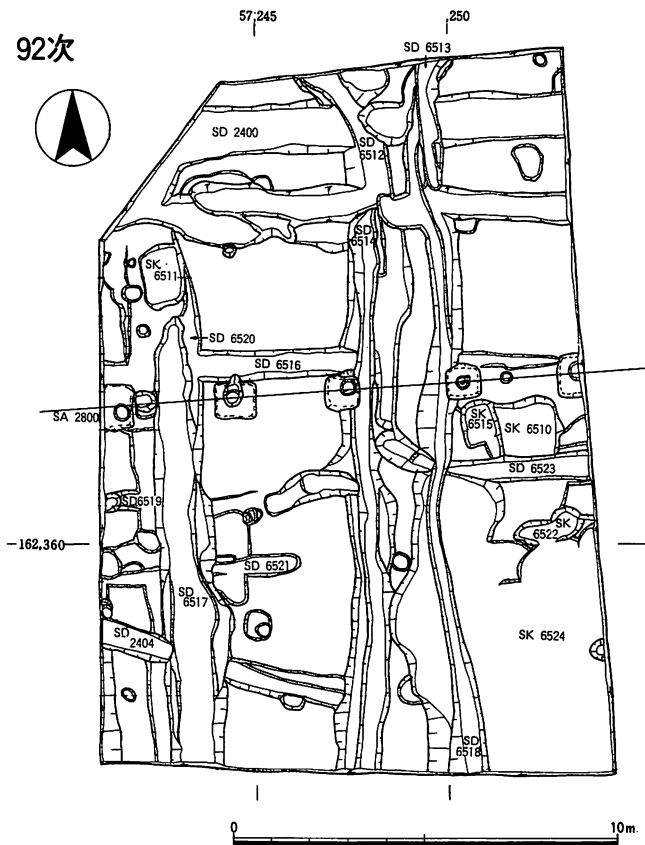
### (1) 奈良時代前期の遺構

溝 S D 2404は調査区の南部に位置する。この溝は史跡西部にあたる古里南部地区や塚山地区で検出されている S D 170の延長上の溝と想定しているものである。この溝は第41次調査(昭和56年度)で初めて検出され、第88次調査(平成2年度)においても検出している。埋土は黒褐色土で、幅約0.8m、深さ0.2mである。東側で平安時代前Ⅰ期の土坑に削平されている。遺物はまったく出土しなかった。

## (2) 平安時代初期の遺構

この時期の遺構には、柵列1条、溝2条がある。

柵列 S A 2800は、調査区の北部で  
検出した。この S A 2800は、第46次  
調査(昭和57年度)で東西 5 間以上、  
南北 5 間以上、第88次調査(平成  
2 年度)には、更に南北方向へ 7 間  
分延長することが確認されており、  
今回の調査では、更に西への延長部



第16図 第92次調査 遺構実測図 (1 : 200)

分で延べ9間分を検出した。柱掘形は、一片約1.0mの方形を呈し、深さは約0.5mである。埋土は黒褐色土で、径0.2mほどの柱痕跡を検出し、一部抜き取り痕跡がみられるものもあった。

溝 S D 2400は調査区の北部で東西方向に検出した。幅約1.4m、深さ0.3mである。この溝は昭和56年度のトレンチ調査で確認された溝で、東西方向に延びる道路の南側溝にあたる。底部は幅約1.0mの整然とした掘形である。S D 6513は、調査区北部中央から南北方向に延びる溝で、途中で平安時代前 I 期の溝 S D 6518に削平される。幅約0.5m、深さ0.3mである。

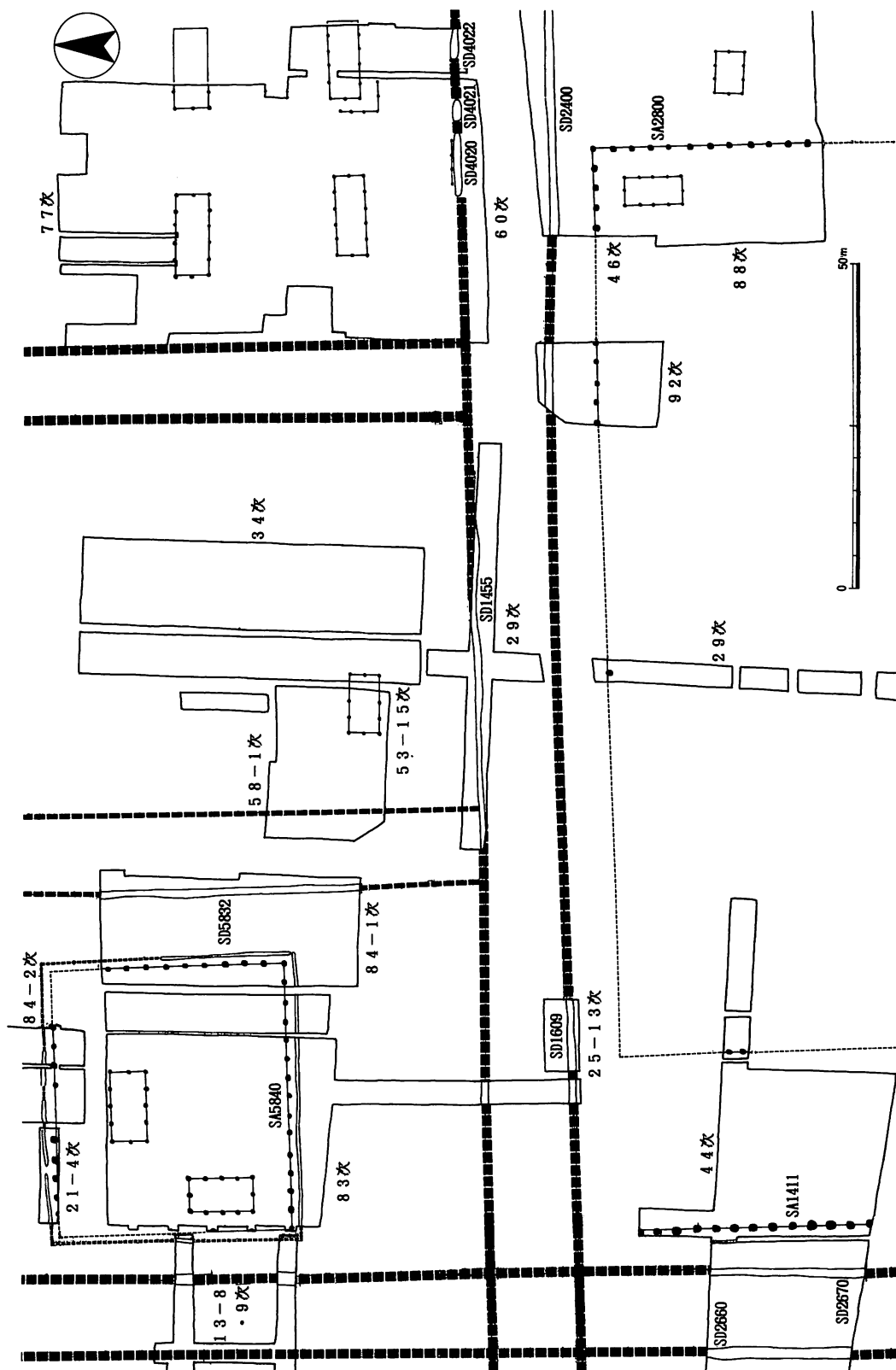
### (3) 平安時代前 I 期の遺構

この時期の遺構には、土坑 3 基、溝 3 条がある。

土坑 S K 6510・6515・6524は、調査区の北東部に位置する。遺構検出の段階では、一体の土坑と判断していたが、埋土の切り合い関係により分離した。S K 6510は一辺約1.6m、深さ0.2mで土師器杯・皿・甕・杯蓋・竈、須恵器杯蓋・甕・鉢・高杯等が出土した。西と南で同時期の遺構 S K 6515と S D 6523に削平される。S K 6515は、S K 6510と切り合う土坑で長径1.4m、短径0.8mである。遺物は土師器杯・皿・甕等が出土した。S K 6524は、長径6m、短径5m、深さ約0.6mで底は整然とした平面である。底近くで多量の炭が出土している。出土した遺物の中には、平安時代前 I 期よりも古い形態のものも若干含まれているので、この土坑の前段階に形

		遺 構 の 種 別		
		S A	S K	S D
奈良時代後期		_____	_____	2404
平安時代	初期	2800	_____	2400・6513
	前 I 期	_____	6510・6515・6524	6517・6518・6523
	前期	_____	6511	6516
	後期	_____	_____	6512
鎌倉時代		_____	_____	6519
不明		_____	6514・6520・6521 6522	_____

第 4 表 第92次調査 時期別遺構分類



第17図 第92次調査 鍛冶山地区周辺道構模式図 (1 : 1,000)

成された遺構に伴う遺物と考えられる。出土遺物には土師器杯・皿・甕・高杯・鍋、須恵器高杯・杯蓋・甕等がある。

S D 6517は調査区の西部を南北方向に延びる溝で、区画溝 S D 6520と重複する。S D 6520の掘り返しと考えられる。遺物は土師器杯・皿・甕・高杯、須恵器甕等が出土した。S D 6518は調査区のほぼ中央を南北に延びる溝で、北側で深さ約0.4m、南側で約0.7m、溝底は北から南に向かって傾斜している。S D 6523は調査区東部中央に位置し、埋土の切り合い関係から同時期の溝 S D 6518より古いことが判明している。

そのほか、平安時代前期としか判断できなかったものに土坑 S K 6511、溝 S D 6516がある。どちらも遺物は、土師器小片を出土したのみである。

#### (4) 平安時代後期の遺構

この時期の遺構は溝 S D 6512のみである。この溝は調査区のほぼ中央を南北に延びる溝で、平安時代初期の溝 S D 6514、平安時代前 I 期の溝 S D 6518、時期不明の溝 S D 6514の上面で検出した。埋土は暗茶褐色土で、土師器小片・小皿が出土したのみである。

#### (5) 鎌倉時代の遺構

この時期の遺構は溝 S D 6519のみである。土師器小片、山茶碗等が出土した。

#### (6) 時期不明の遺構

溝 S D 6514・6520・6521・6522がある。そのなかでも S D 6520は、南北方向に延びる区画溝の西側溝と考えられる。この溝は埋土の切り合い関係により平安時代初期の柵列 S A 2800より新しいと考えられる。出土した遺物は土師器細片のみで、時期決定の材料となる遺物は出土していない。

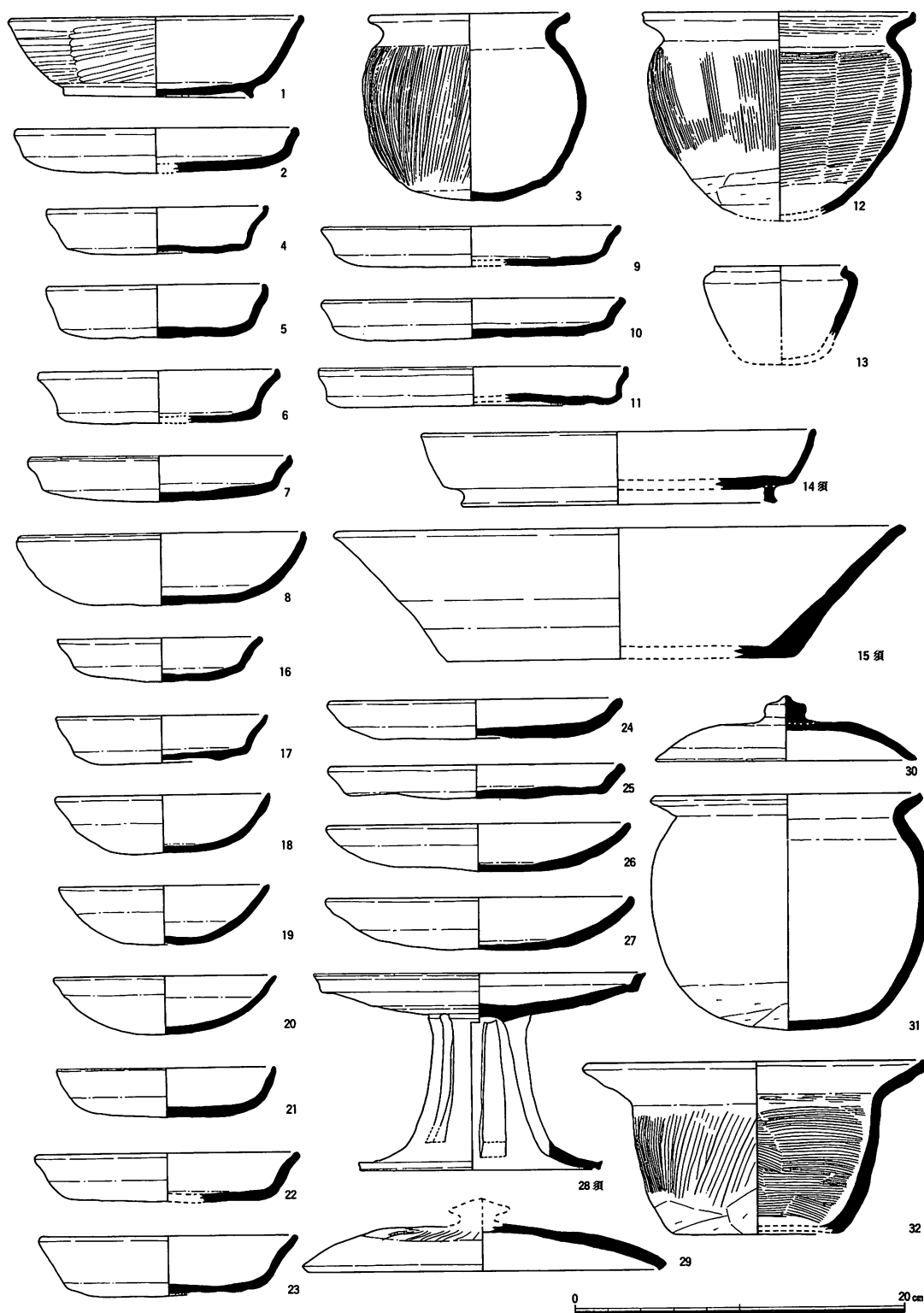
#### (7) 遺物

平安時代初期の溝 S D 2400、平安時代前 I 期の土坑 S K 6510・6524から良好な資料が出土したので、それについて概述する。

土師器高台付碗(1)・杯(2)・甕(3)は S D 2400からの出土である。(1)は、口径18.1cm、器高5.0cm、体部外面全体を緻密なミガキ、内面をナデ調整を施す。杯(2)は全体にナデを施し、口径17.4cm、器高2.7cmを測る。(3)は体部外面に縦ハケメを施す。

S K 6510からは土師器杯(4～7)・碗(8)・皿(9～11)・甕(12)・ミニチュア土器壺(13)、須恵器杯(14)・鉢(15)等がある。杯(1～7)、皿(9～11)はすべて A タイプ、e 手法によるものである。(12)は口径16.2cm、器高約12.8cm、体部内外面ともにハケメ調整を施し、底部外面はヘラケズリを施す。(13)は、口径4.0cmの土師器ミニチュア土器壺である。(14)は口径23.9cm、器高4.5cmと大型である。(15)は口径34.8cm、器高8.1cmで体部は内外面共にナデ調整をする。

S K 6524からは土師器の杯・碗(16～23)・皿(24～27)・杯蓋(29・30)・甕(31)・鍋(32)、須



第18図 第92次調査 出土遺物実測図 SD2400 : 1 ~ 3、SK6510 : 4 ~ 15  
SK6524 : 16 ~ 32 ( 1 : 4 )



恵器高杯(28)が出土している。(16・17・22・23)はAタイプ、(18～20)はBタイプで、すべてe手法によるものである。杯蓋は口径21.5cmの大きいもの(29)と口径15.6cmと小さいもの(30)がある。ともに磨耗がひどく調整については不明瞭である。(31)は口径16.0cm、器高14.4cmで、調整は、体部外面のハケメ調整の痕跡と外面底部のヘラケズリのみを確認できた。(32)は、口縁部を強く外反させるもので、口径20.4cm、器高10.6cmである。(28)は、脚部に三方すかしがあり、口径20.4cm、器高12.0cmである。

## (8) まとめ

今回の調査の第一の目的は柵列S D 2800の西方向の延長部分を確認することであった。この柵列は第46次調査では、東西5間以上、南北5間以上であることが判明しており、昨年度実施した第88次調査では更に南へ7間分検出され、南へ12間(35.5m)以上であることが確認された。この柵列S A 2800は、第88次調査(平成元年度)で検出したS A 5840よりも規模の大きい区画である可能性が考えられていた。今回の調査の結果では、さらに9間分が検出され、西へ14間(約41.4m)以上延びることを確認してその可能性が強まった。そこで柵列の延長部分についての再検討の結果、南側については土取りや未調査地が多いこともあって不明である。西側については、第29次調査でその延長部分で柵列に相当する柱穴を確認することができた。もしここまで柵列が延びるとすると西側へ27間(80m)以上延びることになり、相当大きな区画になる。第17図のとおり第44次調査区まで続くことが考えられる。さらに、従来から言われている区画は少なくともこの柵列が存在していた時期には、一辺約120mの区画がこの鍛冶山地区では変則的な形状であったと考えられ、従来からいわれている区画の様相を、この鍛冶山地区では考え直す必要がある。また、今回の調査区は、区画溝の交差点付近にあたり、調査前から注目していたが、東西方向の溝S D 2400は南北方向の溝を横断する形で検出され、初めて区画溝の交差点での様子の一部が明らかとなった。今後、柵列の西側への延長の追求とともに、柵列に囲まれた地域の歴史的意味の究明と、周辺の発掘調査の進展が待たれる。

(御村充生)

## V. 第 93 次 調 査

### 6 A D N (内山地区)

本年度 3 回目の計画調査は、近鉄斎宮駅のすぐ北側に面した斎宮字内山3045番地他で実施した。現況は北側の水田に向かって緩やかに傾斜する畑地で、調査区は南北26m、東西56mで面積は約1,500㎡である。周辺では昭和49年度に史跡指定に先立つ範囲確認のためのトレンチ調査(第8－8次調査)が実施されており、当調査区内では棟方向をそろえた桁行き5間の掘立柱建物2棟が検出されていた。また、北側の水田では字宮ノ前の第78次調査(昭和63年度)で奈良時代の古道側溝 S D 170の延長にあたとみられる S D 5266の他、平安時代前期の比較的大型の建物が検出されている。他にも第47次のトレンチ調査(昭和57年度)でこの水田部分を調査し、奈良時代の溝などを検出している。南側では斎宮駅の改修に伴う第31－10次(昭和55年度)、第



第19図 第93次調査 調査区位置図 (1 : 2,000)

37－11次調査(昭和56年度)や本年度の第89－1次、第89－3次調査が行われている。しかしながら周辺では面的広がりを持った調査例に乏しく、史跡の中央部付近にあって、従来から実態があまり判明していなかった地域でもある。

現在、史跡全体の環境整備計画の中で、公共交通機関からの玄関口として、この斎宮駅北地区の整備が望まれてきている。今回の調査は、第8－8次調査(Mトレンチ)で検出されている2棟の掘立柱建物を中心とした地域を調査し、今後の史跡整備のための基礎的な資料の収集を目的としている。

調査の結果、奈良時代から鎌倉時代にかけての竪穴住居1棟、掘立柱建物10棟、土坑8基、井戸3基、中世墓3基、溝3条等を検出した。

		遺 構 の 種 別				
		S B	S K	S E	S X	S D
奈良時代後期		6553	――	――	――	――
平 安 時 代	初 期	6542 (?) 6543	6549	――	――	――
	前 I 期	――	6546・6547 6548・6550 6551・6552	――	――	――
	中 期	6531 (?) 6554	――	――	――	――
	後 I 期	6544	――	6530	――	――
	後II期	――	――	――	――	6555
	末 期	――	6545	――	――	――
鎌 倉 時 代	前 半	――	――	――	――	6556
	後 半	――	――	6535・6536 6538	6533・6534 6537	――
不 明		6532・6539 6540・6541 6557	――	――	――	――

第 5 表 第93次調査 時期別遺構分類表



第20図 第93次調査 遺構実測図 (1 : 200)



### (1) 奈良時代後期の遺構

竪穴住居 S B 6553が調査区東端で検出されている。東西両壁が後世の攪乱溝で削られているが、一辺約3.2mの方形であるとみられる。東南隅付近で若干の焼土が見られたがカマドは不明である。全面に貼り床が施されており、柱穴とみられる数個のピットがともなう。遺物には、土師器皿・甕片や須恵器片等が出土している。

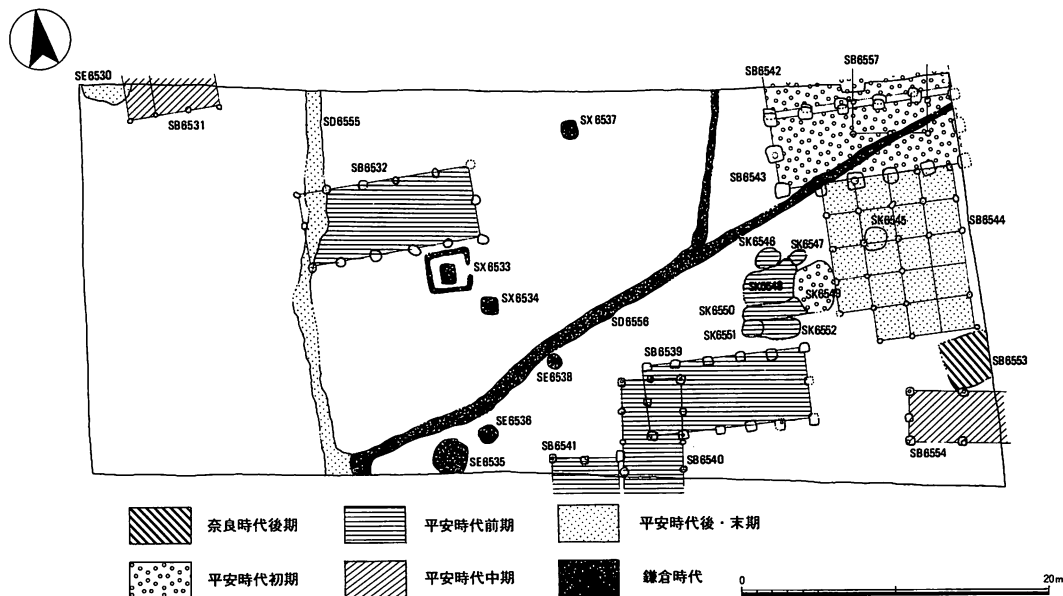
### (2) 平安時代初期の遺構

掘立柱建物 2 棟、土塼 1 基が検出されている。

S B 6543は、第 8 次調査で検出されていた掘立柱建物のうちの一つで、5 間×2 間の規模になることが確定した。柱掘形は方形で、一辺1.1mに達するものもあり、斎宮跡にあっても比較的大型のものである。ただし南側の桁行きの柱掘形に比べ北側のそれはやや小規模である。S B 6542は S B 6543のすぐ北側にあり、桁行 5 間の建物であると推定される。遺物からは明確に時期が決定できないが、S B 6543が重複していることから、平安時代初期以前のものであることがわかる。土塼 S K 6549は、調査区東半に集中する土塼群の一つで、3.2m×2.7m、深さ約60cmほどになる。遺物には土師器の杯・皿・鉢・高杯・甕や製塩土器、須恵器の杯・碗・甕・杯蓋片が出土している。

### (3) 平安時代前期の遺構

平安時代前 I 期に属すると考えられるものには、初期の S K 6589に近接する 6 基の土塼がある。重複が著しく、これら遺構番号を付けたものの他に上面でも土塼状の落ち込みがみられ、



第21図 第93次調査 時期別遺構配置図 (1:500)

一時期集中的に頻繁な掘削が行われたことが窺える。S K 6548は不定型で3.4m×3.0mの土坑で、把手付甕(48)が底部付近で倒立して出土した。遺物の出土量はS K 6549とならんで多く、他に土師器杯・皿・椀・蓋・甕片や製塩土器、灰釉陶器の段皿が出土している。S K 6550・6552はS K 6548・6549に重複する、長径で4m程の長楕円形の土坑で、底は平坦になり、土師器杯・皿・甕・甌や須恵器類の他、黑色土器の椀片が出土している。S K 6546・6547・6551はさらにその周囲の径1.0m強の土坑で、土師器類、黑色土器、須恵器類が出土している。これら平安時代前I期の土坑の前後関係では、S K 6548が最も古く→S K 6550→S K 6552の順であることが確認でき、その周囲にS K 6546・6547・6551が掘削された状況が認められる。

S B 6532は第8次調査のトレンチで確認されていた東西棟で、5間×2間の規模であることがわかった。平安時代初期に属するとみられるS B 6543とは、桁行筋を揃えており、E 4° Nと共通するが柱掘形はやや小振りになる。遺物からみて平安時代前半に属するものと考えられる。S B 6540・6541は調査区中央部南隅にある。南北棟で、梁行は2間になる。S B 6540は桁行3間分が検出されている。柱掘形は50cm～60cmの方形で、この2棟はいずれもN 2° Eと棟方向を同じくしており、いずれも微細な出土遺物から平安時代前半のものと見られるが、相互の前後関係は不明である。S B 6539はその東の5間×2間の東西棟で、一辺70cm以上の方形の柱掘形を持つ。柱穴の重複関係からS B 6540より古いが、平安時代前半に含まれるものと思われる。棟方向はE 4° Nで、S B 6532・6543と一致する。

#### (4) 平安時代中期の遺構

S B 6554は調査区東南隅にある。検出された柱穴は今回の調査区では深く、遺構面からでも深さ50cmを越える。柱間寸法は西側の梁行でみると1.7mで、桁行は南北方向の攪乱溝により柱穴が欠失していると考え、3間以上の規模で調査区東へ延びていくことになる。

S B 6531は調査区の北西隅にあり、南側の2間分だけが検出されている。柱間寸法は2.1mで、西側に幅1.8mで庇がつくものと考えられる。ほぼ同時期のS B 6554とは棟方向を大きく違える。

#### (5) 平安時代後期の遺構

S E 6530は調査区北西隅に位置する。直径約3.3mで南半だけを検出し、地表下約1.7mまで掘削した。平安時代後I期に属する。S B 6544は調査区東にある。柱穴は直径30cm～40cmの円形で、5間×3間の身舎の西側が張り出す建物である。この柱穴の一つには土師器椀の完形品が入っていた。平安時代後I期のものである。

S D 6555は調査区の西半を南から北に流れる溝である。土師器やロクロ土師器類、山茶椀の他、混入品だが打製石斧(124)が出土している。平安時代後II期のものとみられる。

#### (6) 平安時代末期の遺構

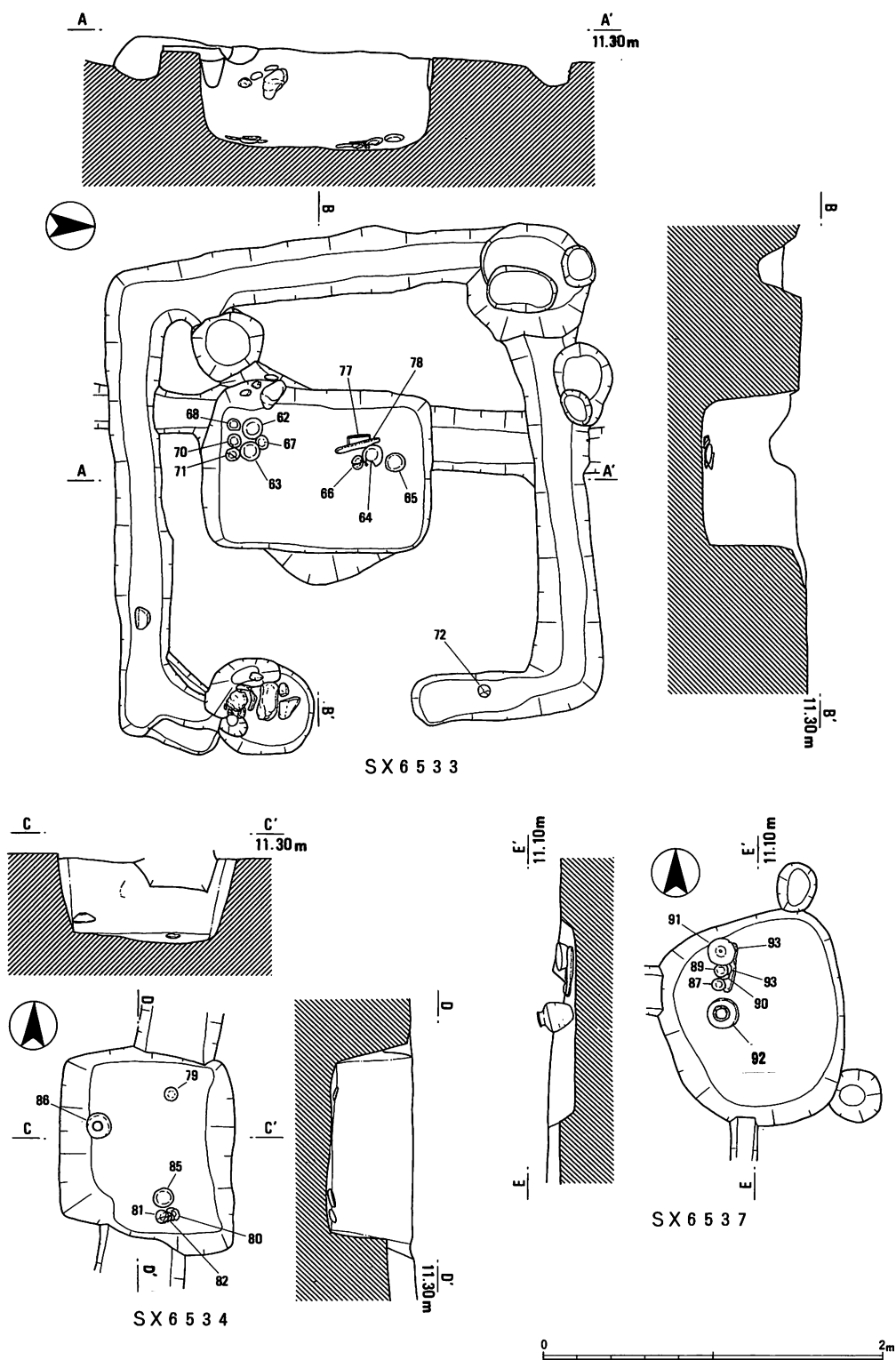
土坑 S K 6545がある。直径約1.5mの隅丸方形で、深さ約20cmを残し、すり鉢状の底部になる。粗製の土師器大盤(102)や杯、皿片、ロクロ土師器が出土している。混入はあるが、平安時代末期のものとみられる。

## (7) 鎌倉時代の遺構

S D 6555につながる S D 6556は南西から北東に流れる溝で、一時期両者は共存していたとみられる。途中で北へ S D 6557が分流する。土師器類の他、藤澤編年のⅡ－4型式に相当する山茶碗が出土している。鎌倉時代前半に位置づけられよう。S E 6535は調査区の南端にある。直径2.3mのもので、深さ約2mまで掘削した。土師器皿・鍋類、山皿や瀬戸産の三筋壺が出土している。S E 6536・6538はそれぞれ直径1m強の井戸で、約1.8m下まで掘削した。土師器皿・台付皿・鍋片や藤澤編年でⅢ－6～7型式の山茶碗が出土していることから、これらの井戸は鎌倉時代後半に属するとみられる。

中世墓 S X 6533は1.3m×1.0m、遺構検出面から60cmほどの深さに方形の墓壙を穿ち、その周囲に東側の一面だけを残して幅約20cmの溝でほぼ2.9m四方の区画を作る。この溝の内側に塚が作られていたものとみられる。墓壙内には2ヶ所にわけて副葬品が埋納されていた。北側の一群には使用の著しい石製硯(77)や鉄製短刀(78)、土師器皿3枚が、南側の一群には土師器皿6枚がかためて置かれていた。土師器皿には大小の2形式がある。また、墓壙内の埋土中にも土師器皿や山茶碗が包含されていた。S X 6534は S X 6533の東南に位置し、1.2m×1.0mの方形の墓壙を穿つ。周囲には区画の溝は見られず、S X 6533との位置関係から削平されたのではなく、当初から区画を持たなかったものと考えられる。遺構面からの深さは約56cmほどで、墓壙の規模・形状は S X 6533とよく似ている。しかし供伴する遺物は少なく、藤澤編年のⅢ－7型式の山茶碗(86)と土師器皿7枚が出土したのみである。ここでも皿には大小のものがみられる。S X 6537は調査区北側の他の中世墓とは離れた位置にある。約1.3m×約1.1mの楕円形で、深さは約16cmである。遺物は最も内容が豊富で、常滑産の壺(92)、青磁碗(91)、鉄製短刀(93)に土師器の小皿4枚が出土した。S X 6537も周囲に区画の溝を持たないものの、墓壙の検出レベルが他の2つの中世墓と大差ないにもかかわらず、遺構面からは浅かったことを考えると、すでに削平されている可能性もある。これら中世墓の時期については、S X 6533出土の山茶碗が13世紀中葉、鎌倉時代の中頃に比定できる。また、S X 6534が S X 6533に対して従属するような位置・内容を持つことや、土師器の皿があまり時期差を示さないことから、この両者は近接した時間幅の中で S X 6533→ S X 6534の順に作られたものであろう。S X 6537は出土した青磁碗が龍泉窯産の12世紀～13世紀に位置づけられるものである。また、常滑産の壺も13世紀中葉以降のものであることから、S X 6533や S X 6534よりはやや後出のものであると考えられ、鎌倉時代でも後半のものと位置づけできよう。





第22図 第93次調査 中世墓実測図 (1:40)

## (8) その他の遺構

時期の判断できなかった遺構に S B 6557 がある。調査区北東隅で検出された梁行 2 間の建物で、調査区北側にのびていく。柱穴は直径約 40cm と小さく、棟方向も N 4° E である。遺物は細片で時期を明確にできないが、柱穴のひとつに鎌倉時代前半の溝 S D 6556 が重複していることから、それ以前のものと考えられる。

この他に遺構番号は付していないが、調査区内で鍵の手状に分布する小ピット群の存在が目される。S D 6555 にそって南北に並ぶピット群は調査区北 4 分の 1 ほどで東に折れ、そのまま 65m ほど続く。また、コーナーから南へ 16m ほどのところで西にむかって折れていく一群も観察される。これらは直径 20cm ～ 50cm 程度のものが大半を占め、柵などのように深さ・規模が一定で直線的に続くものではない。また、ピット底部の形状も一定せず、木根痕と明確に判断できるものも多く含まれている。埋土は黒色土や黒褐色土で安定しており、近年の攪乱によるものではない。これらに伴う遺物は微細な土師器片・中世の無釉陶器片のみで、明確に決定できないものの、時期的には中世～近世初頭を下らないものと考えて大過ないだろう。具体的な上部構造としてはピットの集中状況や大きさからみて、「垣根」状の区画を目的とした遺構とみておきたい。

## (9) 遺物

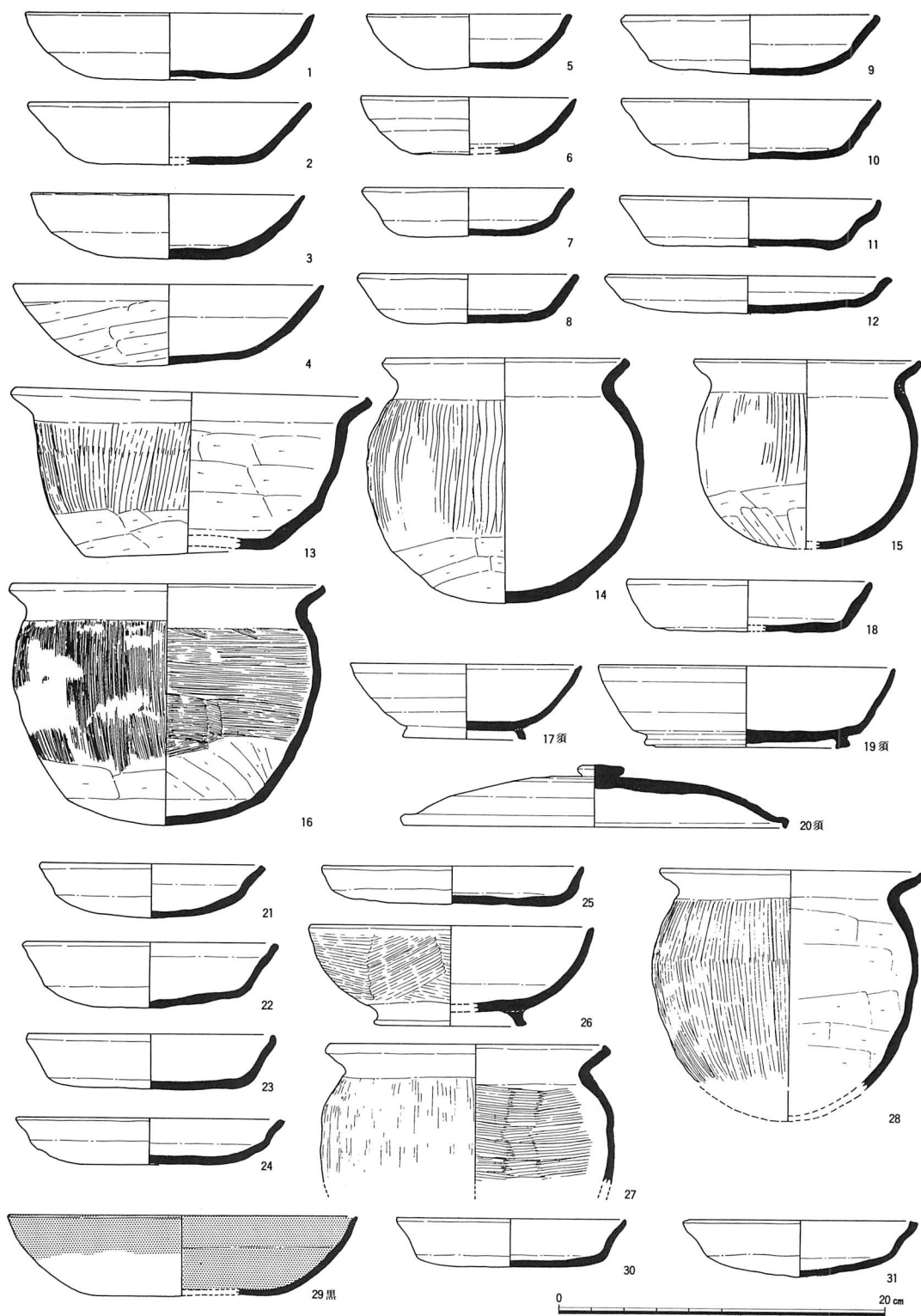
今回の調査では整理箱にして約 100 箱の遺物が出土している。時期別にみると弥生時代から室町時代のものまでみられるが、平安時代前半と鎌倉時代のもものが大半を占める。

平安時代前半の遺物はほとんどが調査区東半に集中する土壇群のもので、初期 (S K 6549) と前 I 期 (S K 6546・6547・6550～6552) とがある。

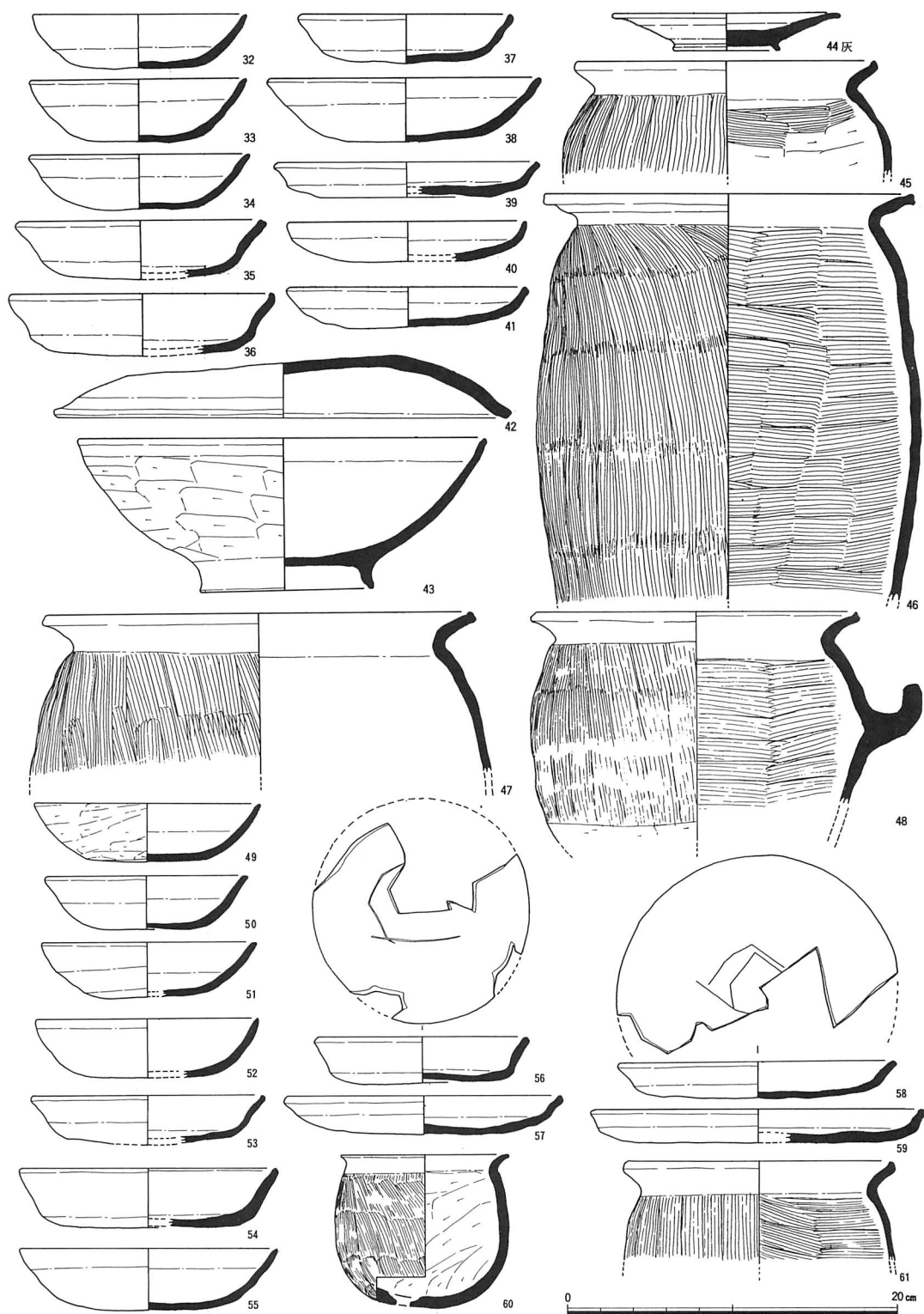
S K 6549 は前 I 期の遺物が若干混入しているが、底部付近は平安時代初期の比較的良好な資料である。小型の甕 (14～16) が目立つ。土師器杯は口縁部をヨコナデし、底部付近をナデるのが中心だが、底部外面をヘラケズリするもの (4) もある。(17) は須恵器の高台付椀で、外面にはロクロナデ痕がのこり、やや茶褐色がかかった色調である。(20) は須恵器杯蓋だが、内面は硯に転用され、墨痕が残る。

前 I 期の遺物を出土する遺構では、S K 6548 が最も遺物量が多い。灰釉陶器の段皿 (44) はほぼ逆台形状になる高台をもち、全面に緑褐色の釉薬をかけ、猿投編年で黒笹 14 号窯式に相当するものである。(42) は土師器の蓋で、ゆがみが大きく器表面は磨耗のため不明瞭だが外面はヘラケズリ調整がなされている。(43) の台付椀も外面はヘラケズリ調整がなされている。(48) は把手付甕で、表面に多量のススが付着し、底部のみを欠損する。

S K 6550 からは見込みにヘラ描き線刻で多角形を描く土師器皿 (56・58) が出土している。同じ土壇の小型甕 (60) には、底部に外面から焼成後に穿孔が施される。



第23図 第93次調査 出土遺物実測図 SK6549：1～20、SK6552：21～28、SK6551：29～31（1：4）



第24図 第93次調査 出土遺物実測図 SK 6548 : 32~48、SK 6550 : 49~61 (1 : 4)

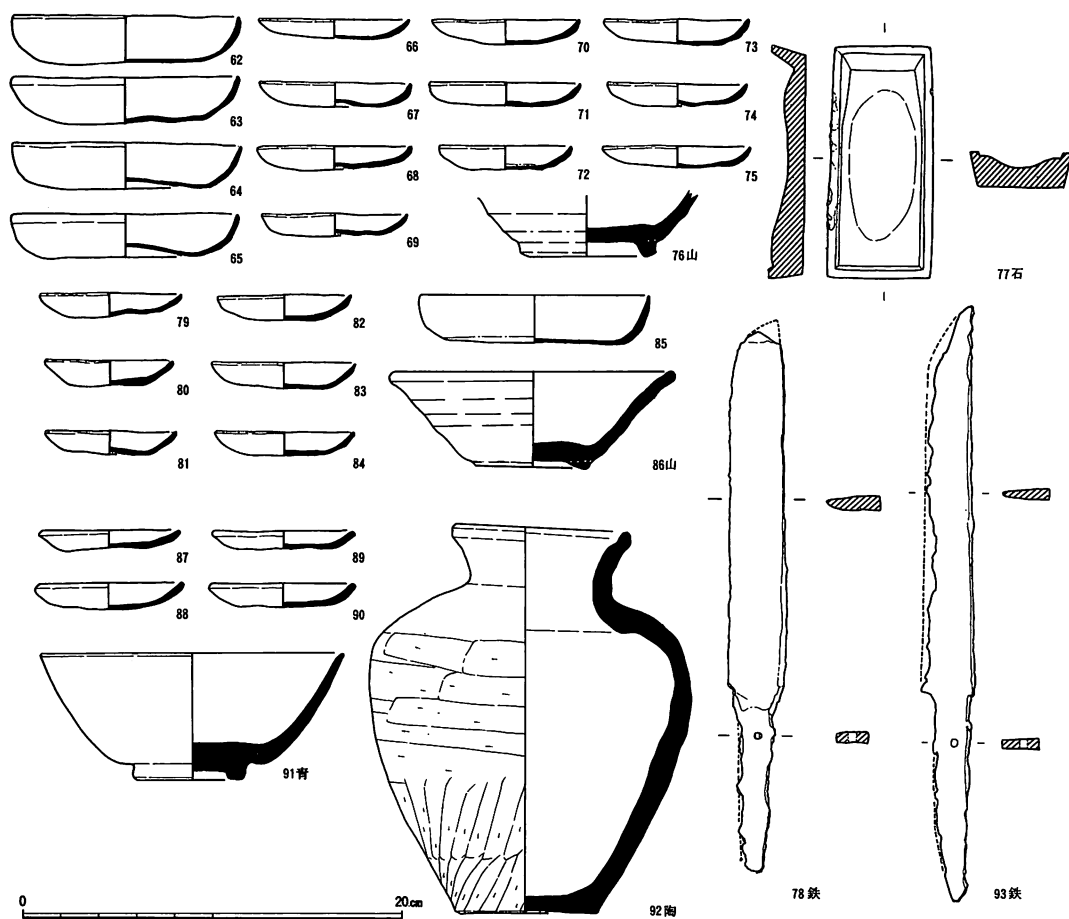
鎌倉時代の遺物は、中世墓と井戸からの出土が多い。

S X 6533と S X 6534から出土した土師器皿には先述のとおり大小2型式がある他、大型のものにも底部が平らなもの(62・63)と、内側にへこむもの(64・65)がある。いずれも淡黄灰色を呈する。

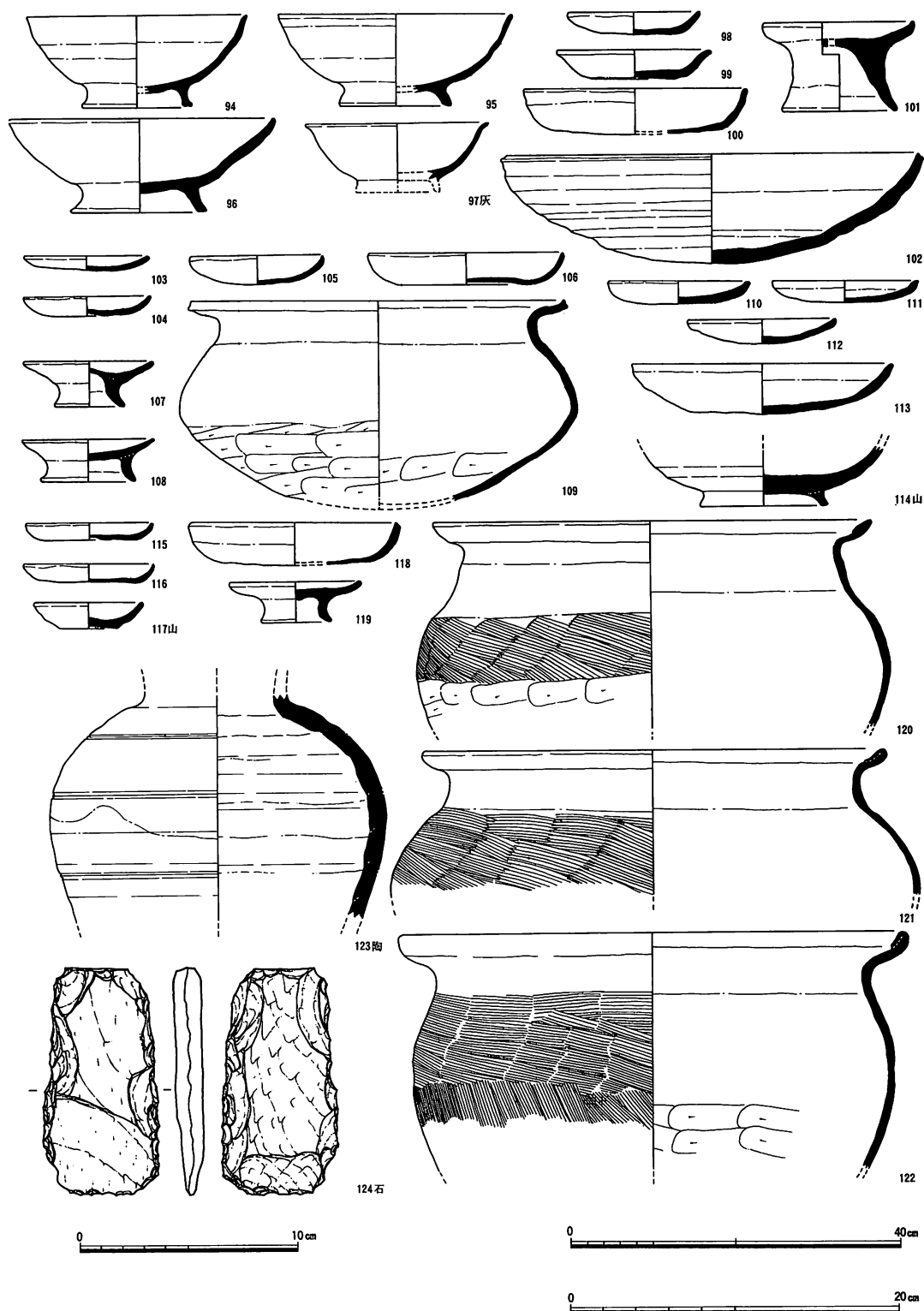
S X 6534の山茶碗(86)は13世紀中葉に位置づけられ、内面に黒色の炭化物が多量に付着していた。

S X 6537の青磁碗(91)は龍泉窯産のもので、口径15.9cm、高さ6.7cmで、見込みに方形の印刻があるが不鮮明で文字は読めない。高台底部外面には釉が及ばない。常滑産の壺(92)は三筋壺の系譜をひく小型のもので、口縁端部をやや内側に屈曲する。外面はケズリ調整され、体部上面には自然釉がかかる。4枚出土した土師器の小皿は口径が7cm強であることは他の中世墓出土品と類似するが、赤褐色～黄褐色がかかった色調で焼成に差異がある。

鎌倉時代の遺物を出土した井戸には S E 6535・6536・6538がある。当該期の遺物では土師器皿・



第25図 第93次調査 出土遺物実測図 S X 6533 : 62~78、S X 6534 : 79~86、S X 6537 : 87~93 (1 : 4)



第26図 第93次調査 出土遺物実測図 SE6530 : 94~97、SK6545 : 98~102、SE6536 : 103~114  
SE6535 : 115~123(1 : 4)、SD6555 : 124(1 : 3)

鍋・高台付杯や山茶碗などがある。鍋についてみると、S E 6535のもの(120～122)は頸部が明瞭に立ち上がり、口縁部との境は強く屈曲する。口径は30cmをこえる大型の部類に入る。S E 6536の(109)は口縁端部の折り返し部分は鋭く立ち上がるが、口縁部と胴部の間は緩やかにカーブし、若干の頸部を残している。底部外面はケズリ調整、胴部はナデ調整される。

この他注目される遺物には平安時代末期の土師器大盤(102)がある。直径50.4cmを測り、粘土紐を輪積みにしたままわずかにナデ調整され、口縁端部に面を作る。底部も無調整で、胎土にも多量の砂粒を含む粗製品である。底部外面に磨耗がないことから蓋ともみられるが、口縁端部を外側に面取りしている点からここでは盤としておく。緑釉陶器は微細な破片のみながら出土点数は47片と、当該する遺構は乏しいものの比較的多くの出土をみた。またS D 6555から出土した打製石斧(124)は長さ10.4cm、幅5.3cm、厚さ1.3cmの緑泥片岩製で、弥生時代のものと思われる。

#### (10) まとめ

第93次調査は、今後継続的に予定する斎宮駅周辺調査の第1回目であり、当該地域の総合的な考察は今後の調査の進展に拠らねばならないが、当地域について若干の言及は可能である。

まず今回の調査で最も重要な遺構として5間×2間の掘立柱建物があげられよう。S B 6532・6543はやや規模が異なるもののそれぞれE 4°Nに棟方向を揃えており、これは史跡東部の方格地割りの軸方向(E 4°N)と一致するものである。現在史跡東部には溝とそれに挟まれた道路によって分けられた一辺約120m(400尺)の20ブロックの方格地割りが想定されており、さらに第82次調査(平成元年度)ではこの区画の最も北側の溝S D 291がさらに西に延長して、地割りが想定される範囲がさらに西に広がる可能性が出てきている。この点では第93次調査地区はこの広がる部分に含まれており、平安時代初期あるいは前半に比定されるS B 6532・6543などが方格地割りと棟方向をそろえることは、少なくとも区画による規制がここまで及んでいたことになる。なお現在想定する20の方形区画が斎宮駅の北側地域に及ぶかどうかについては、一辺120mのプランを本調査区一帯にも延びると想定すると、今回検出したS D 6555あたりで南北の区画溝が検出されることになる。しかし、調査によってこの部分には多数の南北溝は検出されているが、これらは小規模で地割りの軸線に対しすべて東に振れているため、後世の削平の可能性もあるものの、今回は新たな区画の存在を確認することはできなかった。

総柱建物S B 6545は、県内でも亀山市靴屋垣内遺跡や大藪遺跡の例のような屋敷的な建物とみられる。周辺の同時期の総柱建物としては、第49次調査(昭和58年度)や第59次調査(昭和60年度)でも見られ、平安時代後期～鎌倉時代前半の総柱建物の多くは南東隅に土壇を持つことが知られているが、今回の5間×3間の建物は斎宮跡の当該期の中では大型のもので、プランも従来のものとは異なっている。屋敷地としては第37-4次調査(昭和56年度)、第59次調査や第

87次調査(平成2年度)で平安時代後期～鎌倉時代の溝による方形の区画とその内部の建物群が見つかっている。こうしたことは史跡中央部付近は平安時代後期には官衙的な色彩がうすれていったことを示すものである。こうした「屋敷地」に関連して、時期について整合性は確認できなかったものの、「垣根」状のピット群の問題がある。斎宮においてこれまで方格地割などについては言及されてきているが、その内部を区画する施設についてはほとんどわからず、斎宮の特殊性とみられてきた。従来ともすれば木根痕として注意されなかったものも今後区画施設となる可能性を今回の例は明確に示したものとする。

斎宮跡での中世墓の検出例は従来史跡西部の古里地区や塚山地区等に多かったが、今回新たに史跡中央部の例を増したことになる。S X 6533の類似例と考えられるものに度会郡玉城町蚊山遺跡で検出された鎌倉時代の中世墓がある。全体の規模はS X 6533よりも大きい。出土品も土師器皿類、鉄製短刀、青磁碗と類似性を示す。この中世墓が発見されたこともまた、当地域がもはや斎宮寮としての機能を完全に失っていたことを示すとともに、今回検出した3つの中世墓の規模や副葬品は、被葬者がこの近辺にあっていかなる階層であったかという検討課題を残したと言えるだろう。今後、継続した調査によっての斎宮駅北側一帯の実態が解明されることを期待したい。

(大川勝宏)



## VI. 第 94 次 調 査

### 6 A E M (御館地区)

第94次調査は、史跡中部の御館地区、斎王の森南東約180mの水田地帯に南北方向のトレンチを設定して実施した。トレンチは、幅4m、長さ約60mで、調査面積は220㎡である。

これまでに、斎王の森の南側水田部分では、昭和57年度の第42－2次調査で区画溝が検出されており、また、第47次調査では計8か所、総延長417mのトレンチ調査が実施されている。そのうち南西約160mの2か所のトレンチ調査では、奈良時代の竪穴住居、溝、土坑、平安時代後半の掘立柱建物、溝などが検出されているが、いずれも部分的に後世の粘土採掘による攪乱を受けていた。しかし、斎王の森より南東側の水田部分ではこれまで調査は実施されておらず、この付近が、以前より粘土採掘による攪乱を受けていることが指摘されているものの、遺構の残存状況としては、全く不明であった。今回の調査では、宮域の中・東部に広がる方格地割の北から2本目の区画溝、及びその他の遺構の残存状況を把握することを目的としている。

#### (1) 遺構

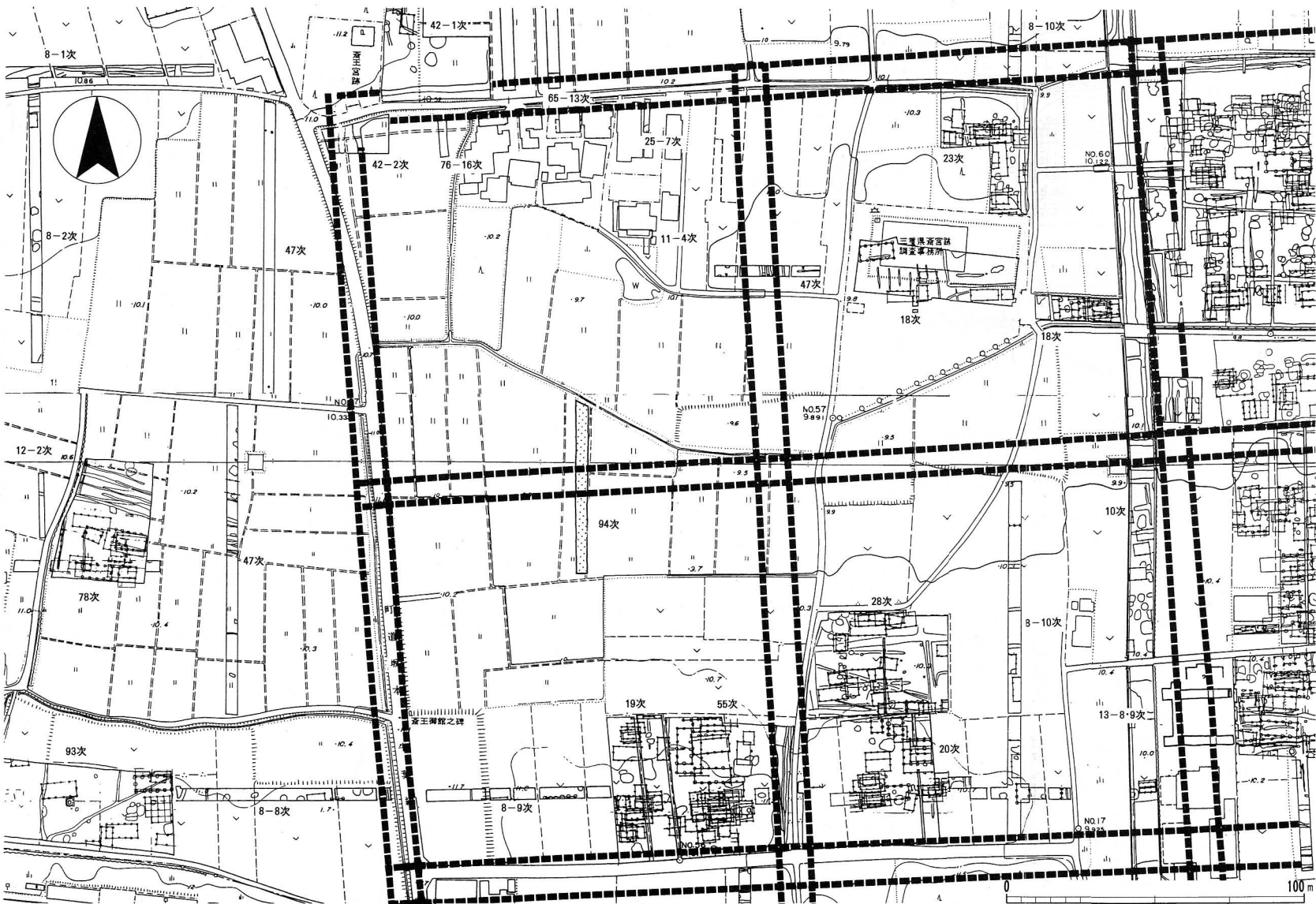
調査区の全体にわたり、粘土採掘による攪乱が著しく、検出した遺構はS D 6570のみで、その他明確な遺構といえるものは、確認することができなかった。特に調査区北端、南端の攪乱は著しく、地表面より0.6～1.0mの深さに達していた。S D 6570を検出した付近は、耕作土を除去すると20cm前後で遺構面に達し、攪乱を比較的受けていなかったが、遺構自体の密度は低かった。S D 6570は深さ数cmのごく浅い東西溝で、西側は旧送電線鉄塔の基礎により破壊されていた。遺物は出土しておらず、時期については不明である。

#### (2) 遺物

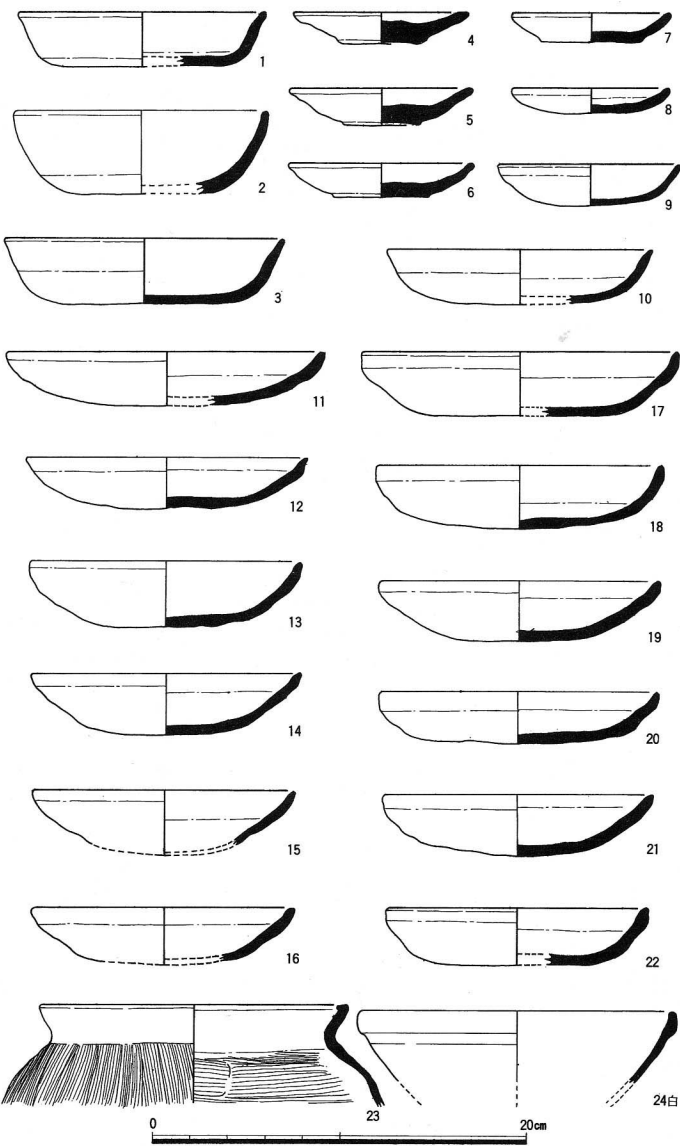
出土遺物は平安時代～鎌倉時代にかけてのものである。中心となるのは平安時代後Ⅱ期の遺物で、特に調査区南端でまとまって出土している。土師器碗・台付皿・甕、ロクロ土師器小皿がある。他に、緑釉陶器3点、須恵器、灰釉陶器、山茶碗、製塩土器、白磁、砥石がある。

#### (3) まとめ

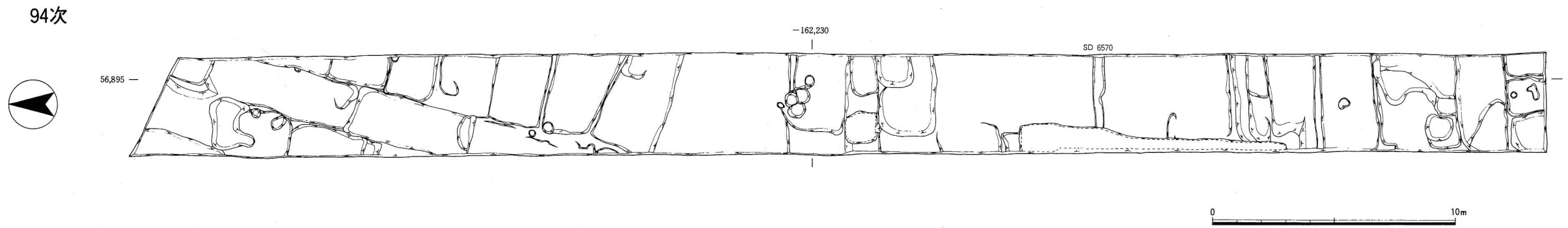
今回の調査では、区画溝、及びその他の遺構の残存状況を確認することが目的であったが、攪乱が著しかったため、それら大半の遺構は既に破壊されていた。しかし、出土遺物には平安時代後Ⅱ期の遺物が圧倒的に占めており、攪乱により原位置を保っていないとはいえ、この付近に当該時期を中心とする遺構が存在したものと推定される。今後の本地域での遺構残存状況の見通しについては、近鉄線から斎王の森へ通ずる町道西側の水田地帯では、遺構の残存する部分も確認されているので、今回の調査区はたまたま攪乱部分であったということを考えれば、今後さらに周囲でも、遺構の残存状況を確認する調査が必要と思われる。(森田幸伸)



調査区位置図(1:2,000)



遺物実測図(1:4)



第27図 第94次調査 遺構実測図(1:200)



# 掘立柱建物一覧表

S B	規模	棟方向	桁行 (m)	梁行 (m)	柱間寸法(m)		時 期	備 考
					桁行	梁行		

## 第90次調査（6 A F H－A）

6414	(4)×2	E 5° N	—	3.8	2.0	1.9	平安 初期	S B6416より古
6420	5×2	E 4° N	12.0	4.8	2.4	2.4	〃	S B6464より新
6450	5×2	E 1° N	12.0	4.8	2.4	2.4	〃	
6460	5×2	E 4° N	12.3	4.9	2.46	2.45	〃	S B6450より古
6465	2×2	E 4° N	3.7	3.4	1.85	1.7	〃	
6467	3×2	N 6° W	7.2	3.8	2.4	1.9	〃	
6468	3×2	E 1° N	6.6	4.4	2.2	2.2	〃	
6416	(3)×2	E 2° S	—	3.7	1.7	1.85	平安 前Ⅰ期	S B6413より古
6417	(4)×2	E 0° W	—	3.8	1.9	1.9	〃	
6422	3×2	N 8° W	6.0	4.0	2.0	2.0	〃	
6455	3×2	E 2° N	6.1	3.8	2.0	1.9	〃	
6413	(3)×2	E 4° N	—	4.8	2.4	2.4	平安 前Ⅱ期	
6415	(3)×2	E 0° W	—	4.3	2.1	2.15	〃	
6439	3×2	N 5° W	6.0	4.3	2.0	2.15	〃	
6441	3×2	N 0° S	5.7	4.4	1.9	2.2	〃	
6442	3×2	N 4° W	5.8	4.0	1.9	2.0	〃	
6443	3×2	N 5° W	5.4	3.6	1.8	1.8	〃	
6452	5×2	E 0° W	10.0	4.2	2.0	2.1	〃	
6453	5×2	E 3° S	11.4	4.7	2.3	2.35	〃	
6457	3×2	E 3° S	5.8	4.6	1.9	2.3	〃	
6434	5×2	E 5° N	8.4	3.7	1.7	1.85	平安 中期	S B6442より新
6456	5×3	E 1° N	9.5	6.3	1.9	2.1	平安 後Ⅰ期	総柱建物
6423	3×2	N 2° E	5.8	3.8	1.9	1.9	平安 後Ⅱ期	両面庇 西庇梁行 1.8m 東庇梁行 2.4m

## 第91次調査（6 A B H－F）

6481	3×2	N17° E	6.3	4.0	2.1	2.0	奈良 (?)	柵か?
6495	3×3	N 9° E	3.9	3.9	1.3	1.3	奈良	
6483	3×2	N27° E	6.0	4.2	2.0	2.1	平安 後期	第7次調査で検出
6485	3×2	N33° E	6.3	4.2	2.1	2.1	〃	第7次調査で検出
6482	4×2	N24° E	7.4	5.0	1.85	2.5	室 町	総柱建物 総柱建物
6486	(3)×2	E12° S	—	4.0	2.0	2.0	〃	
6487	(2)×2	E27° S	—	3.6	2.1	1.8	〃	
6489	(2)×2	E27° S	—	4.8	2.3	2.4	〃	
6491	3×2	E27° S	4.5	3.2	1.5	1.6	〃	
6496	(3)×3	N31° E	—	5.4	2.4	1.8	〃	
6488	(3)×3	E 9° S	—	4.2	1.5	1.4	不 明	
6494	3×(1)	N11° E	6.0	—	2.0	2.7	〃	

S B	規模	棟方向	桁行 (m)	梁行 (m)	柱間寸法(m)		時 期	備 考
					桁行	梁行		

第93次調査（6 A D N）

6542	(5)×－	E 4° N	12.0	－	2.4	－	平安 初期	S B6543より古
6543	5×2	E 4° N	12.0	4.8	2.4	2.4	〃	
6531	－×2	N 4° W	－	6.0	－	2.1	平安 中期	西面庇 庇梁行1.8m
6554	－×2	E 6° S	－	3.4	1.7	1.7	〃	
6544	5×3	N 6° W	10.5	8.4	2.1	2.1	平安 末期	総柱建物 西側に2.1m張り出し
6532	5×2	E 4° N	11.5	4.8	2.3	2.4	不 明	S B6540より古
6539	5×2	E 4° N	10.5	4.6	2.1	2.3	〃	
6540	(3)×2	N 2° E	－	4.0	2.1	2.0	〃	
6541	－×2	N 2° E	－	4.4	－	2.2	〃	
6557	(1)×2	N 4° E	－	4.8	2.1	2.4	〃	S D6556より古

## 竪穴住居一覧表

S B	規 模 (m)	長軸方向	深さ (cm)	柱穴	カマド	時 期	備 考
-----	---------	------	---------	----	-----	-----	-----

第90次調査（6 A F H－A）

6421	3.5×3.1	E 4° N	10	－	東壁	奈良 後期	S B6420より古
6446	4.7×4.3	N 4° W	7	－	東壁	〃	
6464	3.6×3.2	N 1° E	8	－	東壁	平安 初期	

第93次調査

6553	3.2×－	N23° W	20	○	東壁？	奈良 後期	
------	-------	--------	----	---	-----	-------	--

## 斎宮跡発掘次数一覧表

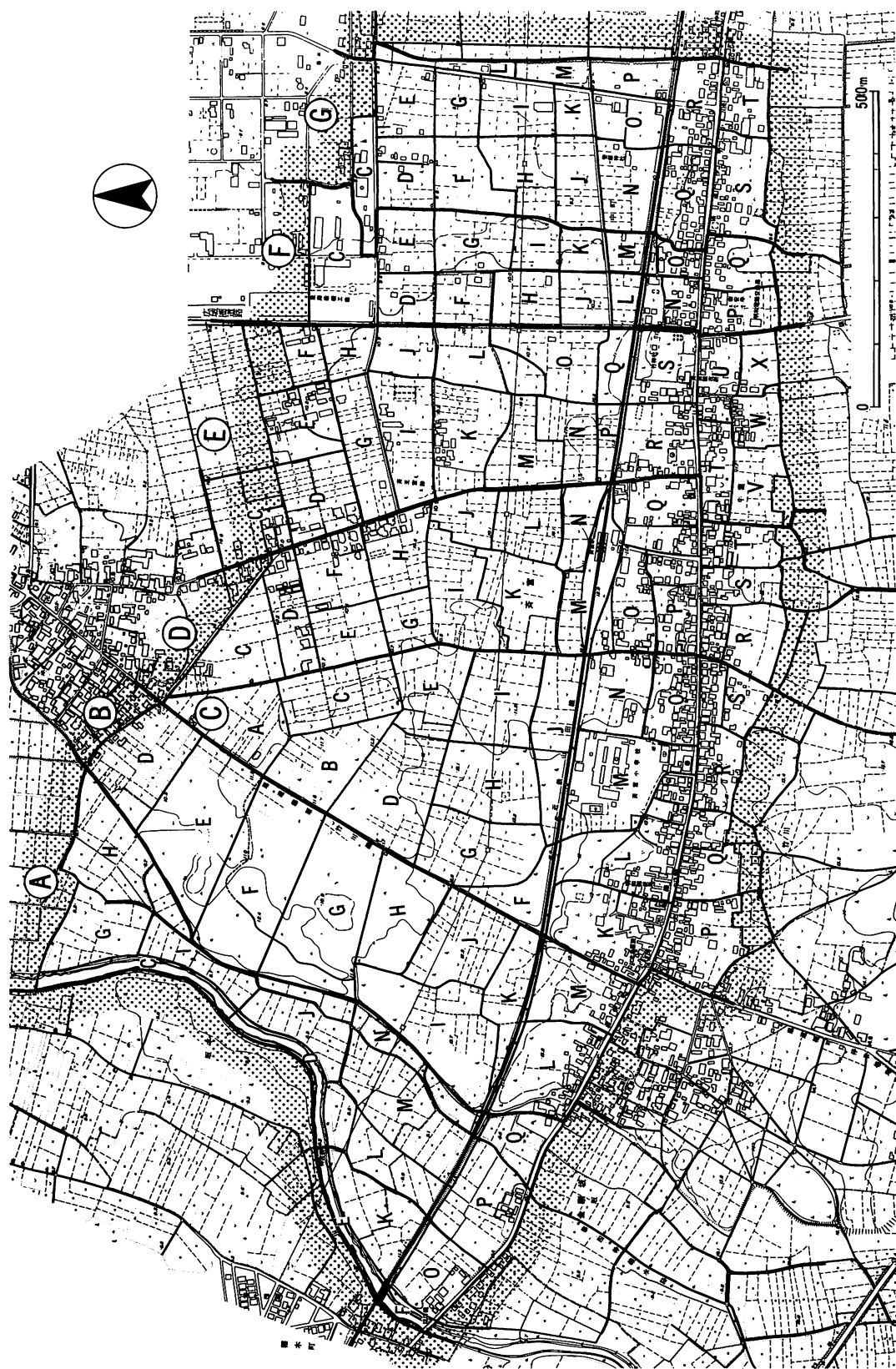
次	年度	調 査 地 区	次	年度	調 査 地 区
1	S45	試掘	13-6	51	中垣内375-1 (南)
2	46	古里A地区	13-7		東 裏328 (小川)
3		◇ B地区	13-8		西加座2771-1 (細井)
4	47	◇ C地区	13-9		◇ 2773 (細井)
5	48	◇ D地区	13-10		東 裏362-1 (児島)
6-1		Aトレンチ	13-11		西加座2681-1 (浮田)
6-2		Bトレンチ	13-12		◇ 2721-3, 2724-2 (森川)
6-3		Cトレンチ	13-13		東前沖2506-2 (宮下)
6-4		Dトレンチ	14-1	52	2 Eトレンチ
6-5		Eトレンチ	14-2		2 Fトレンチ
7	49	古里E地区	14-3		2 Gトレンチ
8-1		Fトレンチ	14-4		2 Hトレンチ
8-2		Gトレンチ	14-5		2 Iトレンチ
8-3		Hトレンチ	15		斎宮小学校
8-4		Iトレンチ	16-1		竹川町道A
8-5		Jトレンチ	16-2		◇ B
8-6		Kトレンチ	16-3		◇ C
8-7		Lトレンチ	16-4		◇ D
8-8		Mトレンチ	16-5		◇ E
8-9		Nトレンチ	16-6		◇ F
8-10		Oトレンチ	17-1		竹神社社務所
8-11		Pトレンチ	17-2		竹神社防火用水
9-1	50	Qトレンチ	17-3		西加座2721-6 (西沢)
9-2		Rトレンチ	17-4		楽 殿2894-1 (中川)
9-3		Sトレンチ	17-5		◇ 2895-1 (西口)
9-4		Tトレンチ	17-6		出在家3237-3 (吉川)
9-5		Uトレンチ	17-7		◇ 3237-1 (里中)
9-6		Vトレンチ	17-8		楽 殿2894-1 (西村)
9-7		Wトレンチ	17-9		東海造機
9-8		Xトレンチ	18	53	6 A E L-E・I (下園)
9-9		Yトレンチ	19		6 A E N-M・N・O (御館)
9-10		Zトレンチ	20		6 A E O-I・J (柳原)
10		広域圏道路	21-1		6 A G N-B (鍛冶山、北山)
11-1		西加座2661-1 (山中)	21-2		6 A E I-D (西加座2711-2, 2717-4 他、山路)
11-2		◇ 2681-1 (山名)	21-3		6 A F D-D (西前沖2649-1、大西)
11-3		東前沖2483-2 (前田)	21-4		6 A F H-F (西加座2678, 2679-3、森下)
11-4		下 園2926-9 (吉木)	21-5		6 A G D-K (東前沖、渡部)
12-1	51	2 Aトレンチ	21-6		6 A C A-T (古里3269-2、中西)
12-2		2 Bトレンチ	21-7		6 A F E-F (東前沖2631-1、鈴木)
12-3		2 Cトレンチ	21-8		6 A E G-A (楽殿2909-3、大西)
12-4		2 Dトレンチ	21-9		6 A E D-R (篠林3218-3、宇田)
13-1		東加座2436-7 (浜口)	22-1		6 A G U
13-2		◇ 2436-4 (中村)	22-2		6 A G U
13-3		古 里3283 (村上)	22-3		6 A G W
13-4		楽 殿2916~2917 (松井)	23	54	6 A E L-B (下園)
13-5		御 館2974-1 (川本)	24		6 A G F-D (西加座)

次	年度	調 査 地 区	次	年度	調 査 地 区
25-1	54	6ADP-K (牛葉3029-1、三重土地ホーム)	37-12	56	6AFH-J (西加座2681-1・3・4、渋谷)
25-2		6ACA-Y (古里3270、脇田)	37-13		6AGK-F (西加座2385-3、2386-3、竹内)
25-3		6ADD-F (篠林3139-3、池田)	38		6ACD-S (塚山)
25-4		6AER-H (牛葉3014、牛葉公民館)	39		6ABD-R・S・T (古里)
25-5		6AGN-H (鍛冶山2392、丸山)	40		6AGH-L・M (東加座)
25-6		6AFH-A (西加座2675-5、谷口)	41		6AGJ-J他(斎宮地内)
25-7		6AEK-V (下園2926-10、奥田)	42-1	57	6AEI-D・F (楽殿)
25-8		6AFC-D (西前沖2064-5、山本)	42-2		6AEK-A・B (楽殿)
25-9		6ACN-C (広頭3387-1、北出)	43-1		6ADC-C (出在家3235-2、永田)
25-10		6AEV-A (鈴池339-1、永島)	43-2		6ADT-B (木葉山308-1、山本)
25-11		6ACF-B (東裏364-1、沢)	43-3		6ACP-T (南裏241-1、辻)
25-12		6AEE-Y (楽殿2892-3、山本)	43-4		6ADS-D (牛葉123-3、西山)
25-13		6AEJ-E (西加座2766-1、山内)	43-5		6ADE-D (篠林3220-3、澄野)
26-1		6AFR (中西)	43-6		6AGE (東前沖、町道側溝)
26-2		6AEX~6ACQ (鈴池、木葉山、南裏)	43-7		6ABD-F (古里588-6、今西)
26-3		6AEV・W・X (鈴池)	43-8		6ADQ-H (牛葉3025-2、大西)
26-4		6ACR (木葉山、南裏)	44		6AFL-A・B (鍛冶山2759-1、他)
27		6ACG-S・T (東裏)	45		6AEG-P・Q (楽殿2904-2、他)
28		6AEO-D (柳原)	46		6AGN-C・D (鍛冶山2737-1、他)
29		6AF1、6AFL、6AFK、6AFM、6AGJ	47		6ADJ-D・G他(西加座、御館、宮ノ前、上園)
30	55	6ABJ-M・X・W (中垣内)	48-1	58	6AGM-M (広頭3385、斎宮小)
31-1		6ADO-M (内山3038-13、岩見)	48-2		6ADP-Q (牛葉3033-1・2、吉田)
31-2		6ACP-I (南裏227-2、鈴木)	48-3		6ABL-M (中垣内434-6、西川)
31-3		6ABD-A (古里588-4、北薮)	48-4		6AGL-B (東前沖2480、倉田)
31-4		6ADQ-T (牛葉3018-2、百五銀行)	48-5		6AGD~6AFE (東前沖、町道側溝)
31-5		6ACC-G (塚山3338-3、水谷)	48-6		6AGC-A (西前沖3550-1、今西)
31-6		6ABO-X (古里576-1、池田)	48-7		6ADT-H (木葉山307、森西)
31-7		6AGI-L (東加座2427-1、竹内)	48-8		6ACL-E・F・G (東裏334-15、他)
31-8		6ACN-G (広頭3388-1・5・8・9、森)	48-9		6AEV-J (鈴池341-1、乾)
31-8		6AGD-L (北野2487-1、中川)	48-10		6AGT (牛葉、町道側溝)
31-10		6ADM-O (内山3043-3、斎宮駅)	48-11		6ADP-E (鍛冶山2351-1、2352-1、梶原)
31-11		6ADT-I (木葉山304-2、澄野)	48-12		6AFC-H (西前沖2604-8・9、清水)
31-12		6ADT-J (木葉山304-7、宇田)	48-13		6ACM-O (東裏、斎宮小)
32		6ACE-D・E・F (塚山)	48-14		6AET (牛葉、町道側溝)
33		6ADE-C・D他(篠林)	49		6ADI-D・U・V・W・X (上園3083、他)
34		6ADE-F・G・H (西加座)	50		6ACH-H (東裏294、297、山本)
35		6APE他(西前沖)	51		6AFF-D (西加座2663-1・4、2664、森下)
36	56	6ABI-F (中垣内)	52		6AGF-D (西加座2703、他)
37-1		6AFC-M (西前沖2064、日本経木)	53-1	59	6ACM-P (東裏284、体育館)
37-2		6ADQ-R (牛葉3021-2、野田)	53-2		6ACA-M (古里3280-2、中西)
37-3		6AFC-F (西前沖2604-6、神田)	53-3		6ABE (古里573-2、永納)
37-4		6AFC-M (西前沖2604、日本経木)	53-4		6ACL-S (東裏271-1、田所)
37-5		6AFC-G (西前沖2064-7、中村)	53-5		6ACR (木葉山97-5、田中)
37-6		6ABD-A (古里588-2、北薮)	53-6		6AGO (鍛冶山、町道側溝)
37-7		6AEC-M (荊干2861-2、斎王公民館)	53-7		6ADD-U (篠林3147-3、野呂)
37-8		6ADR-P (木葉山128-8・13・14、富山)	53-8		6AGE-O (東前沖2470-2、上田)
37-8		6AGK-E (東加座2355-1、竹内)	53-9		6ACS-O (木葉山95-2、浅尾)
37-10		6AED-O (楽殿3217-1、渡部)	53-10		6ACA-R (古里3267-1、西川)
37-11		6ADN-O (内山3043-3、斎宮駅)	53-11		6ADR-W (木葉山131-7、西村)

次	年度	調 査 地 区	次	年度	調 査 地 区
53-12	59	6 A B L - K (中垣内464-2、沢)	70-10	62	6 A F D - B・D (西前沖2649-4、大西)
53-13		6 A D Q - L (牛葉3022、辻)	70-11		6 A G O - H (鍛冶山2363-2、川合)
53-14		6 A C M - O (東裏287-3、体育庫)	70-12		6 A D D - F・G (篠林3158、長谷川)
53-15		6 A F K - C・D (西加座2721-1、鈴木)	70-13		6 A E C - N・G (荊干、佐藤)
54		6 A F E - N (西前沖2630、他)	70-14		6 A B L - R (中垣内459、北岡)
55		6 A E N - P (柳原、御館2785-1、他)	70-15		6 A F D - A (西前沖2644-1、山本)
56		6 A C H - S (東裏289-1、他)	70-16		6 A C B - A他(町道塚山線拡幅)
57		6 A G F - H・I (東加座2441、他)	71		6 A B E (古里501、他)
58-1	60	6 A F K - C・D (西加座2721-1、鈴木)	72-1		6 A B E (古里500、他)
58-2		6 A F H - N (西加座2681-8、三村)	72-2		6 A B F (古里523、他)
58-3		6 A C M - N (東裏3385-2、斎宮小)	72-3		6 A B F (古里551-2、他)
58-4		6 A B L - A (中垣内4731-1、小家)	72-4		6 A B F (古里528-1、他)
58-5		6 A D Q - Q (牛葉、町道側溝)	73		6 A F F - B・C・E・G (西加座2663-5、他)
58-6		6 A D R - V (木葉山131-3、西山)	74-1		6 A B F (古里523、他)
58-7		6 A G S - G (中西611、山路)	74-2		6 A B F (古里522、他)
58-8		6 A B M - A (中垣内430-3他、近鉄)	74-3		6 A B E・F (古里524、他)
59		6 A C J - I (広頭3379-1、他)	74-4		6 A B E (古里548-1、他)
60		6 A G J - B・D・G (東加座2450-1、他)	74-5		6 A B E (古里543、他)
61		6 A F F - H・I・D (西加座2663-1、他)	75		6 A G F - C (西加座2702、他)
62		6 A G I - J・K (東加座2425、他)	76-1	63	6 A D B - A~D (町道塚山線拡幅)
63		6 A F G - M・N (西加座2659-1、他)	76-2		6 A D E - F・G (篠林3158、長谷川)
64-1	61	6 A C O - H (牛葉3395-1、トーカイ)	76-3		6 A B E (古里554、明和町)
64-2		6 A G L - F (東加座2435-1、大和谷)	76-4		6 A C K (東裏354-13、山際)
64-3		6 A D D - A (篠林3136-1、山路)	76-5		6 A E E - W (楽殿577、岡田)
64-4		6 A G R - N (笛川2340、丸山)	76-6		6 A C B - A (塚山3276-1、今西)
64-5		6 A C M - R・Q・P (東裏3385-2、斎宮小)	76-7		6 A C M - M (広頭3385-2、斎宮小)
64-6		6 A C K (東裏361-2、竹川自治会)	76-8		6 A F M - G (鍛冶山2736-3、近鉄)
64-7		6 A G I - G (東加座2435-2、大和谷)	76-9		6 A C Q (南裏144-1、田所)
64-8		6 A G R - J (笛川2341-6、山下)	76-10		6 A B D - U (古里579、池田建設)
64-9		6 A D Q - M (牛葉、町道側溝)	76-11		6 A B E (古里554、明和町)
64-10		6 A C F - A (東裏365-1、樋口)	76-12		6 A E E (楽殿、町道下水管)
64-11		6 A C M - O (東裏3385-2、斎宮小)	76-13		6 A D D - K (篠林3143、中西)
64-12		6 A D E - B (篠林3162-3、江崎)	76-14		6 A E E - S (楽殿2878-3、山路)
65-1		6 A C C - M (塚山3331-1)	76-15		6 A B F~6 A B H (中垣内、県道拡幅)
65-2		6 A E G - S (楽殿2908-2、他)	76-16		6 A E K - B (下園2936-2、明和町)
65-3		6 A E I - L・M (楽殿2917-4、他)	76-17		6 A E V - A (鈴池339-5、永島)
66		6 A G G - C (東加座2437-1、他)	77		6 A G J - D (東加座2453、他)
67		6 A B F (古里523、他)	78		6 A D L (宮ノ前3054、他)
68		6 A B F (古里502、他)	79		6 A G G - A・B (東加座2440、他)
69		6 A G M - E~H (東加座2373、他)	80		6 A F G - F~I (西加座2696、他)
70-1	62	6 A C C - X (塚山3325-1、江崎)	81-1	H 1	6 A E C~F (町道塚山線拡幅)
70-2		6 A E E - W (楽殿2875-2、岡田)	81-2		6 A B J、6 A B K (古里、県道拡幅)
70-3		6 A D R - I (木葉山129-5、大西)	81-3		6 A D S - M (木葉山137、中川)
70-4		6 A C N - A・B・E・L (広頭3389-8、林)	81-4		6 A E D - L (楽殿2881-2、山本)
70-5		6 A E W - A (鈴池333-1、八田)	81-5		6 A F Q - C (中西597-2、木戸口)
70-6		6 A B L - S (中垣内430-6、奥山)	81-6		6 A D D - F (篠林313、池田)
70-7		6 A E E - T (楽殿577、浅尾)	81-7		6 A B L - U (中垣内430-7、川本)
70-8		6 A E U・6 A E X - A (牛葉、鈴池、三重県)	81-8		6 A B J (古里、明和町)
70-9		6 A E P - C・D (御館、榑原、近鉄)	81-9		6 A C F (中垣内、三重県)

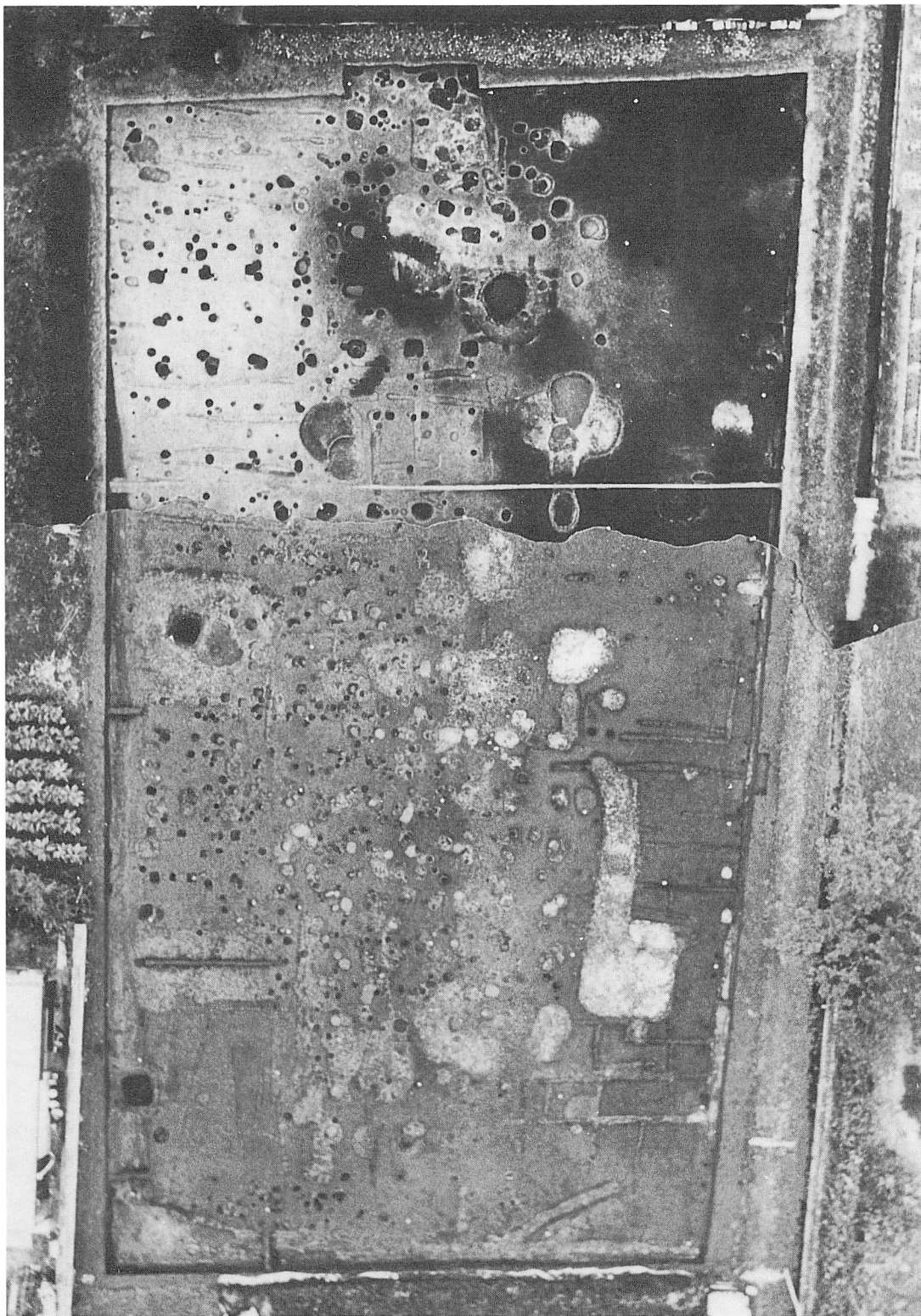


次	年度	調 査 地 区	次	年度	調 査 地 区
81-10	1	6 A D R - V (木葉山297、明和町)	85-5	2	6 A E D - U (楽殿2885-2、西山)
81-11		6 A C M - N (広頭3385-2、明和町)	85-6		6 A F H - B (西加座、明和町)
81-12		6 A E D - A (篠林3225、中川)	85-7		6 A C B - C (塚山3276-3他、加藤)
81-13		6 A C B (塚山3276-19他、明和町)	85-8		6 A B I - N (中垣内427-1、小林)
81-14		6 A E D - F (楽殿2844-2、澄野)	86		6 A F H - F・G・H (西加座2679-1他)
81-15		6 A E D - U (楽殿2885-2、西山)	87		6 A C E - N・Q・R (塚山3356他)
81-16		6 A G (北野3655-1、他)	88		6 A G N - C・D (鍛冶山2411-1他)
82-1		6 A D I - F~J (上園3095、他)	89-1	3	6 A D M - O (内山3043-5、近鉄斎宮駅)
82-2		6 A D I - K・L (上園3100、他)	89-2		6 A G I - M (東加座2432-2他、北村)
83		6 A F J - C~F (西加座2770-3、他)	89-3		6 A D M - N・O (内山3060-4、近鉄斎宮駅)
84-1		6 A F J - G (西加座2764-3)	90		6 A F H - A・B (西加座2680他)
84-2		6 A F H - G・H (西加座2679-1、他)	91		6 A B H - F (中垣内393、他)
85-1	2	6 A B D~6 A C D (古里、三重県)	92		6 A G N - A (鍛冶山2734-3)
85-2		6 A C A - P (古里3279、松本)	93		6 A D N (内山3045-12、他)
85-3		6 A C J - B・D (東裏、明和町)	94		6 A E M (御館2942)
85-4		6 A B E (竹川573-1、永納)			



第28図 宮跡地区表示

# 版 図



調査区全景（真上から）



西半区全景（東から）

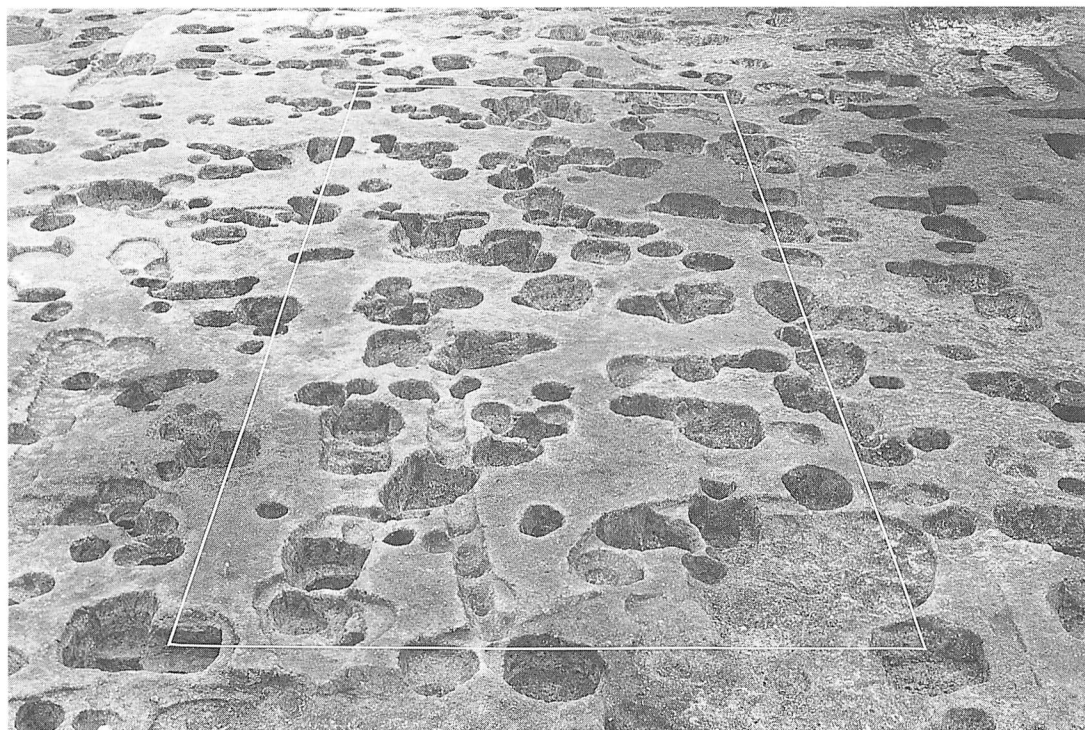


東半区調査後（東から）





S B6420 (東から)



S B6460 (東から)



SB6422 (東から)



SB6439・6441・6443 (北から)



SE 6440 (東から)



SE 6466 (北から)





S K 6458・6459 (東から)



南トレンチ (西から)



調査区遠景（北から）



調査区全景（北から）



調査区中央部建物群（東から）



SB6481（北から）





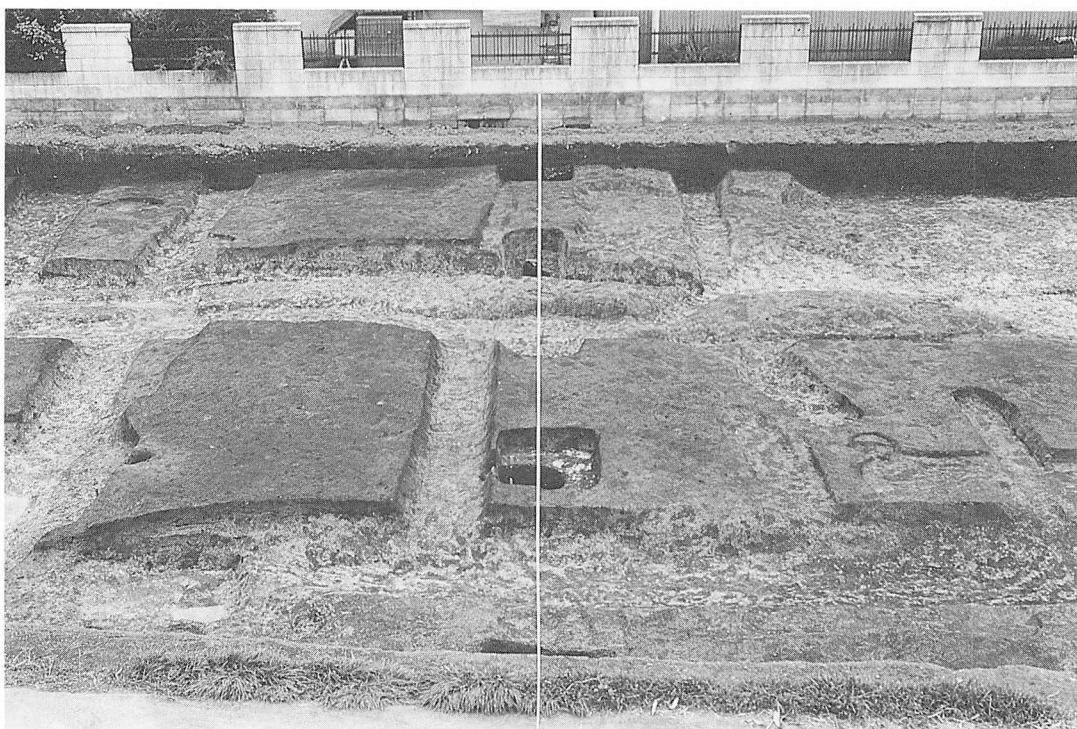
SE 6480 (北東から)



SE 6490・SB 6495 (西から)



調査区全景（南から）



SA2800（西から）



SD2400 (西から)

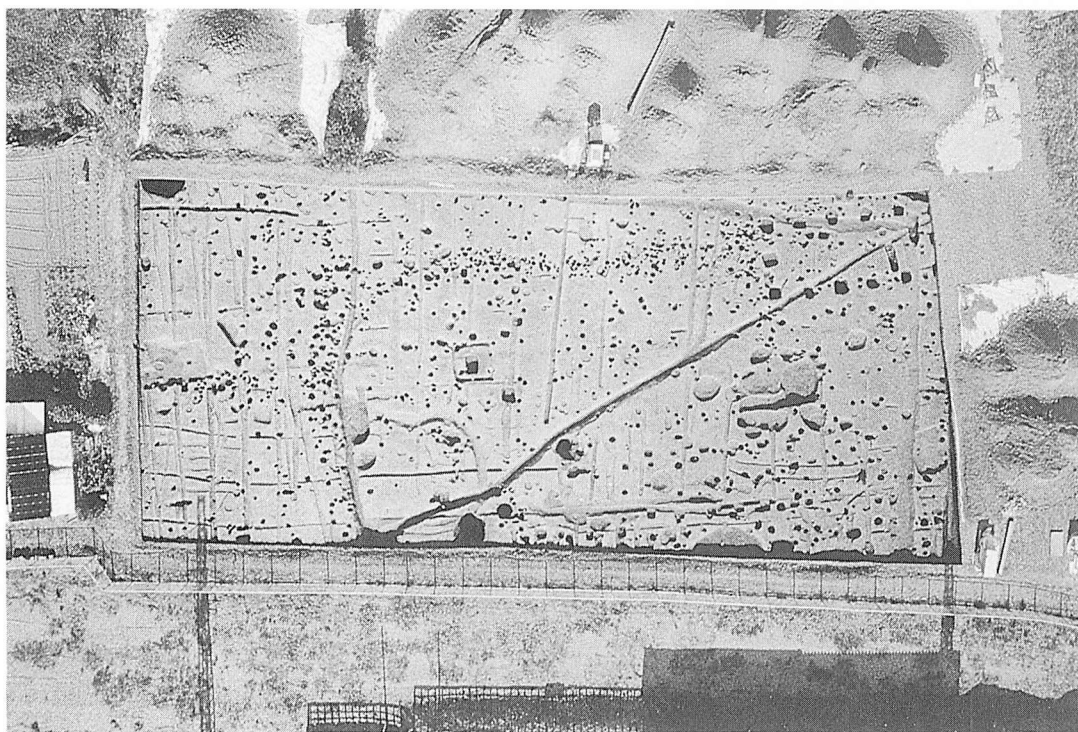


SD2404・SK6524 (西から)

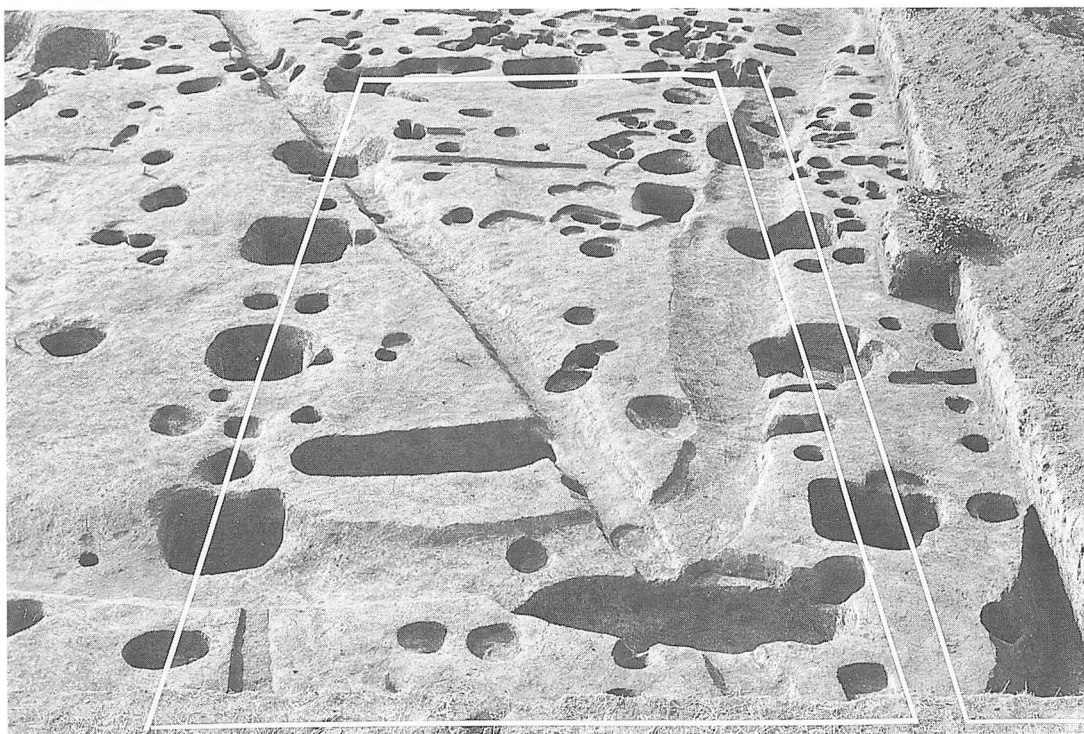




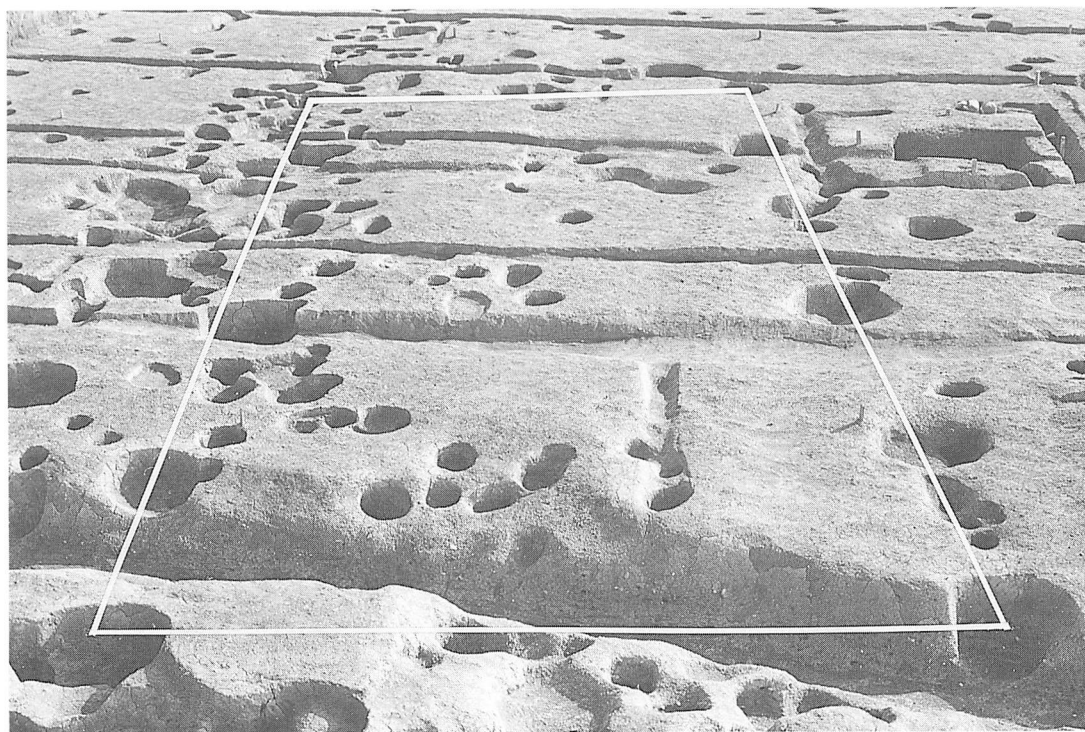
調査区全景（東から）



調査区全景（真上から）

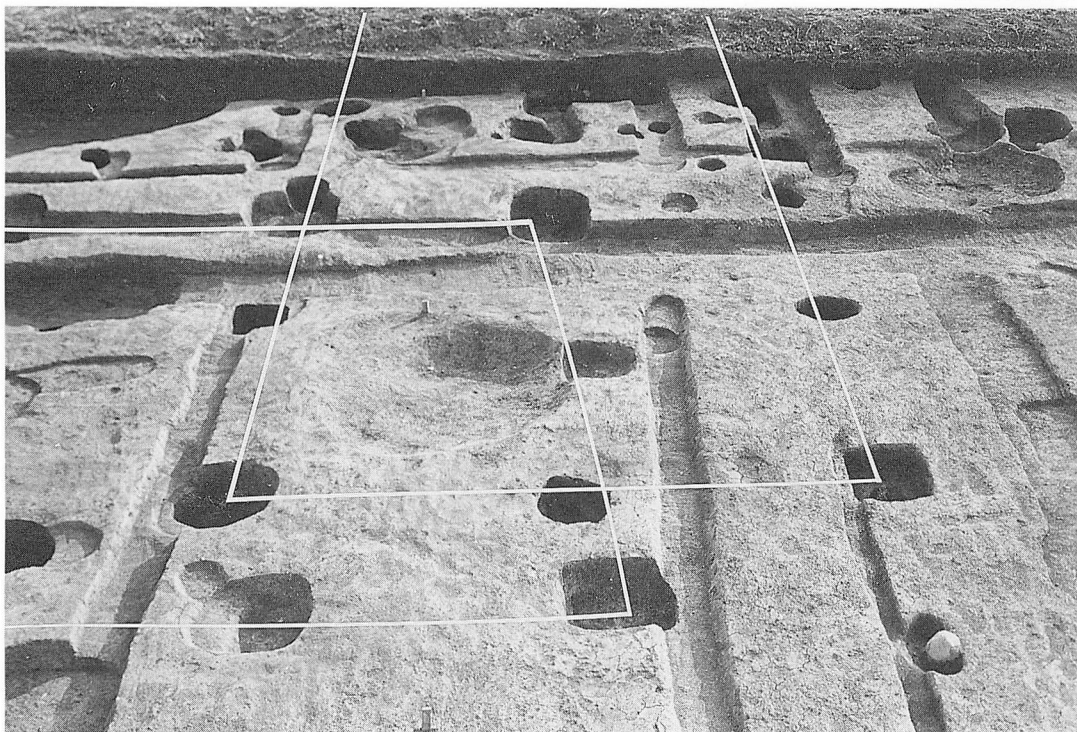


S B6592・6593 (東から)



S B6532 (西から)





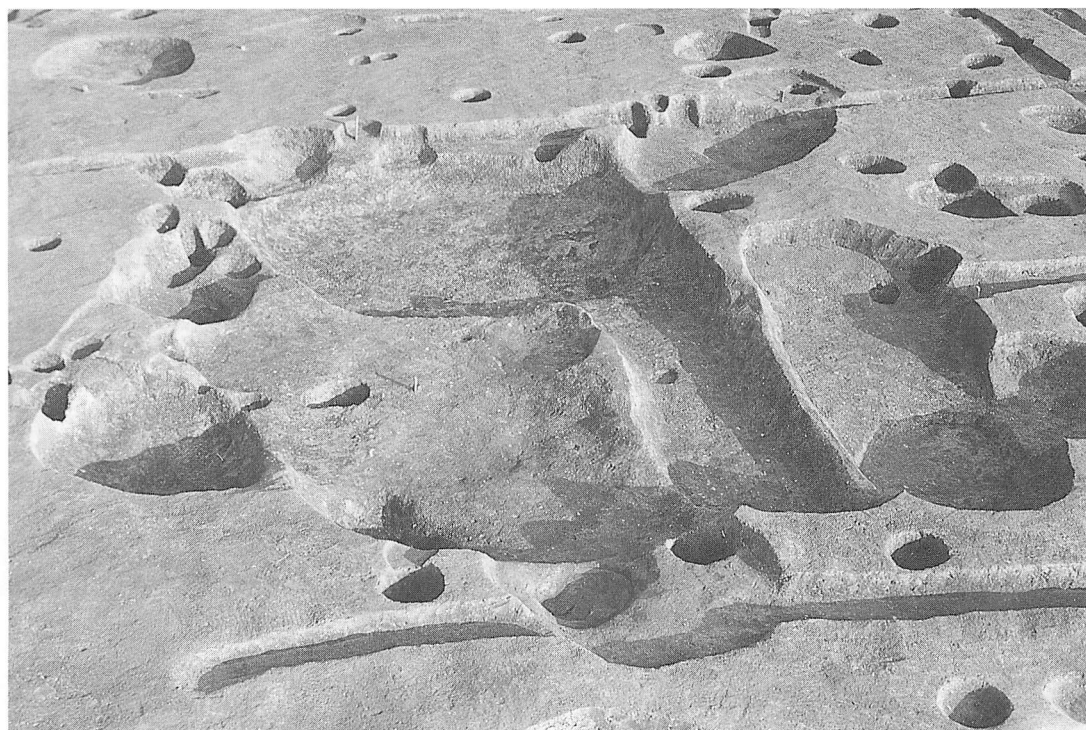
S B6539・6540 (北から)



S B6540・6541 (北から)



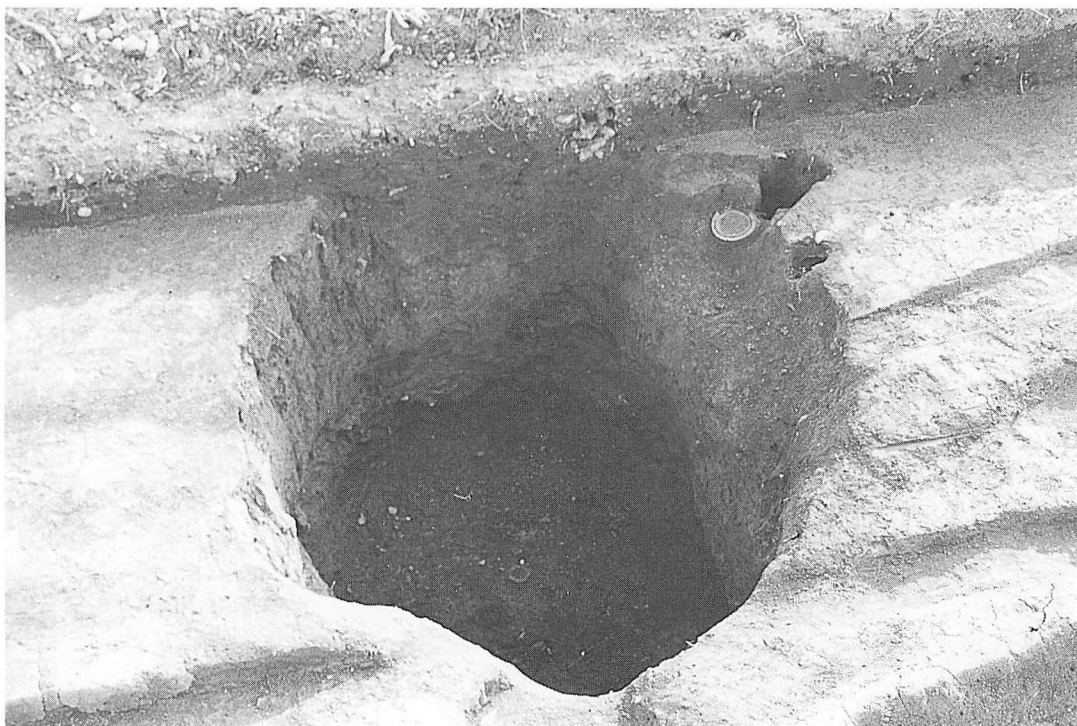
S B6553 (西から)



S K6546～6552 (西から)



SD 6556 (北東から)



SE 6535 (北東から)





S X 6533 (東から)



同 上



S X 6534 (東から)



S X 6537 (東から)

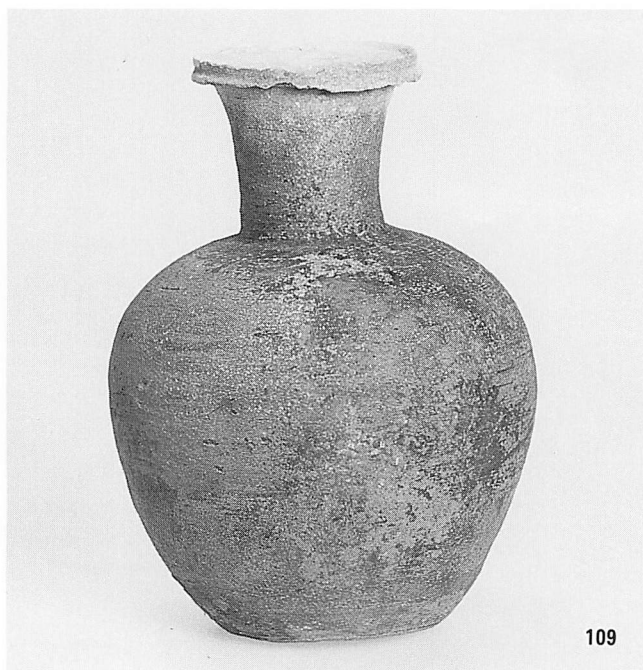
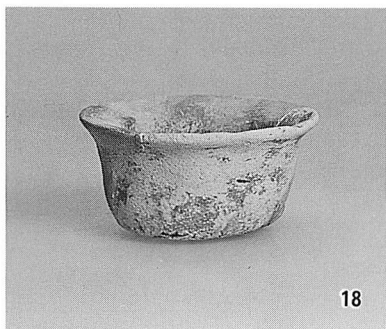


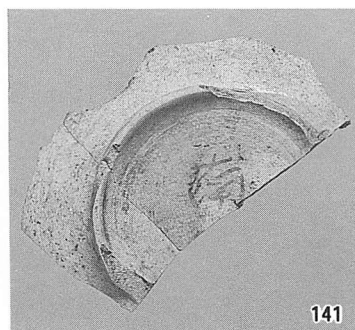
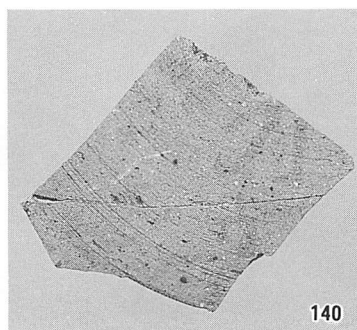
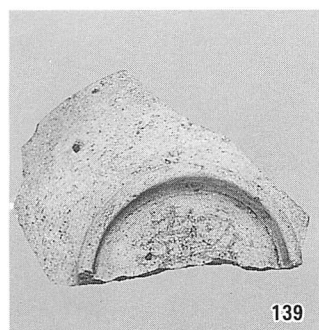
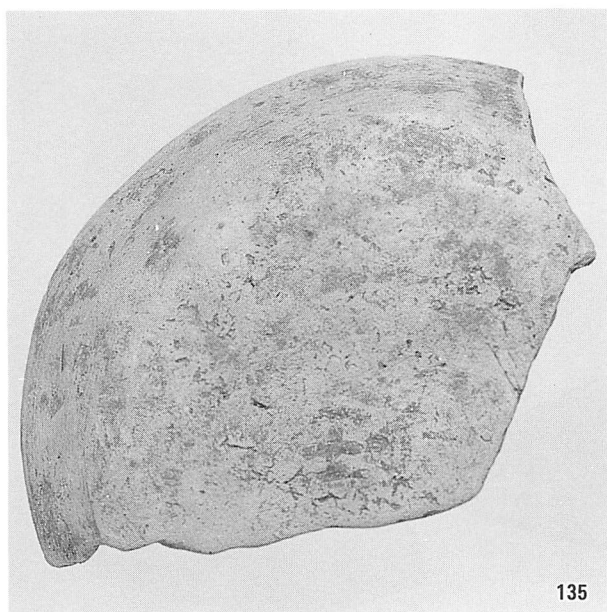
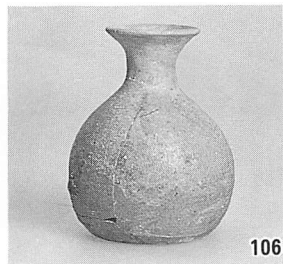
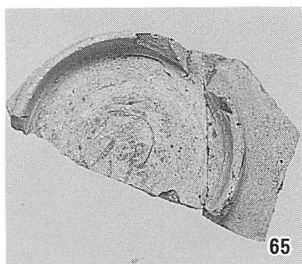
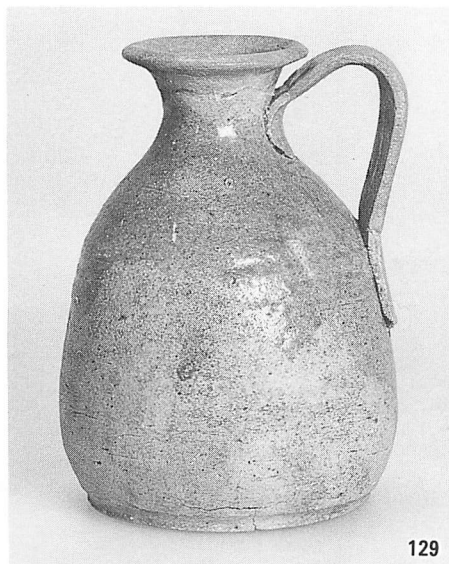
調査区全景（北から）



PL20

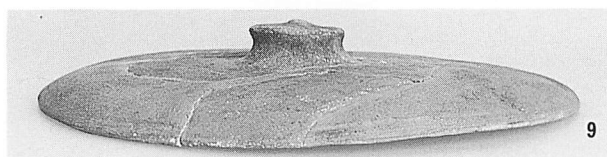
第90次調査



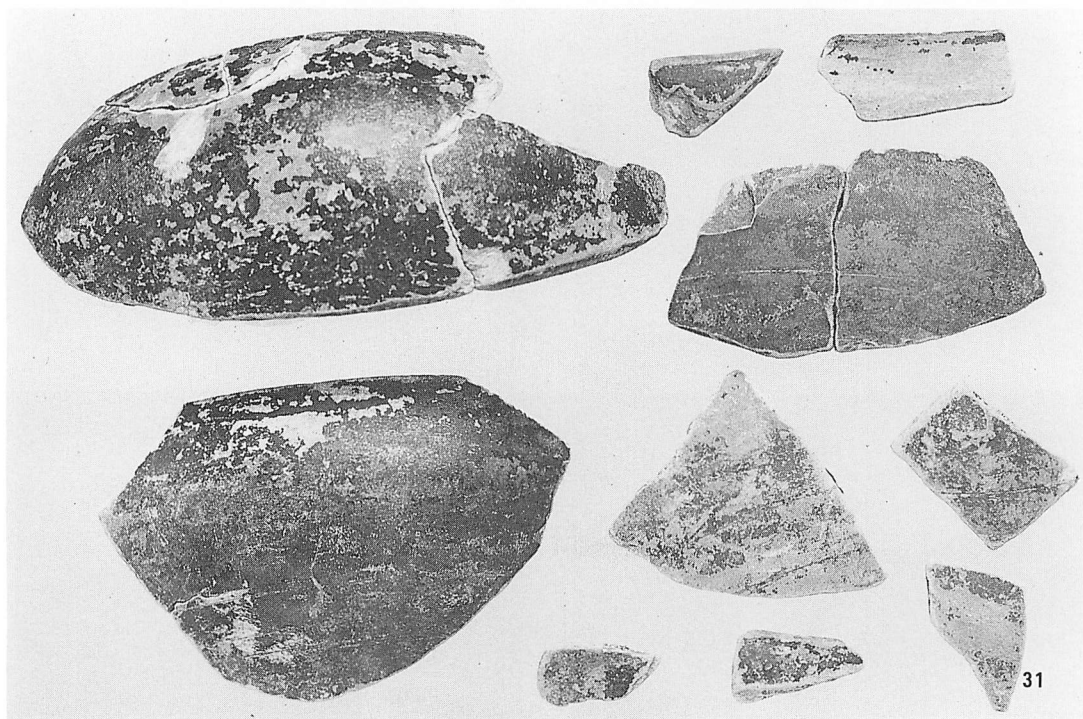
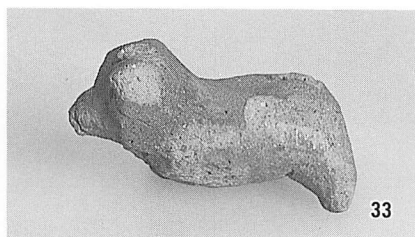
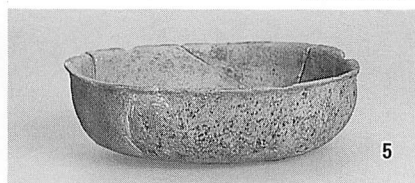




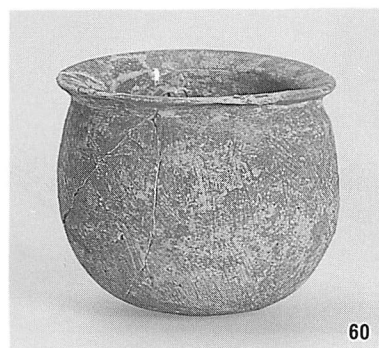
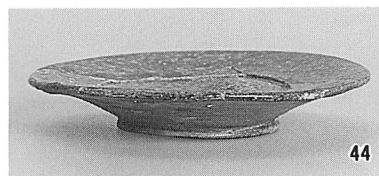
PL22

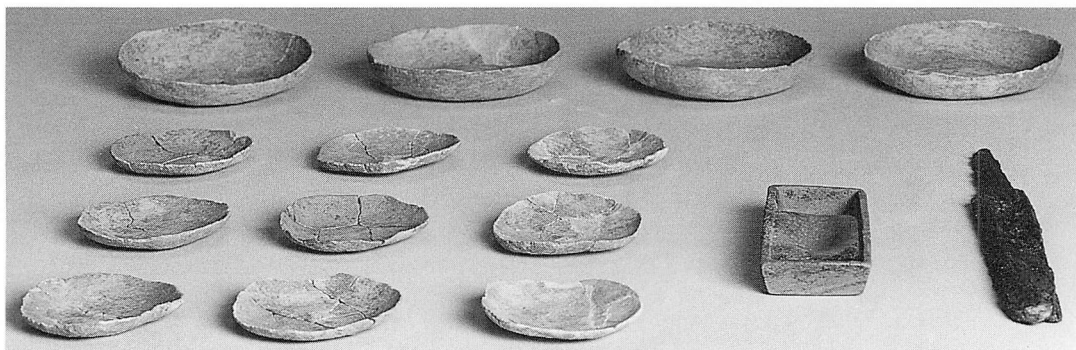


第91次調査



第91次調査 出土遺物





第93次調査 出土遺物 (上：SX6533、中：SX6534、下：SX6537)

---

---

国史跡 齋宮跡

平成 3 年度

発掘調査概報

平成 4 年 3 月 31 日

編集発行 齋宮歴史博物館

印刷 光出版印刷株式会社

---

---

本書は、齋宮歴史博物館の許可を得て、  
齋宮研究会が増刷したものである。



